

# すまいるん

季刊  
1998  
夏号

(通巻第47号) 一九九八年六月一日発行◎

## 財団創立50年記念特集号 特集Ⅱ 20世紀から21世紀へ贈る言葉

### 目次

〈風紋〉カマリー窓の映える街 イェメン・サマアの高層住居 藤井明……………2  
〈焦点〉贈る言葉とすまいるん……………4

### 20世紀から21世紀へ贈る言葉

——戦後の住宅建築史をめぐって……………6

伊藤ていじ・内田祥哉・平良敬一・林昌一  
司会 布野修司 コメンテーター 中谷礼仁  
図版構成 戦後住宅建築史のなかの住まい①……………24

### 〈贈る言葉〉

20世紀の反省／青木正夫……………32 住宅、集落に欠落した精神的空間の重み／池田武邦……………34  
戦後住宅に見られる個性化の傾向／稲垣米三……………36 住宅力カミニ確立に寄せて／太田利彦……………40  
焦土からの啓示／大谷幸夫……………42 誤算のキーワード／奥村昭雄……………46

人間の生の表現／鬼頭梓……………48 災害復興と住居デザイン／鈴木成文……………50  
図版構成 戦後住宅建築史のなかの住まい②……………54

設計図書の実情について／田中文男……………58 自由な建築家人間であつたい／津端修一……………60  
日本を壊さないで下さい／中村昌生……………62 住まいの世紀がくる／林雅子……………64  
私に映った戦後住宅建築史／藤井正一郎……………66

日本の住まい、その発想転換／降幡廣信……………70 環境と情報／山口廣……………72  
住総研五〇年史抄 大坪 昭……………74

〈図書室だより〉住まいの思想性差から空間を眺む 五十嵐太郎……………78

日本建築学会賞受賞・次号予告・お知らせ……………80

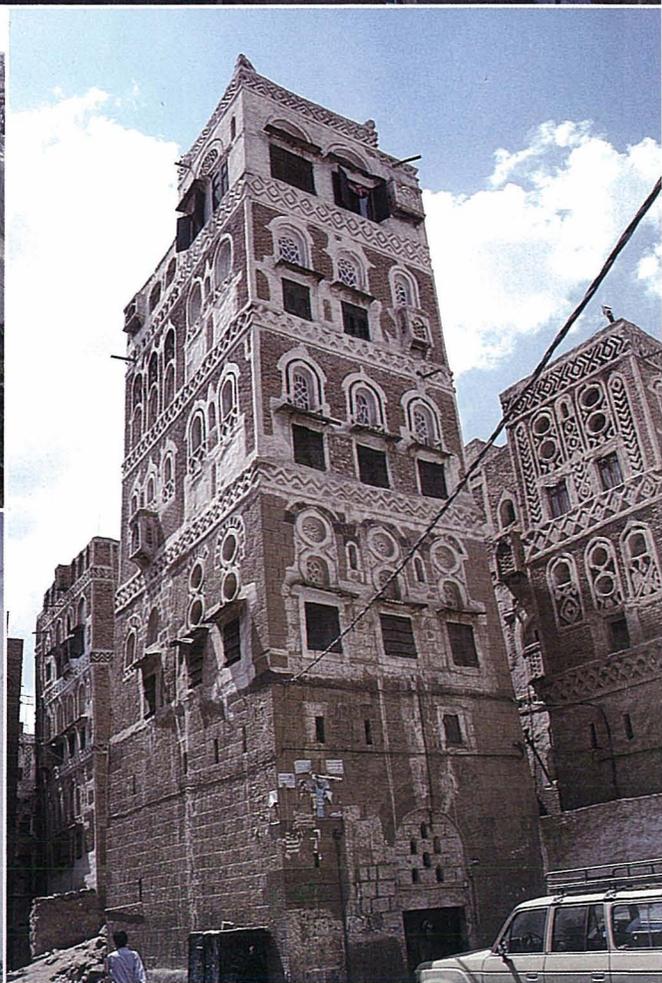
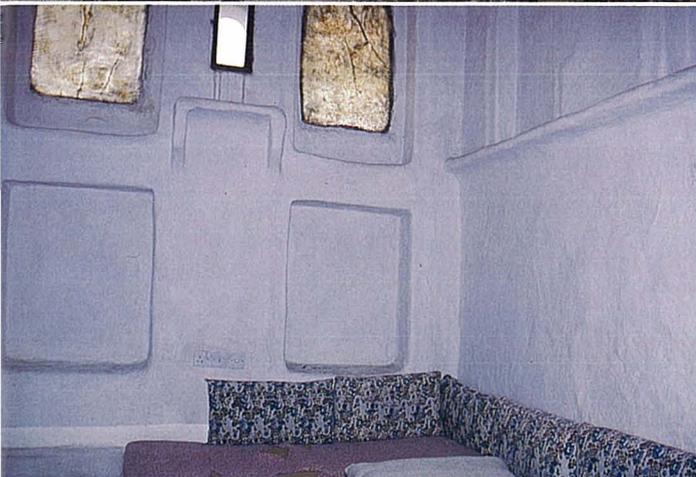
戦後住宅建築史年表……………82 編集後記……………84



高層住居が林立するイェメンの首都サマア。アラバスターで飾られ、石膏で白く縁取られたカマリー窓が土色の外壁を美しく装飾している——〈風紋〉より。



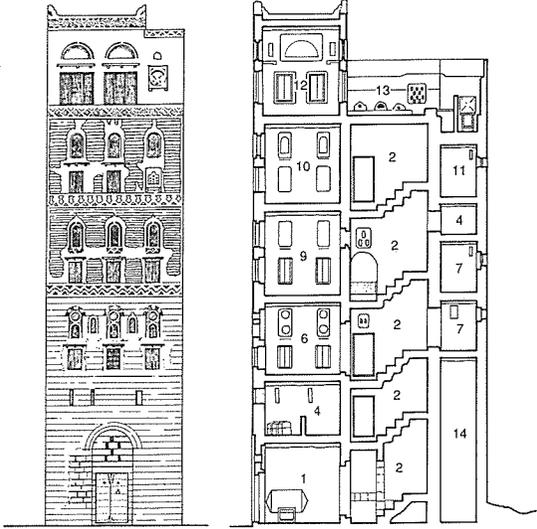
# 風紋



# カマリー窓の映える街

—イエメン・サヌアの高層住居

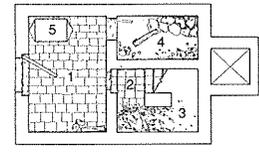
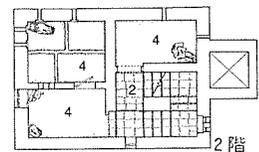
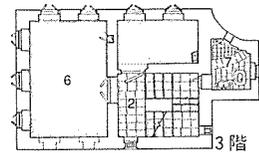
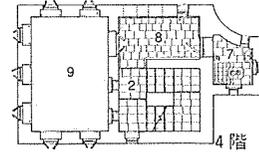
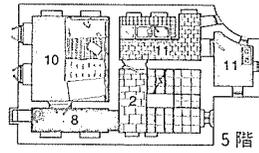
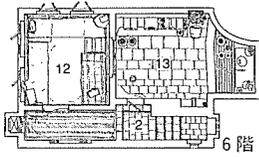
写真と文 藤井 明



正面立面図

断面図

- 1 玄関ホール
- 2 階段室
- 3 カート (qat) 置き場
- 4 倉庫
- 5 貯水タンク
- 6 居間
- 7 ハンマーム
- 8 前室
- 9 デイワーン
- 10 寝室
- 11 厨房
- 12 マフラージ
- 13 屋上テラス
- 14 汚水シュート



調査住戸平面図

アラビア半島というと平坦な砂漠を連想するが、紅海に沿う西側は山が連なり、とりわけ南西部はアラビアの屋根と呼ばれる山岳地帯になっている。イエメン共和国の首都サヌアは標高が二〇〇m余りの所にある。サヌアとは古代アラビア語で良く防衛された地という意味で、シバ王国の時代から、砂漠と紅海を結ぶ交易ルートと、紅海に沿う山岳ルートの要衝として栄えた。

サヌアの旧市街は南北約1km、東西約1・5kmで厚い土塁に囲まれ、五つの城門で守られている。街には四五のハラー(街区)と四二のモスク、六四のミナレット、二〇のサムサラート(隊商宿)、一七のハンマーム(公衆浴場)、そしてスーク(市場)がある。特徴的なのは市街地の中に、アスタンと呼ばれる菜園が広がっていることで、これはモスクに属する慈善団体により管理されている。

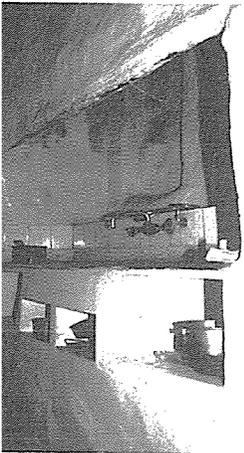
住居は五〜八階建てで、下層の二〜三層が石造で、上層部は焼成煉瓦か日干し煉瓦でつくられている。建物の外壁はさまざまな紋様により飾られている。とりわけカマリー窓(カマリーとは月を意味する)と呼ばれるアラバスター(雪花石膏)や色ガラスを

嵌めた凹形や半凹形の窓は、周囲が白く石膏で縁取られ、土色の壁と美しいコントラストをなしている。石膏は外壁を裝飾すると共に防水の機能がある。

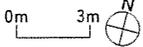
住居の内部は一階が家畜小屋(牛、羊、山羊)と倉庫で、二階は穀物庫、三階から上が居室になっている。居室部分にはカマリー窓が付いていて、ひんやりとした室内にアラバスターを透した柔らかな光が充ちている。三階が客間を兼ねた居間で、四階から上が家族の居室である。四階にはデイワーンと呼ばれる儀式的な広間がある。厨房は最上階のひとつ下の階につくられ、煙は屋上テラスに設けられた煙突に抜ける。最上階には屋上テラスの外にマフラージと呼ばれるくつろぎの間がある。ここは街を一望する格好の場所、男たちはカート(麻酔性のある茶樹で、新鮮なものを生のまま噛む)や水パイプと共に日中をすごす。

調査住居は約二〇〇年前に建てられたもので、設備的には近代化されているが、内部の空間構成は往時のものが良く残っている。

(ふじい・あきら／東京大学生産技術研究所教授)



右頁写真—菜園を囲んで高層住居が連なる町の様子と、調査住居の内部。右中写真は屋上の煙出し用の煙突。左頁上写真は近代的に整えられた厨房。



# 「贈る言葉」とすまいろん

## 季刊『すまいろん』との出会い

よく若い設計者から「建築家の高須賀晋さんのように、自分の思いどおり  
に純化した作品を創るのには、どうやって建主を説得するのだろうか？」と  
いう質問を受ける。私は高須賀さんとは永年の付き合いだが、一度もそのこ  
とについて尋ねたことがない。で、私なりに考えてみると、彼は建主を説得  
するよりも、自分の想念に素直に対処しているだけのように見える。それは  
作品をつくる場合、まず、自分のもっているイメージをつきつめ、凝縮し、  
与えられた対象に肉迫するために、きびしい自己発見を目指しているのでは  
ないだろうか。彼を見ていると、それでいて特に緊張している様子はなく、  
つね日頃、不断に住まいを考えているように思える。そうでなければ『生闘  
学舎』（一九八〇年）のような作品はつくれない。

もう三〇年くらい前になるのだろうか。清水建設に籍のあった高須賀さん  
に、当時、設計資料室長でのにち当財団の前身である「新住宅普及会」専務  
理事になられた海野勉さんを紹介された。それが縁で、私は最初から本誌の  
編集に参加することになったのである。

初めは『研究所だより』として出発し、年二回刊だったが、大坪昭さんが  
専務理事としてこられ、名称も『すまいろん』と改め、季刊として再出発し  
たのである。

私の受け持ちは、「他分野からの提言」を主旨とする欄で、演劇史家の郡  
司正勝さん、世田谷美術館長の大島清次さん、俳優の加藤武さん、谷根千工

房の森まゆみさんなどの方々にご登場願った。当初から企画には関わったが、  
責任編集者として一冊をまとめたのは、一九九六年の夏号《特集Ⅱ戦後住宅  
史を読みなおす》が初めてで、本号が二冊目である。

## 月刊『住宅建築』誌をとおして住まいを考える

平良敬一率いる月刊『住宅建築』に参加したのは、一九七五年五月号創刊  
以来で、いま（一九九八年七月現在）通刊二八〇号になる。

創刊からの基本方針を思いつくまに挙げてみると、

- ・ 門戸を開放し、有名無名を問うまい。特に新人の発掘を……。
- ・ 伝統的技術の継承と職人に光を……。
- ・ 都市中心型に片寄らず、地域に根ざした住まいづくりを……。
- ・ そして、取材には靴をへらす作業を厭うまい……。などなど。

それらを私なりに支えてこられたのは、「人との出会い」である。人が居  
て、建築が在るのだ、という思いが、住居Ⅱ住まいⅡ住み合い、そしてその付  
まいに焦点をおくようになった。人との出会いが作品との出会いとなり、そ  
れらとの関係の中で自分が生かされ、誌面に生き生きとした精気が宿るのだ  
ろう。

現場に立ち合う（取材や撮影など）ということ、いろいろな種類の作品  
の中に、日本の住まいの表現の可能性というか思い入れとでもいうべきもの  
を発掘、発見し、その場（地域）からの報告として作品を紹介することに繋  
がるのだと思っている。それは、写真家の友人たちの仕事に支えられてのこ

とである。

人と出会い、場に立ち合うという仕事をとおして、どれだけ私自身が深く耕され、影響されてきたことだろうか。

## 作品と人と集団

私の好みで戦後の住宅作品を年代順に挙げると、生田勉・宮島春樹『栗の木のある家』一九五六年、前川國男『晴海高層アパート』一九五八年、内田祥哉『自邸』一九六一年、石井修『自邸』一九七〇年、宮脇檀『松川ボックス#2』一九七八年、吉島忠男『向井邸』一九八〇年、中村昌生『茶室・宝紅庵』一九八一年、降幡廣信『民家再生／草間邸』一九八二年、三井所清典『其泉荘』一九八五年、小町和義『宮田家住宅』一九八五年、などなど。そのほか、気になる作品は、東孝光『塔の家』一九六六年、安藤忠雄『住吉の長屋』一九七六年、伊東豊雄『自邸』一九八四年。挙げれば限りがないのでやめるが、すべて実際に拝見したもので、どれも私にとって忘れがたい佳作である。

ここで住宅設計を中心に据えて、永年に亘って活動を続けてきた組織を挙げよう。まず、連合設計社市谷建築事務所（一九五七年設立）であり、林・山田・中原設計同人（一九五八年設立）である。ともに四〇年を越えて設立メンバーのまま組織を持続している。前者は、吉田秀雄、小宮山雅夫、吉田桂二、戎居研造の四人組であり、後者は、林雅子、山田初江、中原暢子の三人である。それぞれ、一騎当千の方々の個性的な集団でありながら、六〇年代、七〇年代、八〇年代と、揺れ動く社会の荒波の中で、佳作を創りつづけて今日まで組織を持続してきたことは、出色である。

また、忘れてはならないのは、ゆるい運動体として独自の設計活動を続け、新しい組織の在り方を模索している集団がある。一つは、高橋修一率いる『住まい塾』であり、もう一つは、泉幸甫たちの「家づくりの会」である。共に、試行錯誤を重ねながらも可能性を求めて、今日的社会に闘いを挑んでいて興味深い。

## 二一世紀に向けて「贈る言葉」

二〇世紀から二一世紀に、もう、ほんのわずかである。

昭和一けたの私たちの子ども頃の頃は、町を歩き廻り、いろいろな店をのぞき、空地で遊び、人にふれて学んだ。町には普請の現場がそここにあり、大工さんが木を削り、鋸を引き、鉋くずの山があった。悪童たちは、それを散らかして、叱られながら遊んだものだ。他所の大人に怒られるのは日常茶飯事で、そうしながら社会に対する適応能力をつけていった。そこには隣人たちの温かいまなざしがあった。

友だちと町で遊び、地域から学ぶといった機会は、もはや無い。だから集団のなかでの適応能力は育たない。仮に、発想力があっても、実現する能力に欠けることになる。集団としての感動を共有することができなければ、心をひらいて柔軟な感性をもつて、設計活動を行なうことは難しからう。

まして、世の中の枠組みが安定していた時代ならいざ知らず、目の前に迫った二一世紀という時代は、ゆるぎないと思われてきた資本の論理、豊かさへの期待はつきつきと崩れ去り、環境の劣悪化が進み、それに高齢化、少子化が追討ちをかける。それは思いもかけない方向に、日々変容する時代として予見し得る。

こんな時代を迎えるにあたって、F・L・ライトの『遺言』ではないが、昭和の動乱期を生きぬいてきた一九人の練達の方々に、豊富な経験と、しなやかな自然体の歩みを、「贈る言葉」に託して、ご登場いただいた次第である。

## 不断の素描

画家・村上華岳（一八八八——一九三九年）の画論に、「画家は筆を執る時はもとよりであるが、筆執らぬ時も不断の素描をやっているのだ。心の工夫は即ち筆の素描ではないか」と述べている。華岳が不断の素描というとき、それは、対象と一体となって自己を視つめる。視つめる度合いが深ければ深いほど、新しい発見につながる。この不断の努力こそが、拝受した先達たちの玉稿のそれぞれに込められている次代に向けての指針だと、私は思っている。

（立松久昌『たてまつ・ひさよし』月刊『住宅建築』顧問）

# 「葉」——戦後の住宅建築史をめぐって

当財団が設立されてから、今年で五〇年。それにちなんで「ずまいろん」誌上でも何か記念になる企画をということと、このシンポジウムを開くことになった。お迎えしたパネラーの方々は、二〇世紀を生きた方々。昭和と同じくらいの年齢の方々ということになる。「贈る言葉」というのは、時代を象徴し、その方が生き抜いた世界を背景にして、自分たちは何を考えてきたのか、これからの時代に何を考えたいか、そのあたりのことを語っていただきたいということだ。言ってしまえば、二一世紀を担う若い人たちに遺言を残してほしいということである。「贈る言葉」を受けとる世代として、ずっと若い世代の布野修司さんに司会を、そしてもっと若い世代の中谷礼仁さんにも加わっていただいた。

(本号編集企画—立松久昌)

パネリスト—

伊藤 ていじ

いとう・ていじ  
建築史家

内田 祥哉

うちだ・よしちか  
内田祥哉建築研究室代表

平良 敬一

たいら・けいいち  
建築思潮研究所相談役・『造景』編集長

林 昌一

はやし・しやういち  
日建設計最高顧問・都市建築研究所所長

司会—

布野 修司

ふの・しゅうじ  
京都大学大学院工学研究科助教授

コメンテーター—

中谷 礼仁

なかたに・のりひと  
建築史家

布野(司会) 「贈る言葉」を受けとめる世代のメインターゲットとして、私と中谷さんの二人が並ばされているようです。

伊藤ていじ先生はご紹介するまでもなく、日本の住まいのあり方をいちばん深く考えてこられた方だと私は認識しています。戦後五〇年というだけでなく、日本の歴史のなかで、住まいや都市のあり方がどうなっていくのか、二一世紀に向けての言葉をいただけると期待しています。

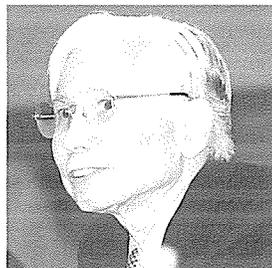
早く壊してもよいと思わせるような住まいをつくるな。  
せめて三代以上の長きにわたって、建物に歳をとらせよ。  
美しく歳をとらせよ。

伊藤 本日のシンポジウムの題は、とてもすばらしいものとは、私には思えません。要するに、壇上のお前たちはここにご参集の方々より早くさよならするのだから、何か言いたいことがあったら早く言っておけということでしょう。これは、確かに、確率的にも統計的にもまったく正しい予測に立っています。文句の言いようがありません。

でも日本には「お世辞」とか「遠慮」とかいう概念用語があるでしょう。少しは企画された方も考えていただけたらという感じがしないわけではありません。それに「神様のお目こぼし」という例外がありますから、予測ということはあてになりません。

さて、言い残したいというような大げさなことではありませんが、感じてきたこと、感じていることを、二つ申し上げたいと思います。

一つは、住まいに限らず建物は早く壊すなど言いたい。もつと正確に言えば、「早く壊してもよいと思わせるような住まいをつくるな。せめて三代以上の長きにわたって、建物に歳をとらせよ。美しく歳をとらせよ。八百年前に建てて、それが今は国宝になっている建物をつくった重源を忘れるな。そうしないと、住まいは環境になじまず、魅力ある景観が生まれることもなく、



伊藤ていじ先生

住総研創立50年記念「すまいろんシンポジウム」

# 20世紀から21世紀へ 「贈る言



文化の蓄積と継承ができないと同然になってしまい、住まいにまつわる思い出が語られることもなくなってしまうのではないかと感じます。

もう一つは、もう少し都市景観がよくなるようにしたらどうかということ。戦後五〇年の間におびただしい住まいと建築が建て続けられ、生活水準も上がったけれど、都市景観が一九六〇年頃より前に比べてよくなったとは、私にはとても思えません。街を歩いていて、新幹線に乗っていて、外の風景を眺めながら、いつもがっかりしています。そして風景のひどさは前より増すばかりです。

なおここで都市景観の都市というのは、都市対農村における都市でないことは申すまでもありません。今は山中に暮らしていても、都市に買い出しに行き、都市の医者のもとに通っているのが普通ですから、都市は国土全体とってよいでしょう。

以上二つのほかに、ひとつのエピソードを加えるのをお許しください。

私は、今年一月、ベルギー人のヨランド・ウステンズさんからお会いしたこともないし、何をしている方かも存じ上げていません。

豪華本は函入りの非売品で、そこには『オルタ・ヴォイアー邸』の論文とプロの手になる美しい写真とが載せられていました。ヴォイアー邸は、建築と彫刻と美術とが一体となったもので、オルタ設計の家具や食器と緞帳とが含まれていました。アールヌーヴォーの傑作のひとつと言ってよいでしょう。

なんでもこの住宅は、九二歳になる父が母とともに一九五七年に買い求められ、いまは兄弟とともに力を合わせて大事にしている。そしてこの住まいは取り壊されるのを免れたと、手紙には書いてありました。

ベルギーにおける名作でさえ、取り壊されそうになったのです。それがいままも残っていることになったのは、もともとのヴォイアー邸が、取り壊さない文化的な力を持っていたからだと思います。

そして私はわが国の現状を、しみじみと考えざるを得ませんでした。「この住まいは取り壊すのにしのびないから、金がかかっても残しておこう」と

いう建物は、ほとんどないといってよいほど稀でしょう。この国では住まいは常に新しい方がよいという嘆かわしい価値観が支配しています。

これでは秦の始皇帝がやった「焚書」のやり方と同じです。この世の風景が新しい住まいだけで埋められてしまうのは、貧しい心と貧しい文化を暗示するものといってよいでしょう。

布野 戦後五〇年、スクラップ・アンド・ビルドでやってきたわけですね。いまバブルがはじけてペースダウンしています。景気も悪い。もう建たない時代になってきているには思っています。だから、これまでと同じではないかもしれない。建物の寿命の話と都市景観の話は根底で非常に結びつくのではないかと思います。

続いて、内田祥哉先生は一貫して住宅を中心に建築の技術を考えて、実践されてきています。ビルディング・エレメント、あるいは工業化をずっと追求されて、戦後の一つの軸をつくられました。その後、木造建築研究フォーラム、最近では職人大学の設立——私も多少お手伝いしておりますが、そういう流れのなかで「贈る言葉」をいただけると思います。

これからは住宅にはお金をかけないで、文化にお金がかげられる時代にしていかなければいけない。

内田 若い人に「贈る言葉」というのは、うまくいったことより失敗したことを言うほうがいいのだろうと思う。ただ、その話には差し障りがあったりしますから、私に關することだけ、幾つか失敗例はお話しできると思います。

建築基準法の改正がいつ芽を出すか、台風の前の静けさみたいな状況で、われわれにもはつきり

したことはわかっていません。その建築基準法をなぜ改正しなければいけないかという、建築研究所の大橋君の本が大変評判になっています。大橋君の言ったことで印象的なのは「今までお役所の仕事というのは、すべて『失敗



内田祥哉先生

がない』という原則できていた。その結果、失敗を公表しなかったために同じ失敗をなんべんも繰り返している」ということです。

今回の阪神の大震災でも、何が悪かったのが公表されていない。そのために、結局、何をよくしたらいいのかを結論づけられない。それがいまいちばん大きな問題ではないかと思っています。

三〇年ほど前、「一〇年後のプレハブ建築」というテーマで本を書かされたことがあります。プレハブ建築が出たてで、まだ育っていないころですから、一〇年後を見通すのにどうしたらいいかという考え、結局、一〇年前はどうであったかを見て、統計的にみて右肩上がりであれば、その上がりぐあいで一〇年先がみえるというふうに、一〇年後を書いたのです。その結果は、そう間違っていなかったと思います。

しかし、現在は右肩上がりから平らになり、ある部分は下がりつつある。今は一〇年前をみて一〇年後を予想できる状況ではありません。まして五〇年前をみて五〇年先を予想しようなんてとうていできそうもありません。

それはそれとして、この五〇年間にどんなことが変わったか、私なりに考えていることが幾つかあります。五〇年前は、新築というのは一生に一度のこととみんなが思っていました。「住宅の寿命は人の一生より絶対に長い」と一〇〇%信じられていたわけですが、最近ではそんなことは信じられていません。「建築の寿命がせめて人間の寿命ぐらいに長くないものか」と、私は思います。

人が一生に二回家を建てるとすると、一生の稼ぎの何分の一を住宅に払うことになるのか。いま可処分所得の何分の一とか、年収の何倍とかいっている予算がありますが、そういう比率がすべて倍以上になる。住宅を建てるために一生稼ぐという時代はもうやめにして、これからは住宅にはお金をかけないで、その分、文化にお金がかげられる時代にしていかなければいけません。そうになると、住宅は長もちさせなければいけないということになります。それから、住宅の質がずいぶん変わってきていると思います。かつては住宅は、家族制度のなかにあったわけですね。住む人がどんなに変わっても、

会社の内容が変わらないように、家は長男が住み継いでいた。いまはそうではなく、一所帯一住居、一世代一住居という状況になっています。

かつて和服が洋服に、座式が椅子式になったほどの変化は、これから先、もうないだろうと思いますが、ライフスタイルが変わることもある。たとえば外食が非常に多くなってきました。「ないしょく」という言葉は、昔は針仕事なんかのことだったのに、最近は、うちで御飯をつくって食べるのを「肉食」というのだそうです。その中間に「中食<sup>なかじき</sup>」というのがあって、中食が非常にふえている。そうすると、生活のスタイルも変わってくる。食事の部分がどんどん萎縮していくかもしれないし、あるいは口と胃袋が外に出ていったような住宅になっていくかもしれません。

最近よくいわれていることでは、在宅勤務。どこまでそれがうまくいくのか、まだ私にはよくみえませんが、少なくともラッシュアワーみたいな時間帯は、将来なくなっていくだろうと思う。そういうところで、住宅の中身が変わってきます。ライフスタイルにもかなりの変化があるでしょう。

ライフステージの変化も当然あるわけで、夫婦で家をつくれれば、子どもが増えたときに少し狭い思いをする。年をとってくると、広すぎる家になる。そういう変化に耐えられるものでないといけない。

もう一つ、収入の変化というのがあります。日本では若い時からだんだん年をとるに従って収入は上がっていくと考えられてきました。ヨーロッパの人たちはそうは考えていなくて、若い時代には収入が高く、ある時期になると収入が落ちる。日本も本当はそうなのですが、それに応じて生活ができるような住宅でなければいけない。収入が多いときにはお客も多くなる。稼げる時期と稼げない時期を一つの家で暮らすとすると、収入とライフスタイルとライフステージの変化に耐えられる家でなければいけないということがいわれています。

それに加えて、住宅の中にいろいろな仕事を持ち込まれますから、住宅と非住宅の区別がはっきりしなくなってくる。現在でも、住宅金融公庫からお金を借りて建てた都心のマンションの何割か住宅かははっきりしていな

い。青山通りでは九〇%以上事務所になっている。住宅としてつくるのがいいのか、住宅兼店舗・事務所のかたちのものがあるのか。これは法律の問題なども関係してきます。住宅にしか使えないものでは不便になっていくだろうと、私は予想しています。

**住宅を住宅としてだけで考えられる時代ではなくなつた。  
もっと広い目で見なくてはだめだ。**

内田 その背景に、心配しているのは、日本の建築行政が変質してきていることです。五〇年前は「建築行政」だったのですが、最近は「住宅行政」の下に「建築行政」が隠れてしまっている。建設省には住宅局しかなくて、そのなかで建築行政をやっている。かつては建築行政の一部分に住宅行政があった。で、そのことがいま、住宅というものを住宅以外に拡大できなくて、非常に息苦しくしているように思います。

いま、住宅行政の専門家は非常に多くなつていて、建築基準法も住宅行政のなかの一部分のようなかたちでできている。しかし、建築行政というのはもっと大きな都市行政と絡んでいかないとうまくいかない点があります。少なくとも五〇年前はもっと大きなスケールだったのが、どんどん萎縮してきて、学校建築は文部省の所管、病院建築は厚生省の所管の部分が増加し、鉄道関係の建物も住宅行政のなかでは手も足も出せないという感じになってきている。建築としてのまとまりを考えたときに、非常にやりにくくなつてきています。それが建築基準法の改正で改善されるとは私には思えません。この先大きな重荷になっていくのではないかと感じています。

住宅に戻って考えてみても、いまや住宅を住宅としてだけで考えられる時代ではなくなつてきている。もっと広い目で見なくてはだめだということが、次世紀に贈らねばならない言葉だと思う。それが果たしてできるかどうか。

第一には、耐久性を長くすること。そのためには住宅だけの用途でいいかどうかということが絡んできます。

それから、いいものをつくらなければいけないのに、いま発注者、お施主

さんに見る目がないという悲惨な状況です。民間企業にはかなりそういうことを意識している方がいるのですが、少なくとも官庁工事に対してはまったくそういう意思がなくて、予算が消化できればいいということで作られてくる。

それは、発注者としての役割を持つ大きな組織の人事が、非常に短期間に交替していること。ほとんどの人が建築に対する造詣がないんですね。そのため、設計者は誰でもいい。入札でも何でも決まればいいということになっている。設計者を決めるのに入札で決めるとい問題は、単に建築家のエゴで言っているのではなく、建築をよくしていくという非常に本質的なところにかかわり合っていると思います。

発注者教育ということがいまままでまったく抜けていた。それもこの五〇年間の反省ではないかと思っています。

布野 建基法の改正は大問題です。いま非常に不透明なブラックボックスの中で議論と決定がなされています。

阪神・淡路大震災について、内田先生は学術会議で発言されていて、「情報公開と徹底真相究明」を訴えていらつしやいます。『建築雑誌』四月号に、私がインタビューさせていただき、その内容が載っています。戦後ちょうど五〇年の切れ目で阪神・淡路大震災を経験したわけで、震災が露呈したものは、きょうの話題にも密接に関係があると思います。

冒頭に「うまくいったことよりも失敗したことを伝えたほうがいい」とおっしゃいました。後の議論のために、幾つか失敗したことを挙げていただけますか。

内田 建築局がなく住宅局になっているというのは、間違いの一つに挙げるとよいと思います。

それから、建築というものは技術として捉えられています。昔は技術というものをサイエンス寄りに考えていました。英語で「アート・アンド・サイエンス」というように、技術というのは創造するもので、世の中にないものをつくっていくことです。サイエンスというのは、世の中にあるものにつ

いて論理をつくること。つくるのは論理であって、物はずくらない。それを大部分の人は混同しているように思います。

私自身としては、ビルディング・エレメント論をやっていたころは、サイエンス的に考えすぎていたように思います。いまはアートとして考えていますから、技術というのは、デザインであって、提案である。提案することとは、結局、世の中に何かを残す。残すことに対しては、必ず責任がある。そう問題をつなげて考えていかななくてはいけないと思います。

布野 デザインをするということの意味が全く理解されていない。重箱の隅をつつくような仕事ばかりが蔓延しています。状況はひどくなっている気がします。続いて、平良敬一さんは、ご承知のように、戦後の生んだ名編集者ジャーナリストです。『国際建築』『新建築』『建築知識』『建築』『SD』そして『住宅建築』の編集をやられ、いまは都市、あるいは都市景観を中心的な問題として『造景』というメディアを興されて、その編集長をなさっています。言いたいことが山ほどあるような顔をなさっています。

一九六〇年ころまでの小住宅は、建築家が理想に燃えて設計に取り組んでいたことで、現実との厳しい緊張感とその作品の中に感じられた。経済状態がよくなるに従って、本当にいい住宅ができてきたが、そういう緊迫感を感じなくなつた。

平良 私は建築家ではありませんし、建築の研究者でもない。たまに建築評論家という肩書きをもらったりしますが、この五〇年間に書いたものは大した量ではないし、そんなにすごい評論も生み出したとは思っていません。私の存在というのは、建築雑誌を次から次へ出してきた編集屋なんです。編集という仕事は、そのむずかしさや楽しさが一般の人にはわかりにくいのですが、私が経てきた雑誌は、おもに建築家たちとのつき合いのなかで、それらの建築家たちの作品を掲載して世に問うとい



平良敬一先生

うことにすぎないんですね。

そのなかで感じたことはいろいろあります。建築というものをあまり勉強しないまま編集屋になったために、おそらく建築家の方々は勉強の仕方方もずいぶん違う。建築家の方々から比べれば、私は非常に観念的に建築をとらえたり、逆に非常に感覚的にとらえています。それ以上に突っ込んで建築というものを論理のほうから分析して、自分なりの建築理論像をつくっていくという仕事は、どうも怠け者で、してきていません。

きょうこれからお話しするのは、その感覚の問題なんです。感覚を通して感じていることと、自分の建築に関する考え方、建築思想に関連して、五〇年間にいちばん痛切に感じたこと、それを代弁して語ってくれたのが宮脇檀さんです。八二年に彼が『近代小市民幻想』というエッセイを書いていきます。「戦後の建築家が設計してきた住まいというのは、リビングルームを中心につくってきて、それが普遍的になってきたのだけれど、実際に住む人はリビングルームをリビングルームとして使っていない。これは大変問題ではないか」ということです。

私もこれは編集屋としていちばん強く感じていたことで、リビングルームというのは、設計図面上でそう書いてあるだけで、実態はせいぜい立派な応接間として使うぐらいで、あまり使っていない。家族が集まって団欒し、家族を訪ねてきた人をそのなかに迎え入れるという役割がリビングルームだろうと思いますが、そういうふうには使われていない。家族が集まる場所は、それとは別に昔流の茶の間のものがこっそりとつくられて、そこに集まっていたり、もつとひどくなれば、みんな個室に引っ込んでしまっている。

やっぱりこれは、建築を設計するほうが非常に観念的、概念的に住宅を考えている証拠です。それを注文してくるクライアントのほうも、実際にそこで生活する段になると、だいたいイメージから逸脱した生活。この生活の実態のほう为本当の生活であって、建築的に表現された空間はフィクションに近いということがいちばん大きな問題。その解決のメドをこれから真剣に考えなければいけないのではないかと。

それから、戦後五〇年を生きてきた実感で申しますと、一九四五年から六〇年ぐらいまでの、私が『国際建築』『新建築』に携っていたときに体験した小住宅は、建築家が非常に理想に燃えて設計に取り組んでいたことで、現実との厳しい緊張感とその作品の中に感じられたという印象が非常に強い。もちろん、そのころの住宅は、いまからみると、非常にコンセプトチュアルなのですが、それが建築技術、そして経済の厳しい条件のなかでつくられたために、空間的にも緊迫感があった印象をもっています。その後、経済状態がよくなるに従って、本当にいい住宅ができてきたけれども、そういう緊迫感をあまり感じなくなってきました。

最近になると、住宅は一見非常に豊かにみえるのだけれど、何か空々しい感じをもつようになった。それは私がそう感じるのであって、実態はそうではないのかもしれない。

そういう感じで住宅をみているのですが、僕らよりひと回り若い社会学者、見田宗介さんが、『現代日本の感覚と思想』という本で、日本の戦後の日本人の感覚を時代的に分類し、一九六〇年まで（プレ高度成長——高度成長の前の時代）を「理想の時代」、それ以後七〇年代の前半まで（高度成長期）を「夢の時代」、七〇年代後半から今日まで続いている（ポスト経済高度成長期）のは「虚構の時代」としているんです。

この「感覚と思想」は、日本の大衆がもっていた感覚と思想と捉えればいいのですが、それがたまたま、私の『国際建築』『新建築』の時代が「理想の時代」に相当し、「夢の時代」に私が手掛けたのが『SD』、そして『SD』から離れて建築思潮研究所という編集グループをつくり「住宅建築」を創刊し、さらにいま『造景』という雑誌に移っているのですが、その時代が「虚構の時代」とされている。それと自分の感覚が妙に一致しているのかなと考えるのは、このごろ透明感の過剰な住宅がたくさん出てきている。それがいまの時代を非常に象徴していて、私はついていけないんです。生活を抜きにすれば、ああなるほど美しい、住宅でなければいいと思っっているんですが、もちろん、そういうものと違う住宅デザインの流れはあります。むしろそ

こちらのほうに流れを変えようと、ごく普通の住宅を『住宅建築』では扱うようにし、いわゆる和風住宅もどんどん取り上げ、民家の研究にも手を出しました。もっとわかりやすくいえば、非常にバナキユラーな要素を取り込んだデザインに私の心理が傾斜していったという経過があります。そうなったのは、その前の「夢の時代」高度成長期に、日本人の生活が大地から浮き上がってしまったような感じをもっているんですね。もう一度、われわれの生活を土に根づくような方向に転換する流れが出てきてもいいのではないかということが、住宅デザインについて感じていることです。

この方向だけが唯一正しいとは思っていません。今の住宅の設計思想は、きつと五つか六つの潮流に分けることができると思いますが、そのなかで有力な流れをつくりたい。それは大地に根ざす生活というものを軸にして住宅をつくる、住むという、思想と建築の設計が結びつくようなあり方を探求していきたいということです。

もう一つ、いま『造景』という雑誌を出しているのは、地域主義を推進したいということ。政治的には地方分権の問題があります。われわれの環境をみると、建築・土木・造園、この有力な分野がタテ割りで、協力関係ができていない。われわれの環境をよくするには、この三本の軸はもつと水平に提携・連帯していく構造をつくりあげないといけないのではないかと。それが「造景」という用語のなかに込めた私の思いです。

そういう意味で、地域のコミュニティがどうあるべきかという視野のなかで戸建て住宅も集合住宅も考えていくべきだという考えからすると、戸建ての住宅にあっても、建築のかたちと町との関係、パブリックなスペースとの関係を大事にしていかなければいけないし、それは住宅の内部構造とも非常に関係が出てくるに違いない。そういう意味の探求、模索を続けるべきではないかと考えています。

そして都市の問題を考えると、農業の問題を考えざるを得ない。農と結びつく都市をこれから二一世紀は考えていかなければならぬだろうと思っています。いまだ超高層がボンボン建ちますが、あれは経済主義の典型であ

って、地域を視野に入れた設計、住宅建築のあり方としてはとんでもないこと。そのためには、地方に新しい都市集落——「田園都市」といつてもいい。いままでとは違う魅力のある都市をつくる方向にいつて、人口がそちらに流れるようになれば、大都市に建つ超高層への流れを抑制することもできるのではないだろうか。そういうことが議論の対象、あるいは研究の対象になつてくれればなと、そんなことを考えています。

布野 大変広範囲にご指摘をいただきました。「最近の住宅は空々しい」という話は、神戸の少年の事件以降、ナイフが飛び交うのがそれに関係するのかなと思います。今バーチャルな世界とリアルな世界の区別がつかない世代が育っている。すべてがフィクションとなりつつある。「建築家がつもりだす空間がフィクションである。実態とその間のズレがずっと気になっている」とおっしゃいました。それは大変な問題です。そこには建築界独自の問題がありそうです。ちょっと意地悪な質問かもしれませんが、戦後を振り返つたとき、建築雑誌というメディアがその問題に寄与していませんか。

平良 大いにあると思います。編集者の悩みというのは、それが非常に大きいかも知れません。戸建て住宅を主に扱うとき、戸建て住宅が成立する社会的な背景まで含めて問題にしていけることができなくはないけれど、実際に解決の方向を見出すような議論はなかなかむずかしい。世の中の流れに乗らないと雑誌は売れないということなんです。それに対抗するイデオロギーや方向で雑誌をつくることは、なかなか部数を確保できないという悩み。

そういう悩みを建築の設計者の方々と共有することが、ある部分ではかなり進みますが、それ以上にはなかなかいかないもどかしさがあります。単に建築のなかだけの運動ではなく、もつと広い基盤のなかでの運動に転換、あるいはそういうものと連携していかないといけないのでしょうか。建築の政治学という分野が建築学のほうではあまりないみたいだし、でも建築家の実践としては非常に大事な動きだと思っんです。

そういうことを考えながら、それに近づいていくような方向もイメージとしてはあるのですが、そのへんは布野さんのほうがもつと厳しい批評ができ

るのではないでしょうか。

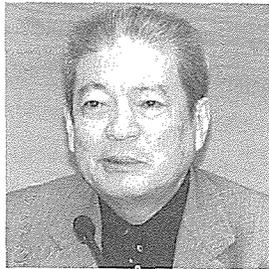
布野 平良さんから「超高層は要らない。嫌いだ」という話がありました。林昌二さんには、大きい建物を設計される方だというイメージがあるかもしれませんが、先ほど内田先生からは「失敗したこと」という話が出ましたが、林さんには『建築に失敗する方法』という著書がすでにありますし、自宅についての住居論もあります。林さん独自の観点から「贈る言葉」をいただきたいと思います。

「私たちが追い求めてきた快適さというのは、つくられた快適さ、思い込まされたもの。挑発されてつくられた欲望に基づくもので、都市とか建築がそういうものの演出装置になっていると、つくづく思わざるを得ない。そのおかげで、私たちがずっと長い間かけてつくってきた生活の作法が崩れていきつつある。」

林 私はあまり住宅を設計していませんから、一言弁解しておきますと、これまでやってきた仕事はほとんどオフィスです。だんだんわかってきたことは、オフィスというのもしょせんは暮らしの空間だということ。しかも、暮らしのなかで費すその時間がとても大事な場所だから、ただ床、壁、天井があればいいというものではなく、時間を大事に過ごせるようにつくらなければいけないんだと考えるようになり、そのつもりでやってきているんです。

まず最初に、「何のための便利と浪費か」ということ。非常に浪費的な時代だと思うのですが、結局、二〇世紀とはどういう世紀だったのかを考へざるを得ない。前半は戦争ですね。後半も好んで戦争をしている国もあります。日本ではただの浪費をしてきた。戦争も、もちろん大変な浪費で、その点からいうと、前半も後半も似たようなことをやってきた。

その戦争の結果、日本はアメリカに飲み込まれて、アメリカ的な浪費の生



林昌二先生

活が実現した。「大変快適な生活ができるようになった」と皆さんおっしゃるけれど、どうもそう簡単にうなずけない節がある。こういう場所で、真昼間から電気をつけて、空調をしたなかで話をするというのは、とても変なことです。前半、私たちが住んできた生活環境はそういうものではなかった。それでも住んでこられたわけですね。

しかも、快適になったのはいくことばかりでなく、アトピーなんていうのが出てきて、「その原因は回虫がないせいだ」なんて話になり、どこかに行って回虫を買って飲むとかという人も出てくるという、大変なことになってきている。この行く末はあまり明るくないなど、皆さんだんだん気がついてきたのではないのでしょうか。

それというのも、快適さというのは、つくられた快適さ、思い込まされたものであって、挑発されてつくられた欲望に基づくものであり、そのもとには経済的な覇権欲みたいなものがあり、その後ろに石油の世界があり、二〇世紀私たちが石油漬けになってきた。超高層も空調も自動車も、都市とか建築がそういうものの演出装置になっていると、つくづく思わざるを得ません。そのおかげで、私たちが長い間かけてつくってきた生活の作法が崩れていきつつある。まだ一〇〇%は崩れていませんが、ずいぶん崩れてしまったということが大変惜しく思われるわけです。

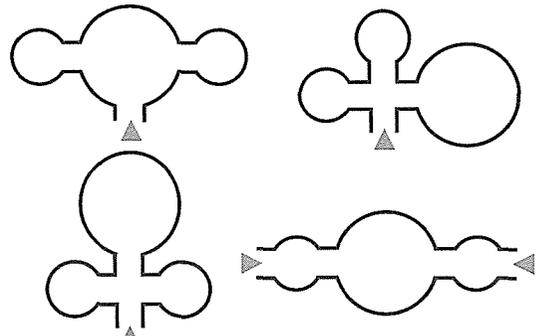
次に、「住まいの社会化・商業化・外部化」が進んでいるわけですが、そのことの意味はいったい何だろうとつくづく考えさせられます。住まいの中の要素が次々と外に出ていく。「社会化される」といえば大変聞こえがいいですが、「商業化される」ともいえる。家の中に立派なキッチンをつくりながら、それはほとんど使われなくて、近所にコンビニがあればそれでいいという生活。便利になった、時間が浮いたということは、恩恵にあずかっているけれども、そこで浮いた時間を何に使っているのか考えると、どうもおかしなことがある。結局、それで時間を浮かして、ときどき炊事をしようということになっていくかもしれません。

もっと大きな問題として、住居が商業化されて、売り買いするためのもの

になつてゐる。今日、家を買う人の意識は、買うときから売ること考えるようになった。これが非常に大きな変化だろうと思ひます。売りやすい家しか買わない。ということは、売れる家しかつくりたくない。どれも画一化していくわけで、一般化されたライフスタイルを受け入れざるを得ないようになってきている。そういう現象が住まいに大きく流れていきます。この商業化、外部化していくことの意味は、いったいどうなつていくのだろうか、これでいいのだろうかということ。考え直してみると、「戦後の初心」に戻らざるを得ないという気がするわけです。

次に「住まいが暮らしをつくる」ということ。暮らしが住まいをつくるけれど、住まいのほうも、よくも悪くも暮らしをつくつてくれる。住まいの形を私なりにいろいろ考えて整理した四つのパターンを見ていただきます。山本理顕さんが蓮の花のようなパターンを提示して、それに沿つた住宅を発表されたことがあります。私はそのパターンに感心しまして、では、ほかの家をそれにならつて描いたらどうなるかとやつてみたものです。

左上が戦後初期の住宅で、玄関からまずホール兼居間に入る。廊下をつくと無駄だということでしたから、ホールに接続して寝室が左右か前後かにくついている。そういうホールと廊下兼用型のような家。いまでもあると思ひます。そうすれば、リビングがまったく無駄にはならない。逆ですかね。右上の図は、私たちがこういう家をつくらないといけないと思わされた、たとえばマルセル・ブロイヤーの設計した家といったような家のパターンです。入口から入ると、片方の端にリビングルームあるいはラウンジというよ



住まいの形

室があり、リビングルームを通つていなくても個室にいける。家族の部屋は袋になつてゐるから、落ち着いてゐることができるといふ特徴がある。

左下の図は、近ごろの日本のハウスメーカーのつくる住宅。下宿とか学校の寮とかに近い考え方ですね。入口からまず廊下があつて、廊下の両側に個室がくついでいて、奥に共用室がある。もちろん、台所、食堂などはその奥にある。このタイプだと、共用室を通らないで個室にいかれて、家族の目にふれないで遊びにいける。

右下の図は、山本理顕さんが蓮の花のような形で提示したパターンを私なりに直して描いたらこうなつたものですが、個室がまずあつて、個室は外に開かれていて、個室を通つて共用室に行くことができる。山本さんが設計された家にこういうパターンのものであり、かつ、共用室があまり定かでないようなものさえあつたように思ひますが、個室を主に考えていくとこうなるのではなからうかと思ひます。

しかし、これが歴史的な変遷というわけではないし、ある方向を示しているわけでもありません。家族というものが世の中にあつて、それが大事だとされる以上は、住宅は、左下や右下のようなタイプはきわめて望ましくない。それらの形では、家族は要らないのかもしれない。要らないのに無理して一軒の家に入るといふことは、かえつてよくないのかもしれない。

家族なんてものは要らないという考え方も、戦前、戦後を通じていろいろ試みられています。ナチがやつたレーベンスラウムがテレビで紹介されてきました。非常に優れたアーリア人の子どもをつくつて、その子どもを家族から引き離して集団生活させて、理想的な青年に育てあげるといふことをやつた結果、「私はこうなつた」といふ人がそのテレビに出てきて、私は非常に衝撃を受けました。ほとんど精神的に自立できない、「とても変な人になつた」と本人もいつてゐるし、見てもそうですし、その人の子どもも変になつてゐるといふことで、いわば普通の社会生活が送れなくなつてゐる。

しかし、そういうことをある理想の状態だと考えてやろうとする人がときどきこの世の中には出てきます。右のほうばかりでなく、左のほうの社会で

もやった例があるし、富士山の近くでやろうとした宗教団体もありました。

そういう極端な例を考えてもわかるように、住まいというのは、左上や右上のような形であるべきだという気がします。

### 集合住宅に志がなくなった。

林 以上の話は戸建て住宅に寄せた話になっていますが、世の中、集合住宅が大事ですから、そのことも一言申し上げなければいけません。

私が申し上げるまでもなく、「集合住宅に志がなくなった」ということも非常に大きな問題点です。

同潤会の江戸川アパートを訪れていまでも感心するのは、共同居住ということの意味がよく考えられている。一軒の戸建てに住むよりもいい生活ができるというところに、集合住宅の意味がある。

この江戸川アパートでは、立派な気持ちのいい共同浴場があり、気持ちのいい食堂があり、子どもの遊び場がきちんとある。住んでいた人によると、この中庭はとてもいい中庭で、共同のお祭りもできたし、子どもがここで遊んでいる分には、周りの人の目が行き届いて、子どもに何か注意することができるという良さがあつた。

そういうものが戦後なくなってしまつて、お風呂が各戸についたのはいいことかもしれませんがおかげでときどき温泉に行かなければならない気分になつたり、食事も自分の家で作るよりはと、たちまち外食やコンビニになつてしまふ。それでナイフをもつようになったかどうかはわかりませんが、とにかく共同居住というものの意味を原点に戻つてもう一回問い直さなければいけないという気がするわけです。

最後に、「何のための国家か」ということです。本当に不思議だという気がするんですね。日本人は、国は国民を煮ても焼いても自由だというふうな感じで飼われているわけですが、ジュネーブ条約の捕虜だつてもうちよつと待遇がよいのではないかと思うくらいです。特に、阪神の震災、その前に、戦争の空襲。そういう際に国家は何もしない。捕虜だつたら手を差し伸べら

れるのではないかと思うのですが、そういうことさえ何もしない。

本来、国家は巨大な保険会社であるべきです。民間の保険でできないことを国家がやるべきだし、集合住宅のスケルトンは、国家あるいは社会的な機関がもつて、個人が心配なしでそのスケルトンに命を託せるようにするのが集合住宅の基本ではないかという気がします。

布野 ずいぶん真面目な、まるで学者のようなプレゼンテーションを頂きました。「戦後の初心」については、不思議に違和感がありません。世間はもしかすると林先生を誤解しているのかもしれない。

伊藤先生は、著書『小住宅ばんざい』をはじめ、住宅作家とか、住宅設計のプロとアマについてなど、ずいぶん発言されてきました。そういう立場で、戦後の住宅の中から一つだけ挙げるとしたら、何をあげになりますか。

**設備が古くなり、環境が悪くなり、家庭が変り、住みづらくなつても頑固に耐えて持ちこたえている住宅をこそ、よい住宅といいたい。**

伊藤 設計者の創造の思想が、純粹な形で表現されている冷たい住宅に興味があります。現実の生活、住む人の価値観と衝突することになつていても構わない。三〇年とか四〇年で取り壊してしまうようでは駄目。設備が古くなり、環境が悪くなり、家庭が変り、住みづらくなつても頑固に耐えて持ちこたえている住宅。

そういう住宅の例にあたるかどうかわかりません。なぜなら竣工して十数年も経っていないから。それは、ノーマン・フォスター設計の住宅。公表されていません。住んでいる方も公表は希望されていませんから見られません。スチールとガラスと電子メカで構成されていて、トイレを除けば全館一室。フィリップ・ジョンソンの自邸やミースのファン・ファース邸も一室だけ。それらとは別の性格をもっている。

ここには、日本のこのお施主さんは、日本人の設計者だつたらそういう自由を与えなかつたという感じがある。フォスターだから依頼して、そういう

自由を与えたという感じが漂っている。そして金持ち金持ちとしての社会的責務を果たすことになったのかなあと、いうふうに私は解釈しています。

### 合理的につくって、再生(分解・移転)可能を熱心に考えた二つの住宅例があった。

林 「戦後の住宅でいいと思うものを一つ挙げろ」といわれると、私は、RIAのローコストハウスになる。

皆さんご存じでしょうが、三間×四間の一二坪。しかし、柱も二寸五分角。これも七五ミリじゃ気分が出ない。プランを見ると、問題の居間に「ダンラン」と書いてありますが、団欒というほどのものでもないですね。しかし、当時の住まいの方向、住みたい家の気分はこのなかに込められていたような気がします。柱の長さは二寸五分の三〇倍、七尺五寸、ぎりぎりいっぱい使う。柱も梁も垂木もすべてぎりぎりこれ以下にならないという家をつくってみたのがこれではなかろうかと。私もずいぶんそういうことを考えたのですが、これには及びません。

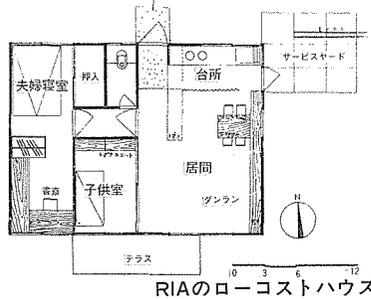
もう一つ挙げさせていただくと、大野勝彦さんが設計されたセキスイハイムのM1型。RIAのローコストハウスとこれとは両極端に思えますが、どちらも、最も合理的につくって、再生可能——分解・移転、今時の言い方をすれば、リサイクル、リユース——そういう方向を非常に熱心に考えた二つの例だと思っています。

布野 伊藤先生のほうが作家的なんです。林先生、贖罪のためにRIAとかセキスイハイムを挙げたということはないですよ。

林 そんな感じは私は全然もっていませんが、第三者に言われるのはしかたがないかもしれま



セキスイハイムM1



RIAのローコストハウス

せん。私の自宅も四〇年ちょっとになりますが、ずっとそのまま使っていますし、まだ一〇〇年ぐらいは使えるのではないかと思っていますから、贖罪というほどではないんですがね。むしろRIAの家がどのぐらいもつかということが非常にもしろいことだったのでないか。

日本の場合、建物はもたせても環境が変わってしまいますから、なかなか住み続けられなくなってしまうわけですが、しかし、RIAのローコストハウスはあのまま分解すれば、別のところで生きていくわけだから、長もちさせるというのはいろいろな考え方があっていいと思います。

**阪神大震災の後始末で、あそこに耐震設計をするのは、本当に困る。確率論からいうと、三〇〇年こないかもしれない。教訓はほかの地域で生かされるべきだ。**

伊藤 もう少し身近な範囲で考えてみたいと思うのですが、阪神・淡路大震災のあと、みんな一生懸命に、免震構造とか、耐震がどうのといっています。阪神・淡路のあたりはもう三〇〇年ぐらいはあんな大震災はこないと思う。ほかの地区でやるならわかるが、神戸でやる必要はないと私は思う。

というのは、私は文化庁の文化財保護審議会の委員をしているとき、震災より二年ぐらい前、考古学的な発掘の場所があって、それを重要文化財に指定したのですが、そのときの報告書のなかに、「いまから三〇〇年前の縄文時代の断層がみえています」と書いてあった。ある程度エネルギーがたまってから地震は起きるでしょう。阪神・淡路の地域では、免震だ、耐震だと大騒ぎすることはないのでないか。いまから二〇〇〜五〇〇年あとにはちやんとしましょう、という考え方でいいのではないか。だから、阪神・淡路大震災の教訓は、阪神では大して意味がない。僕が行政官だったらそういう政策をとると思うな。

布野 かなり挑発的な意見ですね。阪神でもあまり教訓になっていないという説もあります。

内田 阪神大震災の後始末で、あそこに耐震設計をするというのは、本当に

困りますね。確率論からいうと、三〇〇〇年こないかもしれない、あそこほど安全なところはないという説もある。だからといって、余震がくると壊れるような家でも困りますし……。

私は、「あそここの教訓はほかの土地で生かされるべきだ」といつているわけです。

なぜ日本は真相究明を怠るのか。

神戸以外の地域にも同じ時期に同じぐらいの鉄骨の家がいくらも建っているかもしれない。その建物が果たして地震がきて大丈夫なのか、ということがわからない

内田 特に、芦屋浜の高層住宅の鉄骨が切断した問題は、もつとはつきりさせてほしいという気持ちなんです。材料が悪かったのか、施工が悪かったのか、設計が悪かったのか。大きく分けてこの三つのどれだったのかがわかってくれば、安心するんですね。国家的プロジェクトだったので、初期の設計をいろいろな構造家も一度チェックして、実際には鉄骨を五割ぐらい増やしている。しかも、オイルショックにかかって急騰した時代ですから、建物が鉄骨だけで二倍ぐらいに上がってしまった。それにもかかわらず、国はそのお金を出してつくったわけですから、「絶対に壊れるはずはない」と信じていたものなんです。

仮に設計が悪かったとしたら、設計の考え方が間違っていたということだろう。これがなかなかわからない。「トラスだったから」という説もあります。「ラーメンだったら大丈夫だったろう」という説。だけど、それなら神戸あたりでラーメンでできているものの耐火被覆をはがしてみなければわからないはずで、なぜそれをしないのか、ということ。

阪神の一年前の同じ日に起こったロサンゼルス地震では、耐火被覆を全部はがして検査することをロサンゼルス市議会が決めた。地震があった直後に決めていきます。そしてかなりたくさん壊れた箇所がみつかった。もちろん、公共建築は公共が直します。個人の建物は「個人で直せ」といわれて

いて、直さない罰則がついている。だから、日本も本当はそのぐらいのことをしてもいいわけです。

ところが、日本では、「それをしたほうがいい」ということになっている。それでは、耐火被覆を被った鉄骨のなかに被害があったのかどうかかわからない。いろいろな建設会社の方たちに聞いてみると、調査はしているのだけれど、「施主が公表しないほうがいい」といつて公表しない。だから、傷があったかはいわからない、何が悪かったかわからない。

材料については、ミルシートというのがあるはずなんです。きょうつくった鉄もあしたつくる鉄も同じものだと思っていたのですが、実はそうではなくて、時々刻々と鉄の材質は違うのだそうですね。それがミルシートに出せるものだから、芦屋浜に使われた鉄骨のミルシートは固有のもので、ほかの鉄骨とは違う。あれは新日鐵から住宅公団に納められて、公表されるはずだと思っていたのですが、それは公団の中に眠っている。たとえば、材料が違っていたというのだったら他の建物については安心していられるわけですが、それがわからない。

なぜ出てこないかという点、芦屋浜には賃貸と分譲とがあつて、賃貸の人たちは「みせてほしい」といつているのだけれど、分譲の人たちは「公表してもらいたくない」と。売るときに家が安くなるから。そんなこといつたつて、あれだけの被害が公表されていますし、阪神大震災でも倒れなかった。しかも、誰一人ケガしないで、あの中にいたわけですから、それだけの強度はあったわけです。これは実に大きな実績だと思う。一四階建ての建物の柱は三割ぐらいが切れたのですが、それでも大丈夫だった。そういう実績があるわけだから、ぜひミルシートを公表してほしいと思う。

つまり、神戸以外の地域にもあれと同じ時期に同じぐらいの鉄骨の家がいくらも建っているかもしれない。その建物が果たして地震がきて大丈夫なのか、ということがわからないわけです。

私は施工が悪かったとは思えないんですね。あれは非常に監理よくできていました。だから、設計が悪かったか、材料が悪かったか。故意でなくて、

何かわれわれの未知の事情で壊れた、その原因がわからないということ。しかも、わかっているデータが公表されていないということに、私は将来の住宅に対して不安をもっているわけです。芦屋浜の話はいつも途中でカットされてしまうものですから、言いたいことを全部お話ししました。

平良 阪神の問題で考えるのは、構造技術、建築技術的な意味でいろいろ反省もあるし、調査ではつきりしたことは是正していけばいいと思うのですが、それ以上に、ちゃんとしたかたちで、安定した地域社会ができていけば、被害があったときの対応がずいぶん違うだろうと思う。そういう社会的な観点から、この教訓を生かしていくことが大事だろう。

われわれがつくる住宅が、その建てられているところで地域社会ができていくかどうか、ということですね。それがいまあやふやだと思う。戸建ての中の家族という、社会のいちばん最小の単位が非常にあやふやになっている。それが戸建て住宅の問題でもあるし、集合住宅の問題にも関係があるし、実際の都市計画にも影響があるし、環境問題に大いに関連してくる。

そういう意味で、もっと広い意味の社会環境という視点。それも社会は何で成り立っているのかということまで含めた研究がこれから非常に必要だろうと思います。建築を離れても、どうも社会がグラグラ崩れてきているような感じがするので、そのことも含めていくのが建築家の実践に大いに関係があると、そんなことを思っています。

林 震災のようなことがあったら、いろいろ対策なんかを考えると大変だから、できるだけ早く忘れてしまえ、年号も変えてしまつたらいい、というのが日本の伝統的なやり方なのかと思うぐらいなんです。ただ、自然というのは、相手が大きすぎますから、ある程度しようがないのかもしれない。人間がつくったものにも同じようなことをやっているということに、私は非常に腹が立ちます。

御巢鷹山に墜落した日本航空の飛行機も、「圧力隔壁が破けて、それで尾翼がふつ飛んだ」なんていっていますが、そんなことで尾翼がふつ飛ぶはずがないんですね。なぜ落ちたのかがいまだにまったくわからないわけです。

とにかくきちんと公に原因を究明して、二度と落ちないようにするという態度がまったくみられないのはとても恐ろしいことです。

### 会場からの発言を交えて

布野 フロアからも発言をいただきたいと思いますが、質問がたくさんきています。とても全部ご紹介できないのですが、内田雄造さんからは、お施主さん、発注者教育について、建築家のほうが問題だ、という主旨のようです。

### 建築家は市民から楽しみを奪っている。

内田雄造（東洋大学） 「お施主さんへの教育が欠落していたのではないか」というお話があったのですが、私は建築界が挙げて機会を奪っていたのではないか、と言いたい。

たとえば、設計入札という制度があるわけですが、現実には市民はほとんど、設計、建築の全プロセスから疎外されている。公共建築（そのなかに公共住宅も含まれている）の設計にあたっては、そもそもなぜつくるのか、どういうものをつくるのか、どこにつくるのか、幾らぐらいでつくるのか、ということをやちゃんと情報公開して、市民参加を主張すべきだということ。

私は設計入札ではなく、コンペなりプロポーザル方式がいいと思っているわけ、そういうコンペの評価段階も公開で市民参加でやるべきだという気がするわけです。

私はそういう面での設計入札を廃止する方向で努力しているんですが、建築家の方々には「私たちはいいことをやっている」という思いが非常に強いと思うんです。私にいわせれば、それはやっぱり違うのではないかと。設計するということは、市民生活にとっては最も楽しい、人生何回かの楽しみ事。その機会を代行するというかたちで奪っているのではないかと。その重みをち



会場風景

やんと受けとめて考えてほしい、と思つていきます。

布野 たぶん関連すると思ひますので、福沢健次さん。

福沢健次（ユニテ設計・計画） 私がふれている範囲に關していえば、ここ数年、新聞なども含めて一般の人への建築などの情報が多くなつてきたせいか、一般市民の意識は高まつてきているような気がします。日本の昔からの知識人は、庶民は考えている暇がないという感じをいくぶんおもちかと思うのですが、案外、私たちが追われて図面を描いている間に、一般の市民はもつと考えているという感じをもつています。

布野 一方では、建築家が機会を奪つていているという話と、お施主さんのレベルも上がつていっているという話でした。重ねて、ちよつと角度が違ひますが、海老塚良吉さんと野村みどりさんにご発言いただきます。

海老塚良吉（住都公団住宅都市総合研究所） 私は建築家が次第に庶民の住宅に關心をもち始めているのは非常にいい傾向だと思つてはいるんですが、もう少し建築家の社会性、庶民住宅に対する取り組みが深まればいいという感じをもつております。

中谷 海老塚さんの内田先生に対する質問票には、「労働生産性が向上したおかげで、庶民の住宅も一定の水準の住宅が平均年収の三年分程度の工事費で入手できるようになつた。その結果、一〇〇年前、五〇年前には建築家が相手としなかつた庶民住宅の設計に取り組みがされるようになり、産業界も庶民住宅を相手とするようになったという歴史の流れとして、戦後住宅をみればいいのではないか」と書かれています。

**住宅や町が障害者をひきひきつくる状況に對し、もつと責任をもつて建築家が発言すべきではないか。**

野村みどり（都立保健科学大学） 二点ございます。一つは、内田先生が

「学校建築は文部省所管、病院建築は厚生省所管のようになつてしまつていゝる。建築としてのまとまりができていない」ということをお話しくださいました。私も学校建築の研究をしており、いま盲聾養護学校の補助基

準面積の見直しをやつています。そのなかで特に病弱養護学校の問題。校舍は非常に充実することになるのですが、ほとんどの子どもは病棟に入院している状況で、病院の中に学習や遊び環境を整備していかなければなりません。病院建築というのは、スケールアウトの狭さでまったくそこは手をつけられない状態で、いま非常に困つています。

もう一つ、「住宅は住宅だけでとらえられない。広い目でみていくことが必要」とおっしゃいました。慢性疾患や障害をおもちでもいままでの生活で継続していきたい、住み続けていきたい、というのはすべての人の願ひであると思ひます。それに住宅が対応できているのか。建築家の果たすべき役割はもつと幅広くあるのではないかと思ふ。バリアフリー住宅、あるいは住宅改造を公的に保証するようにならなくてはいいけません。「最低限、住宅はこうあるべきである」ということをきちんと建築家が言つてこなかつたことの責任の重さですね。住宅や町が障害者をつくり出しているという状況に對し、もつと責任をもつて建築家が発言すべきであると思ひます。

**建築家の仕事とは、施主、それをつくるうとしてゐる人のサポートをすること。下働きだという気持ちをもつと大きくもつべきだと思ふ。そうすれば、自然にお施主さんを教育することになる。**

林 内田雄造さんのおっしゃつた話に私も大変同感です。「なんだ、おまえ、いまごろそんなこと言つて」と皆さんは思われるかもしれませんが、どうも建築の設計を建築設計の世界の中に困ひ込んで、自分たちだけでやるうという動きがずつとあつたわけですね。それが非常に世の中を毒している。

チャンスはいろいろあつて、たとえばコンペをやるのならば、コンペの審査員のかなり多数を一般の人から選んで、変なものが出そうになつたら、その席にゐるわずかの専門家は必死になつて何がいいということを論じるべきで、それでわかつていただければ、何人かでも同志がふえていく。だいたい何がいいかを説明できないから、怖がつて素人を入れないのだろう。そういうことから改めていけば、少しずつ變つていくと思ひます。

内田 建築家の仕事を、いままで建築家の個人の仕事と考えすぎてきた。それは、施主、それをつくろうとしている人のサポートをすることだという点をもっと重くみないといけない。そのことがわかれば、地域の住民参加というのも当然のことで、個人の家をつくるときには、お施主さんの考えを反映するのは当然のことである。そういうことをきちんとやって、建築家がむしろ表に出ないぐらいの気分でやるべきではないかと思ってるんです。そうすれば、内田雄造さんがいわれたような、施主の楽しみを奪うなんてことはあり得ない。

私が大変印象深く思っているのは、住宅を設計・施工されていた佐藤秀三さんは作品集を出さなかつたんです。出さなかつた理由は、「私の作品をつくるためにお施主さんの仕事を引き受けたのではない」といつているんですね。亡くなるときまでそれを通して、作品集をつくらなかつた。

建築家というのは、そういう下働きだという気持ちをもっと大きくもつべきだと思う。そうすれば、自然にお施主さんを教育することになるし、コミユニケーションができていく間にその人の考えが出てくると思います。

建築家の仕事というのは、名前を出して責任をとらなければいけない仕事がたくさんあります。たとえば国の仕事は、国が誰であるかよくわかりませんから、むしろそういう公共事業に対しては、建築家が名前を挙げて責任をとるような作品にすべきだと思う。

発注者というのが組織になって、誰が責任をもっているのかまったくわからない。フランスの場合には、公共住宅はすべてコンペになっていて、そのコンペが若手建築家の登竜門になっていて、日本の公共建築もそういう時代に入ろうとしているのではないかと思うんです。

いままでの日本は住宅が足りなかつたので、そんなこと言っていられない、たくさんつくらなければならぬ時代（一九五〇年代）がありました。それから商品化時代になって、そしてようやくこれから先に私は期待しています。

日本語では生活を「衣食住」というんですが、いちばん最初に衣に余裕ができてファッションが盛んになり、アパレル産業は、日本では成熟しきって

いる。最近、テレビ番組をみると、料理の話がいっぱい出てきて、「食」のほうもだいぶ豊かになってきた。で、「住」はまだ豊かではないというのが現状だと思うので、これはかなりな費用がかかるわけですから、これからの問題ではないかと思えます。

きのうたまたま鈴木成文先生と一緒に東北大学にいき、近江隆さんらしい話を聞きました。「日本の住宅面積が一家当り何平方メートルになっているかは、世界と比較してみてもかなり広くなっているのではないか」というんです。一軒一軒は非常に小さい。しかし、娘はどこかの学校に通うために部屋を借りているとか——近江さんは「ネットワーク居住」といつていました。「分散居住」ともいいます——そういうのを全部合計して一家族が何平方メートルを占有しているかを出すと、二〇〇平方メートルを超えている例はざらにあつて、統計はまつたくなないので平均がどのぐらいかはわからないのですが、かなり豊かになっている。ただ、「それをどういうふうにもっていくかということがわかっていない」というようなことを聞いて、大変参考になったので、ちょっとお話ししました。

布野 建築家の主体性、お施主さんの主体性、関係の構造が全体を通じての問題です。結局は住宅をつくっていく仕組みの話に根本の問題があるように思えます。青木正夫先生、一言。

**近代化の過程のなかで、現在の到達点がどこなのかがはっきりとみえていない。**

青木正夫（九州産業大学） 日本の住宅の近代化の過程は、一言でいえば、明治の初めからアメリカ住宅を終始模範として、いかにアメリカ住宅に近づいていくかということであつたと思う。ただ、近代化の過程のなかで、現在の到達点はどこなのかがはっきりとみえてきていない。したがって、次へ贈る言葉もはっきり出てこないという点がある。

それと、基本である家族が非常に動いているということ。特に、戦後は核家族から始まつたわけですが、個族が出てきたり、最近ではむしろ親子で住む

のが非常にふえてきつつある。福岡県と沖縄県は違いますが、九州では、七歳以上になると、年をとればとるほど移動がものすごく激しい。皆、都市の子どものところに行っているわけなので、核家族が完全に崩れてきているのではない。非常に流動的なので、これから住宅はどうなるのかということも、ちょっと見通しが立たない点があるのだと思います。

布野 鈴木成文先生も一言あると思います。

鈴木成文（神戸芸術工科大学） 日本では戦後というよりもっと前から、あの事件があれば、住宅を——たとえば、関東大震災のあとで同潤会、震災のあとで高輪アパート、高度成長の初めに何ができ、オイルショックのあとで公営住宅がどういうふうに変ったのかと、そういう流れがあると思うんです。阪神大震災のあと何が出るのかは非常に大きな問題です。

あの大震災から何を学んだのか。ただ、安全ではありませんよ。平良さんが言われたように、コミュニティの問題、近隣の問題、助け合いの問題、あるいは文化を守る、歴史を守ることがあれほど強く言われたことはない。ところが東京では、そういうことはまったく無関係に、高度成長期の初めに住宅公団の初代総裁が一生懸命つくった、将来への対応を見越した設計がされた晴海高層アパートを公団自らの手で壊すなんて、とんでもないことがある。そういういろいろな戦後の流れのなかで感じるものがありました。きょうは大変勉強になりました、ありがとうございます。

布野 晴海高層アパートの件については、財満やえ子さんからもその点について質問がきています。小原二郎先生からも一言お願いします。

**住宅教育について考えるべきことがある。「人間は生物だ」という発想が欠けている。**

小原二郎（千葉工業大学） 住宅教育について考えるべきことがある。工学部というのは、結局、数学と理科ができるという発想で来ていますから、学生は生物にほとんど興味がない。建築だけでなく機械も電気もそうです。使うのは人間で、ましてや住宅においては人間のところが非常に大事なんです

が、人間に関心をもっていきにくいところがある。人間のことを忘れていて住宅問題で二つ反省があったのは、一つは「ハウス55」です。私は内田先生のお手伝いをして「ハウス55」をやって、あとで気がついたことは、音楽に例えればよくわかるんですね。名器をつくってばらまいたら、みんな名曲が弾けるという発想だったけれど、名曲をどう弾くかということがなかった。人間の多様性を忘れていて、大量生産・大量販売で、同じものを人間にばらまけばいいと思っていて。それが一つの反省だったと思うんです。

もう一つは、いまの健康住宅です。あれは「平成黒船騒動」の一つの面があるのではない。高断熱・高気密が工学的にいちばんいいことはわかる。しかし、高断熱まではいいけれども、高気密というのは、生物が入ると考えたら、大変問題がある。「人間は生物だ」という発想が欠けている面が、住宅問題についてかなりいえるのではない。

布野 最後に、言い残したことを一言ずついただいて締めたいのですが。内田 住宅が不足の時代と、ある程度充足した時代とは、人の考え方が全然違ってくると思いますし、それを支える産業の考え方も違っていいと思う。それらとは関係なく、住宅作家による時代の流れがあって、それがずっと戦後から継続して伸びてきて、平良さんのいわれる緊張感のあった時代をつくってきた。それと住宅不足解消の問題とは、水と油みたいな関係があったように思う。しかし、そのへんのつながりが両方わかる人がなかなかいないんですね。それで、ぜひ中谷さんにそのへんをつなげた歴史を考えていただきたいというのが僕の感想です。

伊藤 いま内田さんはそういうことをおっしゃったけど、兄弟でも内田さんはいふんと違うような気がする。僕は内田さんの亡くなられたお兄さんが講師時代の研究室にいたんです。丹下健三さんはただ微笑を浮かべていただけで何もおっしゃらなかつたけれど、内田祥哉さんのお兄さんの祥文さんはB29の編隊を見上げながら、こうおっしゃった。「癪だね。美しい都市をつくって、こんなに美しい都市だから爆弾を落とす気がしない。そういうふう

にして防ぐとよい。君、そう思わない」。

これは美学で敵機に対抗しようというわけでしょう。でも祥哉さんは学者だから、技術的につきつめて対抗しようとなさりそうな気がするでしょう。

布野 いまからシンポジウムを始めるといい雰囲気ですね。平良さん、お願いします。

**建築・土木・ランドスケープを総合し、トータルな人間の住まう集落をつくっていきける、リーダーシップをとれる人が育ってほしい。**

平良 「贈る言葉」ではなく決意だな。僕が始めたばかりの『造景』という雑誌はどうしても二一世紀の雑誌にしたい。建築・土木・ランドスケープをひっくるめて、そのなかから「造景」というトータルな人間の住まう集落をつくっていきける、リーダーシップのとれる人が読者のなかから出てくればいいと思う。皆さんにぜひとも協力をお願いしたい。そんなに売れていないんですよ（笑）。ということ、つぶれる可能性もあるんです。で、つぶさないようにするために皆さんの協力が要る、そういう決意を新たにしました。林 きょうお話を伺っていて感じたのは、一九五〇年代、戦後すぐのころには、住宅を中心に非常に熱心な、志のある動きがあった。当時は、一生懸命設計をすると、それが世の中を動かして、世の中の役に立っていくという、そういう熱い心があったわけですね。それがだんだんなくなってしまう。

いまでも、傑作とされる住宅がいくつも生まれてきますが、どうもその動機はいろいろ違っていて、いまは社会の中でではなく、建築界の中で価値が認められるもの、いわゆるブランド品みたいなものなんですね。偽物のほうが価値があったりすることもあるわけですが、そういうブランド品を自分たちだけでつくって、その価値を宣伝して回っている。で、お金のある人は、浅草でカバンを買ってもいいけれど、ルイ・ヴィトンを買うというように、別荘を建築家に頼もうということになってきているわけで、それなりの市場が成り立つようになった。

設計するほうも、志はかなり個人的なことになって、タレント化している。

一般社会とは相当違う閉鎖社会に生きるようになってきたというのが、「情報化時代」といわれるものの裏の面だと思えます。その特徴的な動きが大変気になっていきます。

布野 「贈る言葉」を受け取る側の代表として、若い中谷さんに一言感想をお願いします。

中谷 「贈る言葉」というより、やり残された宿題を次代にきつくいわれたという感じで、大変だな、これはしんどいやと思っっています。

一つ、このシンポジウムのテーマのなかで全然ふれられていないところがあります。それは、「戦後の住宅建築史をめぐって」という部分です。私たち次の世代がやらなければいけないのは、戦後の住宅の歴史とは何であったか、戦後住宅史はどのように書けるかということではないかと思えます。

近世までの日本の住宅の歴史が語られるのと同じようなかたちで、戦後住宅史が今後書かれるとすると、おそらく状況史みたいなものではなくなくていい。いちばん真っ先になくなるのは建築家個人の名前だろうと思うんですね。何が残るかという、住居の平面的な発展とか、そういった形式的なことであると思うのです。

今回、伊藤先生、内田先生がおっしゃったことは、住宅が歴史化されることに必要なものとして、当然書かれるべきジャンルを確認させられたということですね。住宅を成立させるための外的条件といったものの重要性ということだと思います。施主の問題とか、あるいは技術、政策といった問題です。ところが、それだけではないわけです。戦後住宅史が建築史で語られるためには、なんらかの建築的なまとまりをもたなければいけなくなる。その建築的なまとまりとは何なのか、そこらへんで平良先生の話、林先生の話を知りたいと思うのです。

住宅というのは非常に矛盾を抱えているものだと思うんです。非常に社会的政策的な存在である。一方で、非常に個人的なレベルで、まったく反社会的



中谷礼仁さん

なことでできる器でもある。その中間帯に文化的な枠組みというか、アノニマスなものがずっと流れている。ですから、それを記述すること自体がすごくむずかしいということは、これですぐわかってしまうわけですね。

では、なぜ戦後住宅が再読に値するものであるかということ考えた場合に、やはり五〇年代のことを抜きにしては考えられないだろうと思います。乱暴な総括ですが、五〇年代だけが、住宅の個別的なスタディーが社会的な政策にまで言及できたような、さまざまな文脈が一瞬だけ合った状況だったと思うのです。

伊藤先生の『小住宅ばんざい』という著書は、戦後住宅の五〇年代的役割を終わらせた論文で、これ以降、状況的にはあまり変わっていないのではないかと思います。社会的な器としての住宅という問題と、個別的な鏡としての住宅といった問題が分離して、まったく関係がなくなった世界にいるというふうにも考えてもいいのではないかと思います。

この状況をそのまま表現してみせたのが、たとえば岐阜県宮北方住宅にできたばかりの妹島和世さんと西沢立衛さんの集合住宅だと思っています。とうとうやってしまったという感じで、住戸の各部屋に全部扉をつけて共用廊下に直接開いてしまった。林先生が「住まいとして望ましくないかたち」とされた典型的なかたちです。ちょうどマンションが表裏をなして、表側はすべての部屋に通ずる扉がついているんですね。ですから、監獄のような情景です。それに比べて裏側は各単位ごとに共有されたある種の象徴性をもって、それがまとまりとしてみえるような、非常に小憎らしいデザインがされているわけです。

その裏側の部分の共同性を象徴するようなものはリビングルームではなかった。廊下がずっと個室の前に走っているのですが、洗面器が狭い廊下の中にポツンと置かれていて、それがその住宅の一つの象徴的な共同性の場として扱われているわけです。よくよく考えてみると、いま家族が出会うのは、朝の用便を足すときとか、歯を磨くときとか、非常に微細ではあるけれども、ここだけは必ず会わなければならないような部分があるわけで、そういった

ものを的確につかんでいる。そういったかたちで今後もおそらく社会的器と個別的器の境界を探しつつ、五〇年代とは違った共同性と個別性の問題を抱えて、住宅は発展するのではないかなと思います。

もう一つ、商業化の問題は先生方の年代の方々にはあまりよいふうに入れられていないと思いますが、僕は住宅が商業化を迎えるのは遅きに失したと思います。もう少し早くから商品としての住宅がちゃんと批判されてきたなら、もう少し変わった商業化のかたちがあつたのではないかなと思います。そういった意味で、批判的商業住宅として、戦後住宅のいくつかが歴史に載ってくるのではないかなと思います。たとえば大野勝彦さんの仕事なんかも、いわば両義的な存在ということですが、実はそういったことでもみることにしように可能性があるのでないかなという気がします。

布野 どうもありがとうございます。まとまりがつかないまま、このへんでシンポジウムを終わらせていただきます。

(文責＝編集部)

シンポジウムを終えて

布野修司

「贈る言葉」をしつかり受け止めたかどうかは全く自信がない。というか、シンポジウム当日は、コーディネートするのに精一杯であつた。でも、速記録を読み返してみても、あまり違和感がない。要するに、先生方の言葉には共感することばかりである。当然といえば当然である。すべて、僕の敬愛する先生方のおっしゃることなのである。問題は、その「贈る言葉」をどう実践するか(しているか)、なのである。シンポジウムではその突込みが足りなかったのかもしれない。「そうはおっしゃるけれど、具体的にどうすればいいんですか。先生方はどうしてきたんですか。先生方になにがしかの責任はないんですか。しかし、そんな失礼な質問などできるわけがない。戦後建築論ノート(一九八一年)を書き、『戦後建築の終焉』(一九九五年)を確認した僕にとって、『戦後建築の初心』をどう生きるか(「最低の鞍部で超えないこと」)はもう以前からの指針なのである。問題はその指針を共有する人たちがますます少なくなりつつあることなのである。状況は厳しい。



布野修司さん

# 戦後住宅建築史のなかの住まい

①  
戸建て住宅

## コアのあるH氏の住まい

1953 — 東京都世田谷区

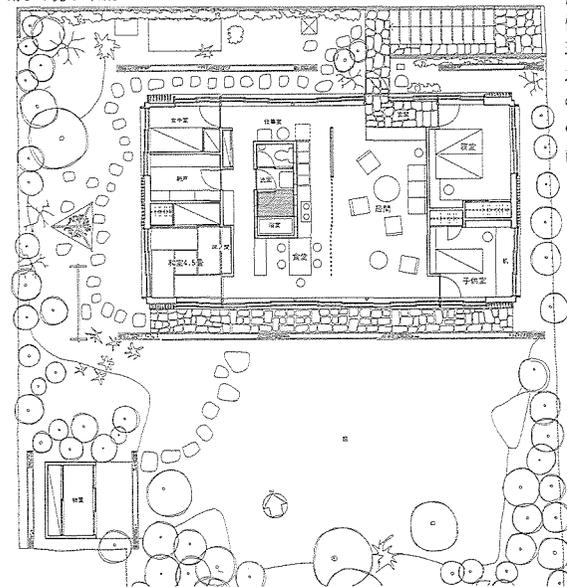
設計 = 増沢 洵

写真 / 平山忠治

(『住まいの探究 - 増沢 洵』建築資料研究社刊)

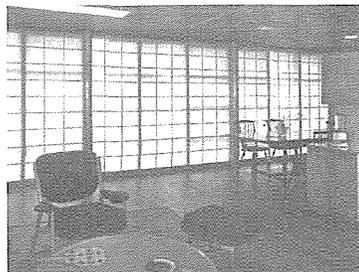


南より見る外観。

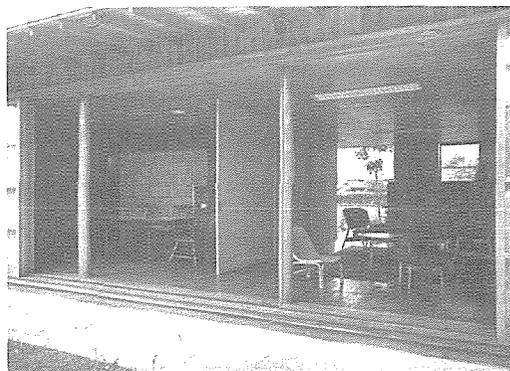


平面図 1/250

住宅の構成要素を、機能を単純化して合理的で直截な表現を求めた増沢洵の初期の秀作。中央に家族の共用の生活空間を置き、水廻りをコアに集約して配置。



居間、食堂。



南側、テラスより室内を見る。可動建具の左にコアが見える。

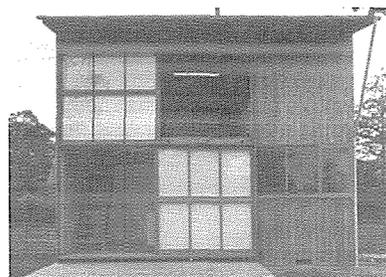
## 増沢自邸

1952 — 東京都渋谷区

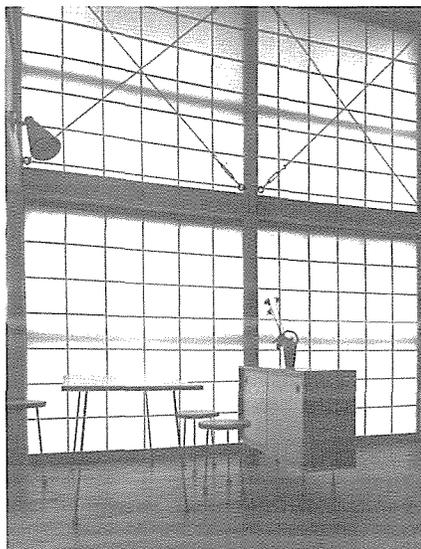
設計 = 増沢 洵

写真 / 平山忠治(資料：同上)

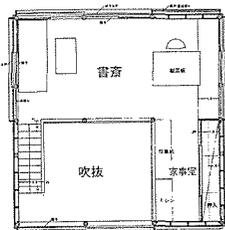
3間×3間の正方形の中に住宅としての最低限の機能を満たすこと。庶民住宅のプロトタイプ提案は、木造の伝統的手法を、合理的な思考で近代建築としての表現に昇華させた。



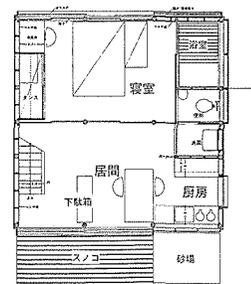
南側外観。



吹抜の居間の南側を見る。

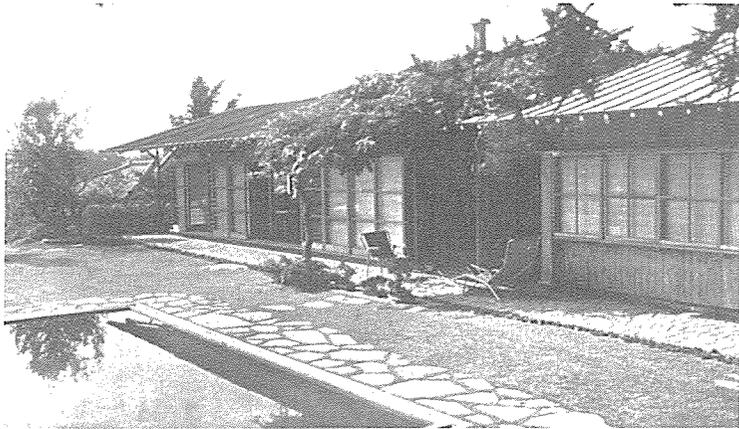


2階



1階 1/200

この項で取り上げた事例は、本号の執筆者の方々にお聞きした「戦後住宅建築史の中で心に残っている作品」を中心に、編集部で構成したものです。



プール脇より住宅の南側を見る。

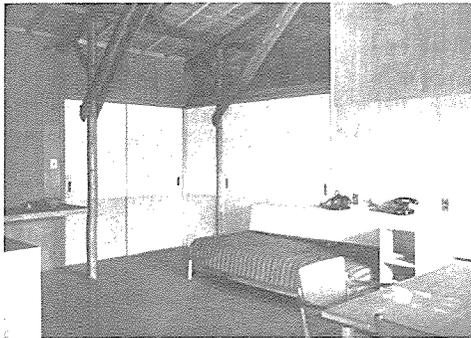
## レーモンの住宅・事務所

1952—東京都港区

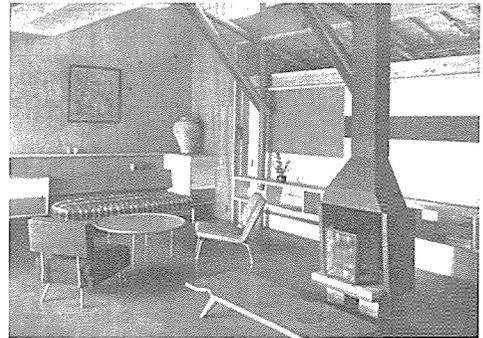
設計=アントニン・レーモンド

写真/村沢文雄  
(建築文化1952年10月号)

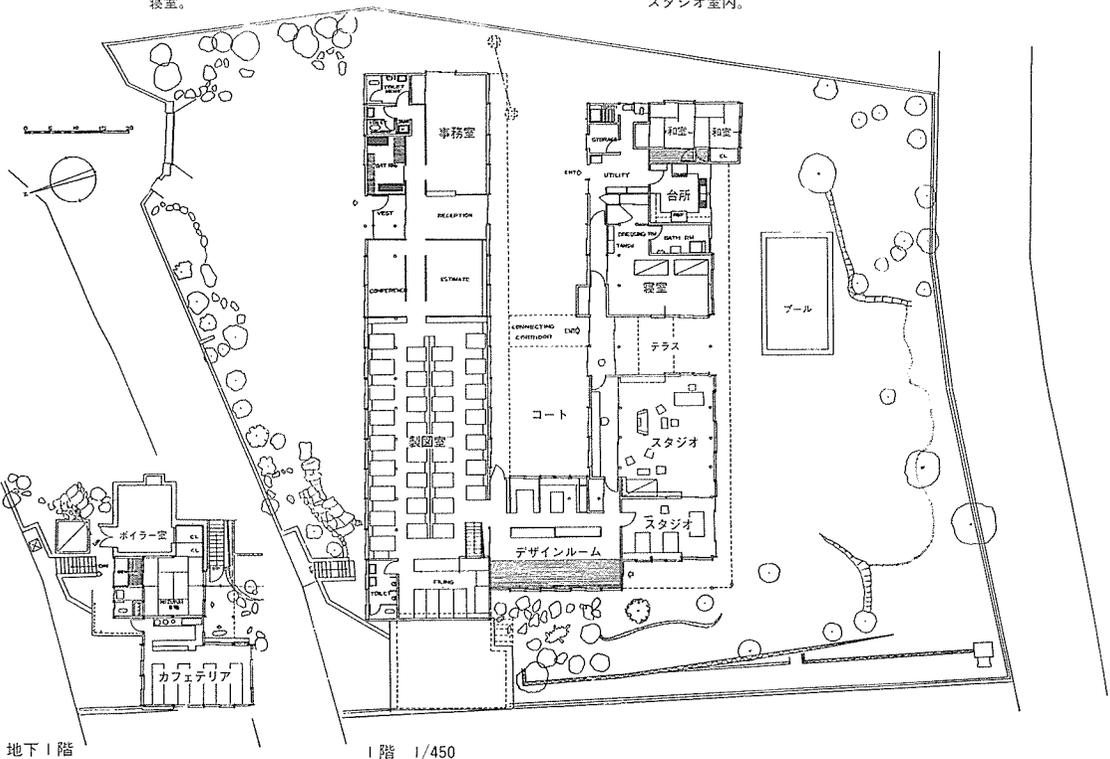
戦後いち早く東京に戻ったレーモンドは、日本在住の外国人の住宅を中心に設計活動を再開。構えた住まいと事務所は、丸太材の使用、架構の現し、日本の伝統的素材を随所に使用するなど、レーモンドスタイルと呼ばれることになる。ここから、多くの若い建築家が巣立っていった。



寝室。



スタジオ室内。

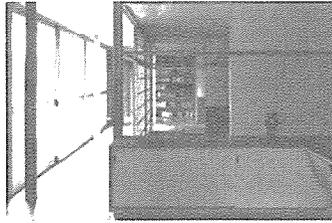


## 森博士の家

1951 — 東京都文京区

設計 = 清家 清

写真 / 平山忠治 (新建築1951年9月号)

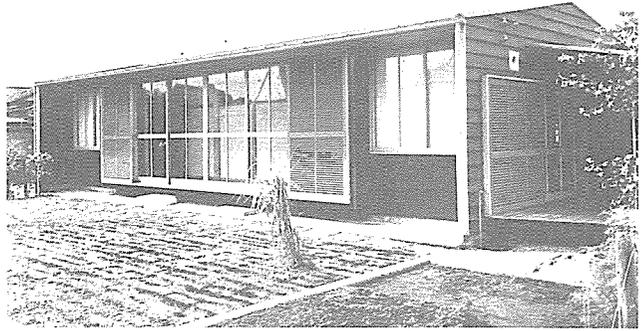


居間より和室2室を通して見る。

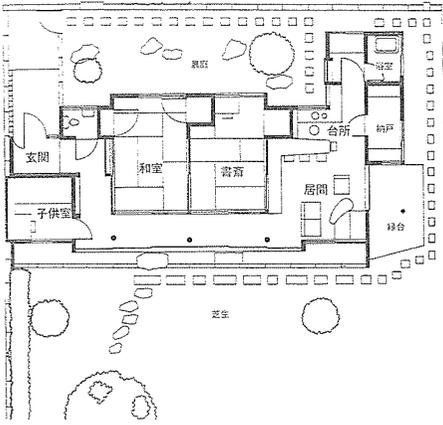
やがて自邸に結実するワンルームへの希求が生んだ初期の代表作。洋風一辺倒の時代背景のなかで、和室のもつ合理性を再認識させた。



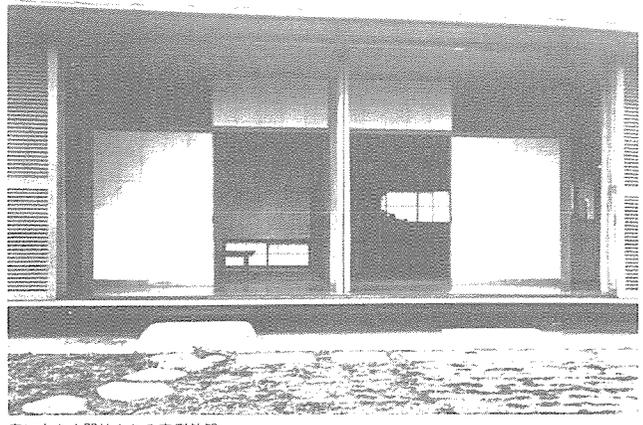
居間の東側の縁台。



南側外観。



平面図 1/250



庭に大きく開放される南側外観。

## 栗の木のある家

1956 — 東京都小金井市

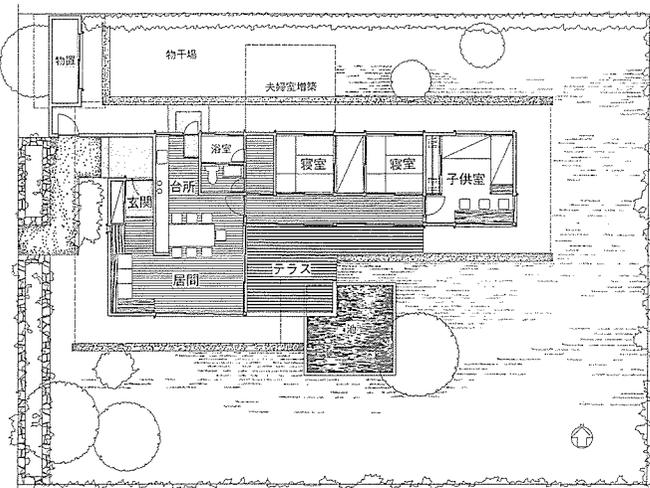
設計 = 生田 勉、宮島春樹

写真 / 平山忠治 (新建築1957年2月号)

屋根の形がそのまま変化のある豊かな室内空間をつくる木の素材感を生かしたあたたかい住まい。



南側外観。



平面図 1/300

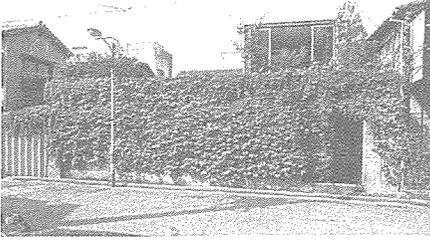
# 池田自邸(成長する家)

1959~1974—東京都渋谷区

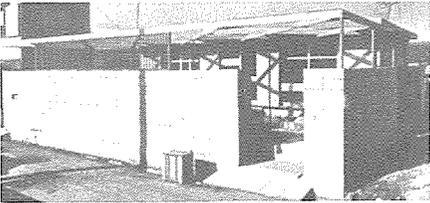
設計=池田武邦

写真/宮本隆司(住宅建築別冊39『小住宅集』)

水廻りをセンターコアとしたミニマムなものから出発し、ライフサイクル、ライフステージの変化に応じて増改築を重ねるコンクリートブロックのコートハウス。



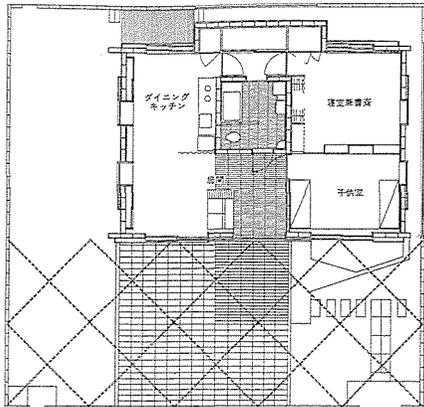
2階増築(3期)後の外観。



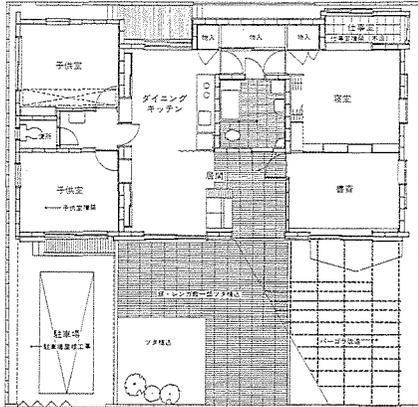
竣工当時の外観(写真/村沢文雄)。



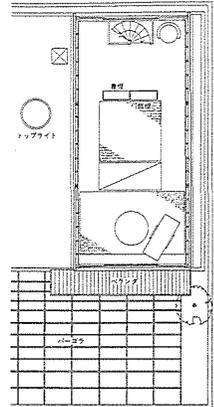
コートヤードと南側外観の最近の様子。



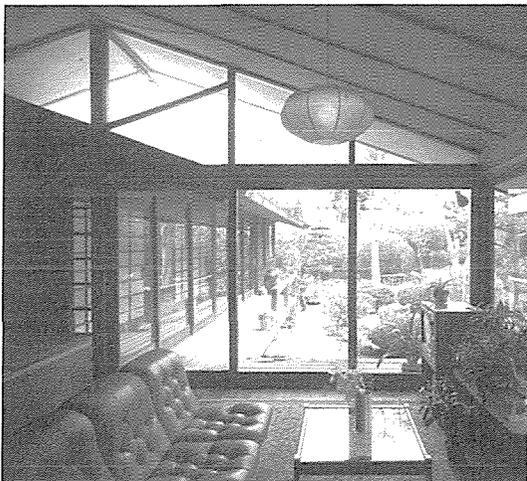
竣工当初の平面図 1/250



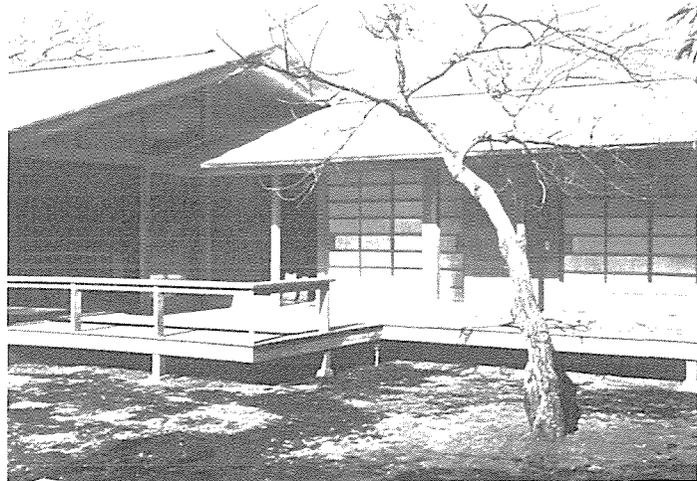
子供の成長に合わせて西側に増築



3期で2階を増築



居間から庭を見る、最近の様子(写真/興水 進)。



大きなテラスのある南側外観。

## 軽井沢の別荘

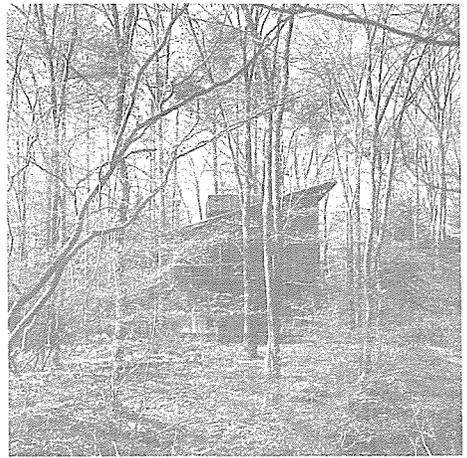
1962 — 長野県北佐久郡軽井沢町

設計 = 吉村順三設計事務所

写真 / さとうつねお (『小さな森の家・軽井沢山荘物語』建築資料研究社刊)

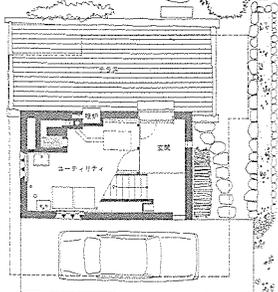


片持ちスラブ上の居間は引込み建具により全開放される。

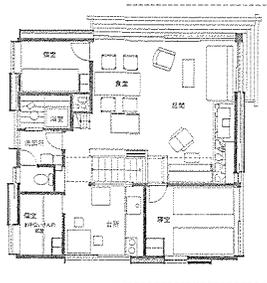


樹林の中にたたずむ外観。

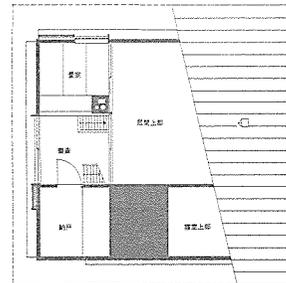
木漏れ目のなかで眺望を楽しみ、鳥になったような暮しのできる家をと、はねだしたスラブに載った山荘には、さまざまな工夫とディテールが凝縮されている。



1階 1/250

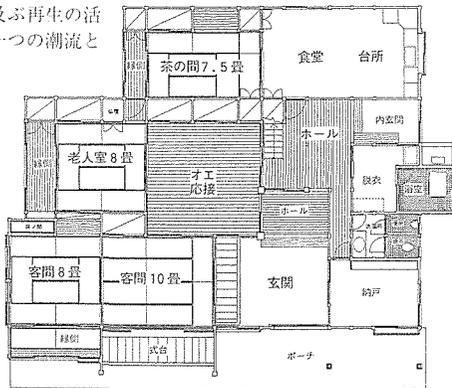


2階



小屋裏

特徴のある棟飾りをもつ本棟づくりの民家の再生。朽ちるがままに放置された民家に心傷めた建築家の、25年に及ぶ再生の活動は、いま一つの潮流となった。



1階 1/300

## 松本・草間邸

1982 — 長野県松本市

設計 = 降幡建築設計事務所

写真 / 秋山 実 (住宅建築1983年9月号)



平面図の中央、応接間の吹抜。

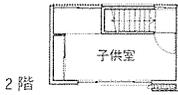


東側、正面全景。

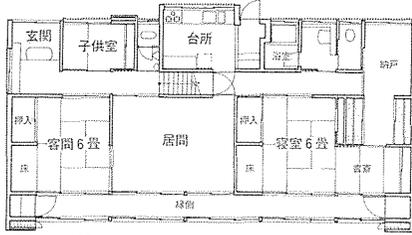
## 普通の家(岩本自邸)

1974——兵庫県宝塚市

設計=岩本博行 写真/上川洋洋(ディテール42号、1974年秋季号)

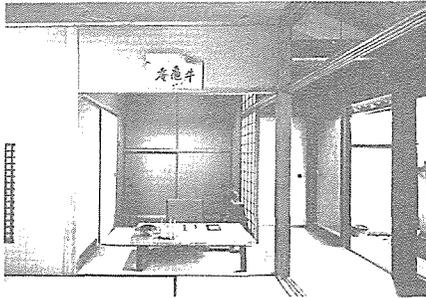


2階



1階 1/250

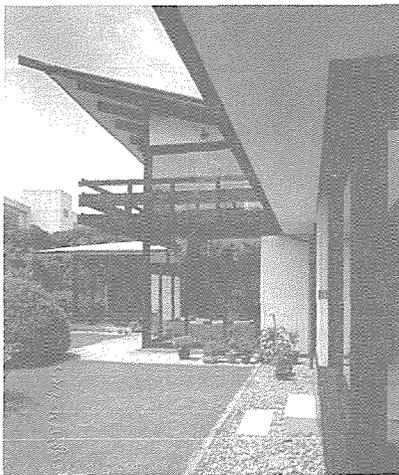
南面して和室の居住空間を並べ半間の縁側をつける。廓で囲えば開放的に住める。土や木や紙を素材とし量割りを生活の基本寸法とする。(「普通の家」に執着した自邸)



寝室6畳より書斎を見る。



土壁の塙を巡らせた外観。2階建てに見せない屋根の構成。



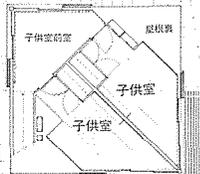
庭より見る南側外観。

## 高良邸

1969——埼玉県草加市

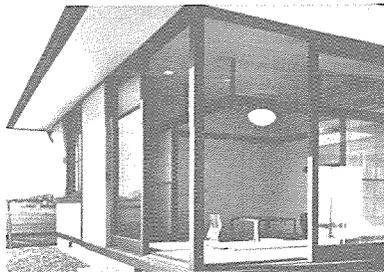
設計=高橋 昭建築設計事務所

写真/鳥畑英太郎(住宅建築1982年11月号)

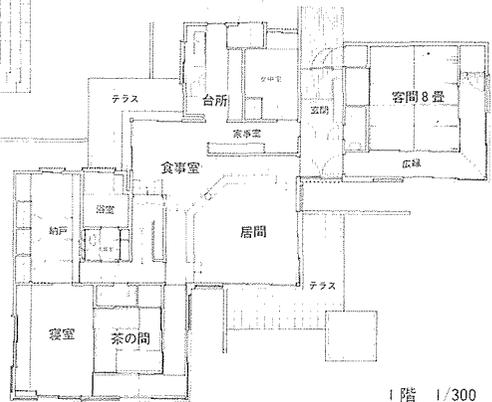


2階

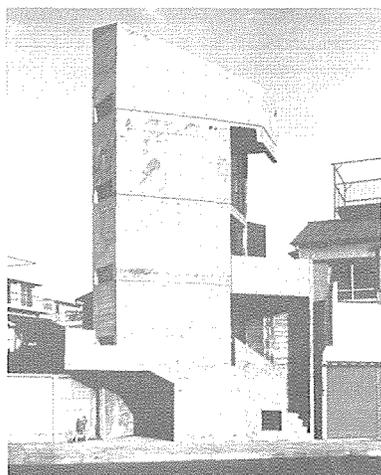
南側の庭へ向け雁行する配置。現代の放客屋を志向ながら、架構をすべて現しにし、明快な構造の合理性とその美しさを日本的空間に共存させた。



庭より茶/間を見る。



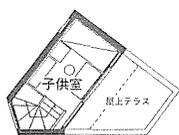
1階 1/300



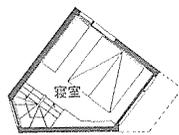
竣工当時の外観。



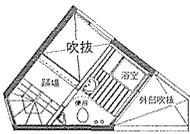
ビルに挟まれた現在の外観。



4階



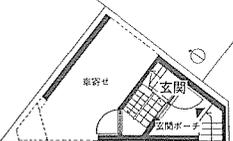
3階



中3階



2階



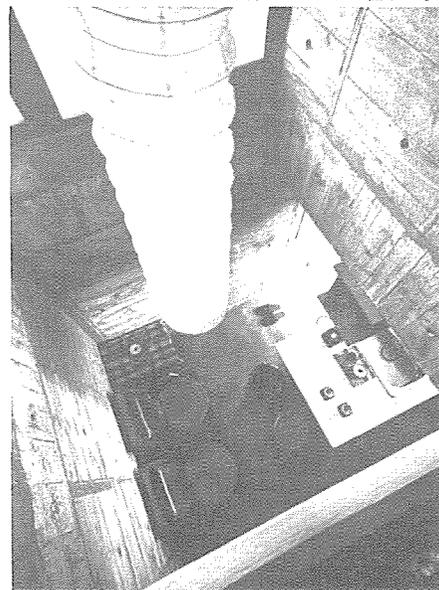
1階 1/250

## 塔の家(東自邸)

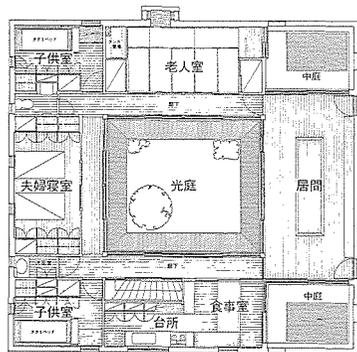
1966 — 東京都渋谷区

設計=東 孝光 写真/新建築社写真部(新建築別冊「東 孝光」)

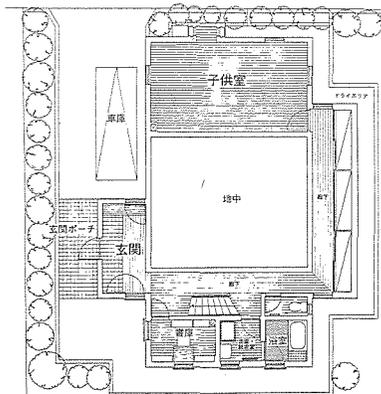
建築面積12m<sup>2</sup>×6層、あくまで都心に住み続ける意志を表明した、いっさいの間仕切りのない住まい。



中3階より2階居間を見下ろす。



2階



1階 1/300

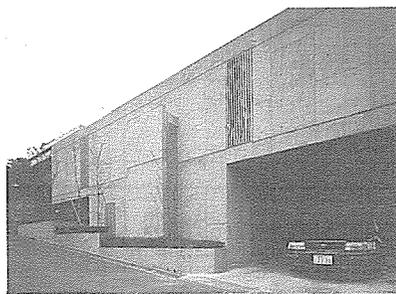
## 新百合ヶ丘の家

1990 — 神奈川県川崎市

設計=高須賀晋

(「高須賀晋住宅作品集」  
建築資料研究社刊)

安らぎの場であるべき住まいはシンプルかつ自然志向でありたいとする設計者のコートハウス。閉じたRCの壁の中に木の空間が仕込まれる。



道路側(北側)外観。(写真/畑亮)



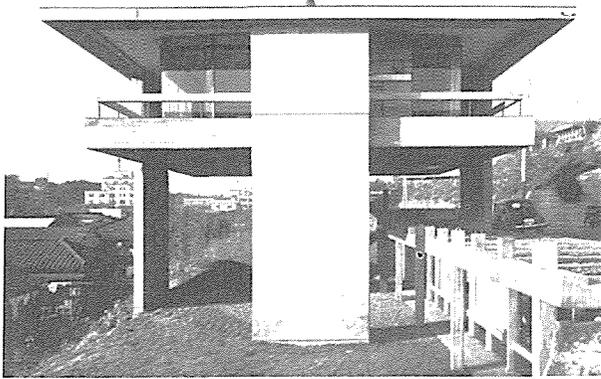
光庭より居間を見る。(写真/荒井政夫)

## スカイハウス(菊竹自邸)

1958—東京都文京区

設計=菊竹清訓

写真/川澄明男(新建築1959年1月号)



4本の壁柱に支えられた建物の外観。

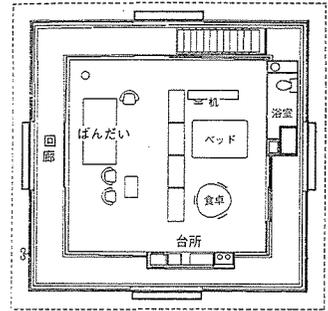


居間より南側を見る。

空中に持ち上げられた七・二m角の空間。この何もないワンルームに、取り換え可能なムーブネットと呼ぶ生活装置としてキッチン、バス、収納が組み込まれた。後にメタボリズムと呼ばれる考えをいち早く実現した。



ベッドから食卓、台所を見る。



平面図 1/250

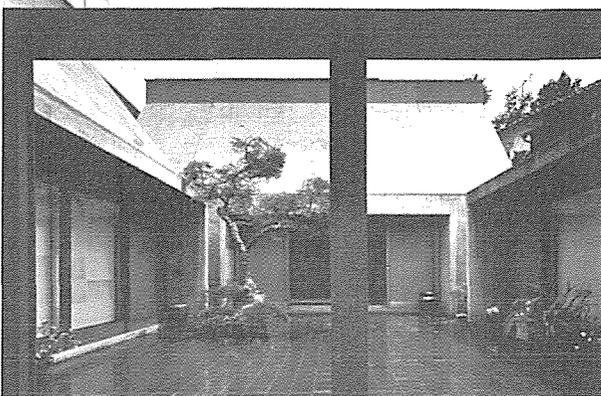
## 松川ボックス#2

1978—東京都新宿区

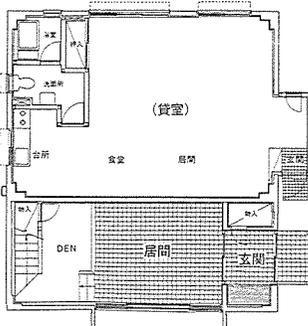
設計=宮脇 檀建築研究室

写真/村井 修(住宅建築別冊4『混構造住宅の詳細』)

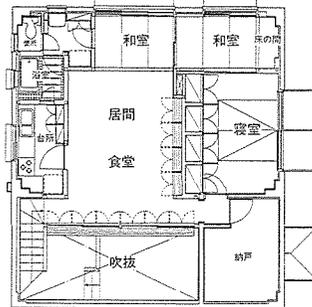
都心の住宅に囲まれた変形敷地に、中庭を開んで3期にわたってつくられた住まい。インテリア化した中庭と居間のつながりが見事。



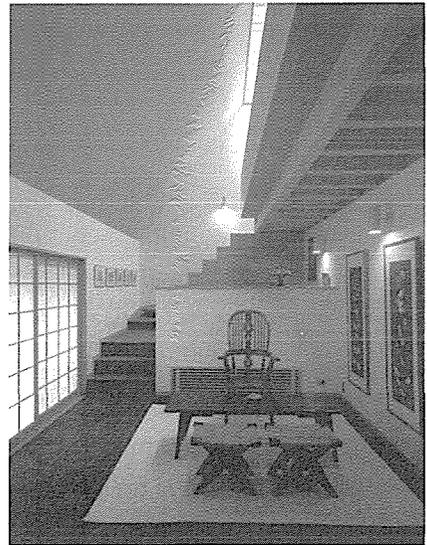
正面に、コートヤードごしに北側外観を見る。左右の建物は既存建物(松川ボックス#1)。



1階 1/250



2階



1階の居間。内部は木造の混構造である。

# 20世紀の反省

## 青木 正夫

我が国の二〇世紀は、社会全般にわたって色濃く残っていた半封建性を次第に克服し、近代化の道を揺れながらもたどった世紀であった。その反映として住宅も近代化の道をたどったといえよう。しかし住様式に関しては、近代化とはいえその内実は、常にアメリカ住宅を模範として徐々に近づいていった過程であったといえる。この傾向は今も続いており、間もなく始まる二一世紀に引きつがれていくことは明白であるので、その模倣が何処まで近づいたかの到達度を見定めることが必要である。

二〇世紀の始まり、即ち明治三三年頃の住宅は、政府の西洋化への教化策が漸く庶民にも浸透し、自ら矛盾を克服し平面構成が動きつつあった。玄関の間から次の間を経由して座敷へ至る格式ばった平面構成から、玄関の位置が移動し、座敷直入り玄関が生まれ、次の間が家族生活に積極的に使用され始めていた。近代化の一つの指標である自由が、わずかながらも初めて住宅内で獲得された時期であった。

一方、明治三〇年の建築雑誌に発表された岡本・北田両氏の和洋折衷の住宅改良案が引き金となり、建築家も漸く中流住宅に関心を持ち始めた時期でもあった。

間もなく一九〇三年に建築雑誌に発表された滋賀重列・矢橋賢吉・塚本靖の新進気鋭の三人の論が、以後の我が国の住様式の発展方向を運命づけてしまった。三人とも我が国の中流住宅をアメリカ住宅と比較して、その改良点を論じたものであった。改良点は数えきれないほどあると列挙しているが、住様式に関して、以後論じられてゆく諸点を殆どこの時点できりあげている。

アメリカ住宅と比較してその違いの最も顕著なものは、起居様式であることから、まずこの問題をあげている。矢橋氏は健康・体格の発達、能率の視点から、塚本氏は二重生活の不経済な点を強調し、滋賀氏は人体の発育上と炭酸ガスを含んだ下層の空気を呼吸する不衛生さを指摘して、椅子式にすべきである

としている。矢橋氏の講演のあとの質疑応答で、当時の学会長であった関野貞氏も、「第一に此の習慣（座る）を打破しなければならぬ」と述べているが、以後、建築家の間では、椅子式にすることが改良の第一の課題となった。次に、プライバシーの問題をとりあげ、各室を区画し機能分化を図る必要のあることを述べている。さらに滋賀氏は主婦の家事労働を軽減すべきことを指摘している。

このように、二〇世紀初頭にアメリカ住宅と比較して改良点を指摘し、途次、折衷論や融合論はあったが実りはなく、以後一世紀にわたって、いかにアメリカ住宅を模範として、それに近づくかの過程をたどるのである。

まず、指摘された改良点を一挙に解決するには、アメリカ住宅を安直に直写するのが最も近道であるとして、アメリカナイズが横行した。時流にのって、ウォーリス、ライトを始めとしてアメリカの建築家が盛んに活躍した。今世紀において、アメリカの建築家が最も多くの作品を残したのはこの時期であった。しかし、最もアメリカナイズを押し進めたのは、橋口信助氏が経営する設計施工会社の「あめりか屋」であった。啓蒙運動を展開するとともに、会社名どおりアメリカ式住宅の建設を行った。橋口氏の会社創立後しばらくの信条は、「其の改良の範は、之を亞米利加に求める事が最も策の得たものであるといふことだけを断言して置く」とし、一九二一年には『欲ふ可き現象』として「今や洋風は知識階級のシンボル」とまで述べている。

一歩後退はしているが、アメリカ住宅を範とする基本線をオーストラライズしたのが、文部省直属の国民教化団体ともいふべき「生活改善同盟会」である。欧米列強国に伍するため、「世界的人間」に改めることが必要とされ、それは「世界の国民」と同じ洋風生活を行なうことを意味していた。「六大綱領」の第一項には「暫時椅子式に改む可し」と寝室以外は全ての諸室に椅

子式を採用することを勧めている。また、かつての茶の間を食事室にすりかえ「茶の間なる名称は用いぬことと致して置きます」と茶の間を抹殺している。そうして私室としての「居間」を「家族共同の居間、即ち家族の団欒を目的とする室と決めて置きます」と強引に居間の概念をすりかえ押しつけている。アメリカ住宅のリビングルームの導入である。更に、アメリカ住宅の平面構成を想定して、公私の領域を明確に分けるには、二階建にして寝室は二階に設けるのが便利であると述べている。

この時期のアメリカ一辺倒がいかに激しかったかは、岸田日出刀氏の憤激した次の一文から察することができる。「建築に於ける排米を世の建築家にすゝめたい。……新興の帝都をアメリカニズムの建築で填められたらそれこそ耐ったものではない。……建築家はアメリカを全然知る必要はない」と。

この時期にアメリカ模範住宅を建てたのは、外国での生活経験者や知識人のみではあったが、指導的立場の人たちであった故に、その後には与えた影響は少なくはなかった。昭和初期の玄関横に椅子式の応接間を設けたいわゆる文化住宅も、その影響の一つである。

このアメリカ化も間もなく始まった戦争の国粹主義によって中断し、庶民住宅までに及ぶのは第二次大戦後である。

戦後の住様式に最も大きく影響を及ぼしたのは、西山卯三氏の『これからのすまい』と浜口ミホ氏の『日本住宅の封建性』であった。前者のその大部は、戦前の種々唱えられて来たアメリカ住宅と比較しての改良点を整理したものであり、後者は日本的なものとは全く封建的なものとして論じているが、その背後にはアメリカ住宅との比較の影がみられる。

半世紀にわたって懸案であった椅子式の導入は、奇しくも丁度半世紀目の「51CN型」（作成は五〇年）において漸く緒に付いたといえよう。この椅子式DKが戸建住宅にまでまたたく

間に採用されたのは、合理性故にあることは勿論であるが、当時アメリカの統治下にあり、滔々とうとうとアメリカ文化が流れ込んでいた世情と無縁ではない。更に、民主化の潮流に乗って、庶民自ら旧来の懸案を一つ一つ解決していった。

その課題解決の一つが子供室である。受験戦争が激しくなるにつれ、勉強の場として区画された椅子式の部屋が与えられた。最も象徴的につくり方が農村住宅に見られる。藁葺屋根を瓦葺に直すにあたって、二階造りにして設けている。TVの普及によって、DKの面積拡大により茶の間の代わりとして生まれたリビングルームもその一つである。接客空間と台所とは対角線上の最も遠い所に配置するという旧来からの平面構成原理でつくられた。更に、ツーバイフォー工法のアメリカスタイルの住宅団地が各地につくられるまでに至った。

今やアメリカ住宅と異なるのは、履き替えのための玄関と唯一タタミの部屋である一つ間座敷ぐらゐりとなった。しかし、既に指摘されているように、住宅内の最も基本的な空間である居間も、夫婦寝室も、子供室も、単にアメリカ住宅の模倣であり、形骸にすぎない。二一世紀への積み残された課題は多々あるといえる。

しかし、住様式など小さい問題かも知れない。二〇世紀が残した負の遺産である地球環境の悪化に伴い、環境と共生する住まいの在り方がもっと問題であろう。

最近体験した自然との共生の難しさの一つ。山菜ブームに乗って、タラの木が、芽の取り方が悪いため絶滅の危機に類している。タラの木は真直ぐ立っているのです、雨が降りたちまち枯れてしまうのである。こんなことは、かつて誰でも知っていた。

自然との共生は、技術やハード面だけの解決ではなく、一人一人の意識改革による行動が問われるべきである。

# 住宅、集落に欠落した精神的空間の重み

池田 武邦

住宅に限らず、集落においても同じであるが、戦前までは長い歴史の中で日本の文化として殆どの家、大部分の集落に必ずといって良いほど定着していたものが、戦後、新しく設計する戸建あるいは集合住宅、更にはそれらを含めた団地の計画段階で、完全に意識の中から欠落してしまったものがある。

それは家族の、あるいは集落の人びとにとっての精神的空間、聖域である。住宅の中では神棚であり、仏壇、仏間といった空間であり、先祖や家族などの物故者の霊を祀る聖域である。集落にあつては鎮守の森、あるいはその土地の護り神を祀る空間である。

近代合理主義の建築あるいは都市計画からは完全に欠落、あるいは追放されてしまったこれらの空間は、大学などの建築、あるいは都市計画の教育の中でも、今日殆ど顧みられていないといつても良いであろう。

もちろん、住宅は個人のものであり、そこには生活する人の価値観、人生観によって千差万別の考え方があって当然である。しかし、戦前までは極く常識的に日本人の住宅に普遍的に存在していた空間が、これほど見事に抹殺されてしまったことに対して、戦後の住宅建築史の立場からは、一体どのように考え、評価しているのであるか。

以上のような疑問を抱いたのは他でもない、私自身、戦後一九五九年に自宅を設計し永年住んでいながら、精神的空間の存在に全くといってよいほど無関心で過ごしてきたことに、現在深く反省させられているからこそなのである。遅ればせながら家族の不幸に遭つてから必要を感じ、新たに部屋の一隅に空間をしつらえ、以来、住居の中で生活上の重要な位置を占めている。

戦前までの住宅には、旧家はもちろんであるが、下町の長屋にも、大ききや仕上の程度にはピンからキリまでの差はあるにせよ、殆どの住居にそのような空間がしつらえてあつた。そし

て一家の祝い事、例えば子供が小学校に入学したり卒業したりした時には、免状などを供えてご先祖様に報告するといったことが日常的に行なわれていたものである。もちろん今日でもそのような環境をきちんと守り続けている家庭もないわけでは無いが、新しく設計する段階になると、設計者側に、私の場合と同様、意識から欠落してしまっている場合が大部分ではなからうか。だいたい建築教育の中で教える側に精神的空間を大切にする意識が欠落しているのが実状であろう。

私が小学生の頃、学期末になるとその期の成績が「家庭へのしらせ」といって通信簿に記され先生から手渡されて家に持ち帰り親に見せるしきたりがあつた。その時、成績の善し悪しにかかわらず、神棚の前に親と共に坐らされ、ご先祖様の霊に向かって報告を兼ね、小言を言われたり褒められたりするのを子供は神妙に聞いていたものである。

また、季節の節目の行事の時、例えば正月とか彼岸の中日には必ず神前に餅やおはぎなどのお供えをし、花を生けて手を合わせるのが、極く一般的に多くの家庭で行なわれていたものである。

神棚や仏壇に限らず、台所には火の神、井戸端には水の神など、家の要所所にそれぞれ神様が存在していたものである。

近代合理主義の教育を受けていた子供たちにとって、少なくとも私にとつては、それらは何となく「迷信」というイメージがあつて、親たちほど、真摯な態度で祈るといふ気にはなれず、うわべだけは神妙にして内心は上の空で別の事を考えていた記憶がある。しかし不思議なもので、それらの精神的空間はそんな子供心にも一種の懼れが一方であつたことも確かである。誰も見ていないところでも、何か良からぬことをたくらむ時、もちろんそれは子供のことで他愛もないことではあるが、一瞬、神仏の「罰が当たる」という言葉が心をよぎり、いたると

ころに居る、眼には見えない存在に見られているような気持ちになり、少なからざる抑止力が働いていたものである。

本来、日本の文化には、アポリジニー、アイヌ、インディアンの等の土俗信仰同様、自然を神として畏敬する心がその根源にある。山には山の神、海には海の神、水には水の神、火を扱うところには火の神、樹木でも人間の寿命をはるかに超えて生き長らえる古木には注連縄しめなわを廻らして神木として祀るという具合である。

人間は自然の一部であり自然の恵みによって生かされていると同時に、台風とか地震とかいった大自然の異変がもたらす脅威を体験する度に、極く自然に培われた畏敬の念が日本文化の根源をなしていることは否めない。そして「罰が当たる」という言葉によって自然の摂理に反した行為は、必ず神罰を受けるものとして律せられる文化をつくりだしてきたのである。

今日では数少なくなってしまったが、戦前までは日本の各地に多く見られた藁葺き屋根の民家は、その地域に産する素材でつくられ、その土地の気候風土に調和した土地固有の建築様式を形づくっていた。そしてその中で営まれる生活も自然を神とした日本の文化が根底となって独自の建築文化、建築空間を創りだしていた。

しかし、明治維新後、日本の近代国家建設を理念とした明治政府以来、日本における建築教育は東京帝国大学（現東京大学）を始めとして西欧の近代技術文明を基礎とした建築がその主流をなしている。私自身大学で建築を学び始めた一九四六年以来今日に至るまでも、その基本は殆ど変わっていないとあって良いであろう。言いかえれば、日本における近代建築教育は、日本古来の文化としての建築とは全く断絶して、西欧建築技術の導入によって新しく誕生したという、日本独自の特異な歴史を抱えている。

本来、近代合理主義に基づく近代技術文明は固有の土地に束縛されない極めて普遍的な性質を持っている。その近代技術文明から生まれる近代建築は、科学技術の進歩に伴い、土地固有の気候風土から開放された自由な人工環境を創出することが可能となってきた。極端な例は、人工衛星の如く空気のない宇宙空間においても生活可能な環境をつくり出すことができるようになった。したがって、これらの技術を駆使する近代建築は、一步誤ると建築が本来内在しているべき風土に根づき歴史に培われた文化的側面がながしるにされ、人が便利に機能的に住むための形の良い装置として設計されることになりかねない。

事実、私が大学を出て一九五〇年代に最初に取り組んだ住宅は、戦災で家を失った人びとに大量に質を確保した安価な住居を供給することを目的とした工業化製品としてのものであった。その原理は自動車製造工程に学ぶもので建築の文化的側面は殆ど切り捨てられていた。

顧みれば、風土に根づいた文化的要素を積極的に絶ち切ることによって、戦後日本の近代化は容易に促進され、経済の復興も急速に達成されてきたといえる。特に経済効果の大きい工業化への道の選択は、その道への切り札とも言えた。

しかし、こうして私自身、より良い建築、社会環境をつくり得ると信じてひたすら推進してきた近代建築や近代都市の建設は、半世紀前の日本の風景をことごとく変え、物質的繁栄と引き換えに日本の自然を破壊し、私達の先祖が築いてきた文化的遺産を惜し気もなく捨て去ってしまった。

今日の環境問題や、急増する忌まわしい青少年の社会問題などは、住居や集落における精神的空間をながしるにできた戦後の建築や都市計画の在り方と、決して無関係とは言えないのではないかと私には思えてならない。

## 戦後住宅に見られる個室化の傾向 稲垣 栄三

今あらためて振り返ってみると、二〇世紀という時代は、住宅の革新について多くの貢献を果たした時代であったといえそうである。産業革命後の大都市に集中した貧しい人たちに健康な住居を供給する方法を確立することに、建築家自身も関わってきた。二〇世紀初頭の近代建築運動そのものが、住宅供給と都市の問題を中心課題に据えていた。S・E・ラスマッセンによると、二〇世紀は、(一九世紀の)「投機の蜘蛛の巣からの脱出」を試みた時代だったという(『都市と建築』一九四九年/邦訳・横山正、一九九三年)。実際、西欧のいくつもの都市で、歴史的なものの積み重ねのほかに、今世紀になってから国家的な規模での法・制度の整備が絶えず実施されて、良好な居住環境を維持しようとする努力が繰り返され、良好な居住環境を見ることができている。

一方、今世紀の建築デザインにとっては、都市近郊に建つ新興階級の住宅という魅力的なテーマが常に重要な比重を占めていた。とくにF・L・ライトが「開放性のなかの広いシェルター」(『ライトの住宅』一九五四年/邦訳・遠藤楽、一九七〇年)と名づけた建築は、住宅という建築のジャンルに新しい生命を吹き込んだものだったといえよう。アメリカの大草原に建つその住宅は、自然と人間との新たな融合を実現したという意味で、「最も独創的なモニュメント」と呼ぶのにふさわしいものだった(V・スカリー『アメリカ住宅論』一九七一年/邦訳・長尾重武、一九七八年)。

かつてO・F・ボルノウは、住居の中の生活空間を、〈やすらぎ〉を得る〈住み心地のよい〉領域として描いた(『人間と空間』一九六三年/邦訳・大塚恵一・池川健司・中村浩平訳、一九七八年)。これはC・ノルベルグ・シユルツが、住宅は日常生活の場所であり、日常生活は連続するものを意味し、だからそれは親しい基盤としてわれわれを支える、といっているのと同じことである(『住まいのコンセプト』一九八五年/邦訳・川向正人、一九八八年)。〈やすらぎ〉の、〈親しい基盤として〉の空間という表現は、近代の掲げた住居の理想を最も忠実に伝えるものであろう。

しかし現在の日本では、その理想とすべき核心の部分が必ずしも安泰ではない。生活の拠点となるべき土地と建物が、経済的な論理と欲求によって脅かされるといふ状況を、まだ克服できずにいるからである。〈やすらぎ〉や〈親しい基盤〉という価値体系と同時に、いやむしろその前に、資産ないし商品としての価値についての考慮がいつもついて回り、しばしばそれが優先される。したがって日本の場合、都市も住宅も、長期的な安定から極めて遠いところに立脚しているという点で、基本的な貧しさから脱却していないといわなくてはならない。われわれの住む住居は、規模の大小や構造の強弱を問わず、震災後の応急仮設住宅、難民たちのテント、ホームレスの人びとの段ボールハウスとほとんど紙一重のところを位置している。

ところで、住宅の問題は普遍化するのが難しい領域である。数の問題はともかく、空間の質の話になると、各人の限られた体験しか確かな拠り所となるものがない。現在、生活の多様化はますます進行しているようであり、住居の外観や間取りだけでは、中で展開している生活の実態を推測することさえできない。われわれは遠い過去の住宅については、歴史学や民俗学や文化人類学の恩恵に浴しているが、むしろ現在起っていることの方が闇に包まれている。かつて西山卯三は、生い立ちから晩年にいたる西山自身の居住の歴史を、間取りのみならず家族一人ひとりの居場所や家具の置き方にいたるまでを、豊富なスケッチを挿入しながら叙述した（『住み方の記』一九六五年）。それは、現代の住居について書かれた数少ない証言の一つだった。

しかしそれにもかかわらず、現在、住居に関する情報は極めて豊富である。「住む」という体験を伴うことがないという条件付きで、いろいろな文化の中の住宅や町の風景が好奇心とともに飛び交っている。すでに判明していることは、人間の住まいが気候・風土に応じてまことに多様であること、見方を変えると、地球上には古代・中世・近代の暮らしが共存していると考えることができるということであった。

以上を前置きとし、かつ多くの推測を交えながら、戦後日本の住居をそれ以前と比較しながら眺めてみよう。

\*

戦後五〇年を越えて、都市住宅の様相はいくつの特徴を明確に示すようになった。戦前の住宅と比較するとそのへんの違いが明瞭であって、大まかには次のようなことが言えるのではないかと思う。まず、外界すなわち敷地境界線の外からのほぼ完全な遮断（あるいはこれの達成への願望）、人工的にコントロールされた室内気候、家電製品・情報機器・車などの建築空間への侵入もしくは氾濫、（建築だけでなく）これらのものによって構成される個室空間の連続、このほか全体として規模が小さく窮屈になったこと、大邸

宅が建てられなくなったことなども挙げてよいかもしれない。要するに、住宅の居住性能が格段に向上し、都市の居住密度を飛躍的に高めることができるようになったということであろう。戦前の、つまり半世紀ほど前までの住宅は、これとほぼ正反対の様相をもっていたのだから、戦後の住宅の変化は新しい建築の範疇の誕生と考えることもできなくはない。

新聞の広告やチラシに載っている建売住宅やマンションの間取りを見てみると、その範囲内での話であるが、近ごろの平均的な都市住宅は、居間・食堂・台所を中心としてこれにいくつかの個室がつくという形が、依然として優勢のように見える。いわゆるパブリックスペースと個室の両立という構図は、商品として造られる住宅では一応健在である。しかし植田実は、建築家が設計し一九九〇年代に完成した住宅一〇例を紹介しつつ、これらに共通する特徴として、私領域化の進行、すなわち居間・食堂を含むすべての空間の私領域化が進み、パブリックな生活の光景が家の中から消えていくと指摘している（『日本の現代住宅設計に何が見えるか』住宅総合研究財団研究年報二二号、一九九五年）。建築家の設計した住宅で、家族の実像がいつそう鮮明に読み取れるということは多分ありそうなことである。右に挙げた戦後住宅のいくつかの特徴にしても、そのすべてを個室化に向かう指標と捉えることもできる。しかし、家族は共同体幻想ないしは擬装として一般的には意味をもち続けているのだから、商品としての住宅はあくまで中心に居間・食堂を備えていなければならないのである。

住宅を、公と私、集団と個人といった二項対立ないしはその均衡によって理解しようとする試みは広く行なわれてきた。イーファン・トゥアンの『個人空間の誕生』（一九八二年／邦訳・阿部一、一九九三年）もその代表的な考察の一つといつてよからう。トゥアンは空間の分節化と差異化の過程を、西洋の食卓、家屋、劇場を対象としながら考察を進める。そして、テーブルマナーを身につけ、自分の食器で食べ、個室に引きこもり、本を黙読する人間すなわちヨーロッパ近代の人間像が誕生したのは、一六世紀末以来の空間の個別化に伴う現象だったとしている。

これによると、住宅の中に個室が生まれたのは（また住宅全体が個室化したのも）、ともにヨーロッパ近代の成立と並行する歴史的な出来事だったことになる。近代化する以前の都市の住宅は、貴族や領主の家族のほか、多くの親戚や召使、牧師、執事、小売商人、徒弟などが住み込み、あるいは彼らが昼夜を問わず自由に出入りして、そこがあたかも公共の場所であるかのように、仕事をしたり社交的な活動をしたりしたのだった（トゥアン前掲書）。その雑踏、その喧燥は、たとえば中世の宮廷を描いたいくつかの木版画などによっても想像することができる。

個室の誕生は、近代的な自我の確立の結果あるいは原因と位置づけられるようなことではなく、むしろその発端は、些細な振舞いや経験の積み重ねに基づくものだったらしい。N・エリアスは中世以後のヨーロッパ上流社会の行動様式の変化を克明に辿って、近代におけるそのモデルを「文明化」と名づけている。すなわち、食卓におけるナイフやフォークの使い方、漬をかんだり唾を吐いたりする行為、寝室における作法、これらのかつては標準的であった振舞いが、次第に羞恥心や不快感を覚える動作とみなされるようになった。そしてその範囲が次第に広がる過程で、徐々に自意識が生まれたのだという（『文明化の過程（上）』一九三九年／邦訳・赤井慧爾・中村元保・吉田正勝、一九七七年）。エリアス自身は、こうした「文明化」の過程を実証することで、社会の構造変化を説明しようとしているが、先のトゥアンの説がエリアスを踏襲していることはほぼ明らかだろう。

\*

一方、日本の戦前の住宅には、周知のように、どの時代、どの階層、どの類型をとってみても、個室というものが見当たらない。日本もまたヨーロッパと同様に、近代以前の一つの住居に住む家族は、通常、血縁だけでなく他人を含むのが一般的だった。農家も町屋も、住居は同時に職場であり、家族構成員は一般的に言ってすべてが労働力であった。少し大きな家には多くの

男衆・女衆が働き、商人・職人の家には丁稚・徒弟がおり、明治・大正ころの都会の家にも女中・書生・食客がいた。血縁以外の人たちを住居の中に受け入れる習慣は戦前までは広く残っていたのであって、住居は単純に家族だけの空間ではなくて、親族や知人が気軽に寄宿する場所であり、他人の子供を預かってしつけを施す場所でもあった。要するに住宅とは言うものの、その中の生活は社会の縮図そのものであって、身分や性や年齢による役割分担は極めて明快に決められていた。

平安時代の寝殿造、中世・近世の書院造の世界も、決して現代と無縁ではない。これらは住居というよりは厳粛な式典あるいは接待の会場のようであって、当時の絵巻物が物語るように、何十人いや何百人もの人たちが集まって、決められた一定の順序と方式に従って儀礼が進行し、重要な相談や会食が行なわれていた。ここでも雑踏や喧燥が充満していたであろう。しかしこれらの場所は同時に住居でもあった。貴族や武士たちが、その広大な家屋の中で日常をどのように過ごしていたか、そのイメージを描くのは必ずしも容易でない。儀礼的空間と日常的空間、ハレとケ、われわれはこの両者を近代の慣習にしたがって、時間的にも空間的にも分離したもの、あるいは対立したものと考えやすいが、しかし儀礼的でない日常などというものが、西欧文明に触れる以前の日本にあったかどうかは疑わしいといわなくてはならない。西欧で羞恥心や不快感を生んだのと同じ行為は日本でもあったであろう。しかし日本はそのような野卑な行為を儀礼の場から淘汰していき、儀礼を完璧な姿に仕上げていく。つまり、西欧で個人空間を生んだのと同じ動機が、日本では儀礼の洗練に向かう方向に働いたのであったろう。それはたとえば、調度や衣服の配色の見事さ、立居振舞いの優美さあるいは凛々しさ、他の人に対する心遣いのゆかしさ等々が美德とされるような文化を育てたということであった。日本の最も古い時代から継承されてきたその価値観は、空間のありようとしては戦前まで影をとどめていた。西欧における個の確立に代わる日本の価値の基準は、突き詰めると儀礼的生活の完成と継承ということに落ち着くはずである。

これまで幾度も指摘されてきたように、戦前の住居の性格はイエ中心であり、接客を主要な用途としてすべてが構成されていた。人は生まれると直ちにイエの一員として育てられ、地域の人びととの交わりの中で自己を形成するほかはなかったのだ。そこでは身分・階層・性の差による差別と規範がその構造を支えていたことも事実であつたらう。近代日本への変化は、明治・大正の多くの小説が描くように、その煩わしい人間関係や抑圧からの脱出あるいは逃避に始まる。そしてそれが住宅にも反映するようになるのがようやく戦後になってからのことだ。戦後日本の住宅における個室の擁護、個室へのこだわり、総個室化という現象は、少なくともその理由の一つを、個室を持たなかった、あるいは持とうとしなかった長い歴史の中に見出さなくてはならない。

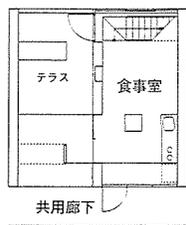
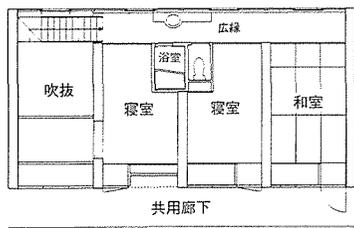
\*

戦後の住宅の変化は、戦前までの住宅の持つすべての価値の否定から始まる。狭小過密の戦災復興住宅の中では、戦前までの伝統は考慮に値しないと考えられた。座敷も床の間も玄関も、それらが封建遺制の象徴だという理由で拒否された。いま振り返ってみると、それはかなり徹底した過去の否定であつたと思う。核家族化の進行、閉鎖性への欲求、理念としてのプライバシーの獲得、果てしない安楽の追求、こうした変化と目標の設定とが、戦前までの手法を容赦なく追放していく。同時に、暗喩として蓄えられてきた細部の意味や信号も切り捨てられていったのである。

住居が歴史性を喪失し、もっぱら機能にのみ依拠するようになったとき、住居の個室化は始まっていたと考えなければならない。個室化の肥大は、住居が集団の生活の場として蓄積してきたさまざまな役割を忘れさせた。それは家屋を媒体として集団の記憶を受け継いでいくという役割である。住宅の中で家族という集団が生きているということは、生活を成り立たせているさまざまな些事についての体験を共有し、交流し、伝達することであつた。家族

は時代によって規模や構成に違いがあるとしても、常に、世代間の伝達の機能を持つ最小限の単位として存続してきた。それが人間としての生き方、人との付き合い方、自然と接する知恵を伝える確実な方法だったからである。かつて住宅の中にあつた付き合いの場とその機会は、今では都市の賑わいの中に拡散している。さまざまな公共施設で催される行事、盛り場に満ち溢れる刺激と魅力、家事労働を代行するサービス、これらが家族の団欒を見失った人びとの空虚な部分に忍び込む。戦後の住宅の変化は、都市化と連動した巨大な変質の一部なのだった。

住宅を公と私の二つの領域に分ける考え方に従うと、日本の住宅はこれまで、その両者が均衡を保った経験が一度もなかったといわざるを得ない。片方の偏重からもう一方の信仰へ、価値の重しの置き方に見られる振れがまことに大きい。へやすらぎの空間を獲得するためには、まだ多くの時間が必要なのであろう。(いながき・えいぞう／財団法人環境文化研究所所長、建築史家)



個室化が顕著な集合住宅の住戸例  
岐阜県営住宅ハイタウン北方 設計／妹島和世建築設計事務所

# 住宅アカデミー確立に寄せて

太田 利彦

## 二〇世紀における住宅研究

元来、人間の文化的営為は期間を区切って展開されるものでなく、厳密にはエンドレスに継続するものである。したがって世紀の特徴は歴史的な評価により、後世便宜的に与えられるものであって、予め次世紀に何かを期待して性格づけするのものがましい気がする。しかし、一年の計は元旦にあり、などといった、一つの節目で後先を考えるのも人間の習性とすれば、住宅研究のあり方を改めて考えて見るには、よい機会かも知れない。

ここでは第二次大戦後の半世紀が問題になっているが、二〇世紀は大雑把にいつて宇宙開発や情報革命などに代表される科学・技術の飛躍的進歩、そして高学歴社会や高齢化社会に象徴される知識や価値の平準化の世紀と言われる。確かに科学・技術の進歩は、人間生活の質的変換に大きな影響を与え、知識や価値の普遍化は人間の生きる権利の平等化に貢献したが、一方、ものの見方の細分化、分析手法の精緻化から、総合的把握の方法や仕組みに跛行的な遅れをとり社会の発展に不調和をもたらしたり、個の埋没を招き、異端を許さない新たな画一主義の台頭が懸念されるようになったとも言える。

こうした二〇世紀の遺産は次世紀に引き継がれることになるが、住宅研究にあっても、個の再発見と人間社会の再構築のための知識や価値の総合化への取り組みが、より明確な形で課題として意識されるようになったのではなからうか。

実はもう一四年も前のことになるが、「住宅研究のあり方」と題して、住宅研究の枠組みについて論じたことがある。住宅の概念規定を明確にして、住宅を人間生活の中でどう位置づけ、問題意識と研究の視点を明らかにして、研究の多様なアプローチを期待するというものであった。本財団がまだ新住宅普及会と言っていた頃のことである<sup>＊</sup>。いま読み返してみると、ある

意味で古典的なアカデミズムに対する思い入れが強すぎる感があり、研究という概念の二〇世紀的な解釈であったとも言える。しかし、その文脈に本質的な誤謬はなく、むしろ改めて住宅研究による新しいアカデミズムの確立に対する要請を主張してみたい。

## 総合的研究の意味

もともと研究の成果である学問は、多面的な総体事象を、ある切り口から説明することで成立している。研究行為は基本的に分析的であり、その説明は往々にして理屈は分かるが釈然としないことのあるのは当然である。住宅もさまざまな側面からの価値を伴い、その一面的な価値だけを云々しても評価は完結しない。こうしてみると、住宅総合研究財団とは正に、時代を先取りしたネーミングと言え、総合とは何を意味するかを問題にしたい。

第二次大戦後、戦災による住宅不足の解消を一つの目的としてつくられた財団の設立趣旨は、当時の問題意識として理解し易い。ある程度、所期の目的を達成した今日、これから次の世紀に向けて住宅総合研究財団に求められることは、より本質的な住宅の意義を、より多角的な研究により究明し提案していくことではなからうか。もちろん、これまでも住宅に関わる研究をさまざまな視点から捉えようとする試みはある<sup>＊</sup>。しかし、ここでは住宅という対象を、ただ細分化した既成の各専門分野からそれぞれの切り口で、どのような課題として捉えるかを問題にするのではなく、住宅そのものを総合的に扱うにはどのようなアプローチが可能かを提案していくことが求められているということである。

ホームレスのダンボール箱まで含めて、住宅を人間の営為に関わるあらゆる生活要素の基本的拠り所とするならば、住宅の概念を追求する場にこそ、人間社会の多様な価値に対する研究

のアプローチの原点を見出す可能性があるのでないか。たとえば、これまでの建築における住宅研究でも人間生活に深い関心を示しながら、社会生活の最小単位である家族の概念について何を提案し、また教育の場として住宅から何を提供し得たかなど、もう一度、住宅研究の枠組みを根源的に問い質してみてもよいのではないかと思う。<sup>\*2, 4, 5, 6, 8。</sup>

### 住宅研究の意義

住宅研究で今後、問題にしたいのは生活の意義に対する把握方法である。建築分野では人間生活との対応ということで、生活に関わる住宅の研究は数多くあったが、比較的現象面を問題にし、生活の意味するところが曖昧であったように思う。たとえば食寝分離の概念にしても、人間生活でどのような意味をもっているのか、それをア priori に公理とするまで、詰めきれていなかったように思う。消費の社会化、育児の外部化など、人間の営為が住宅から次第に外部化する中で、最後まで残る営為の本質を確かめる必要がある。

こうした生活に対する捉え方から研究方法にも問題がある。たとえば生活の実態調査など現状把握から問題点を見つけ出すという研究の方法そのものの問題ではない。問題は見える現象を唯一の実態と捉えるところに研究の限界があったのではない。研究の方法があまり分析に偏ると、操作可能な現象が関心の的になり、実態の全体像を見失うことがある。見えない現象をどう把握し、実態をどう抽象するかが問題なのである。現象から始めるにしても、より多次的なアプローチを展開し得なかったところに、建築学における住宅研究の矮小化と提案の局所化に止まる原因があったように思われる。英語の house の語源と言われる古代ギリシア語の oikos から economy と ecology の概念が発展したのに比し、建築からは遂に建物としての住宅以上の概念を発展させることはなかった。

しかし、人間の社会生活の原点となる住宅を対象とした研究には、建築的視点に限らず多面的なアプローチが必要とされるからこそ、今世紀の後半になって喧伝されるようになったインターデイシプリナリーな研究の実現可能性が極めて高いと言つてよい。実はそれが二〇世紀に閉塞感をもたらした学問体系のパラダイムシフトのトリガーとなることが期待できるのである。住宅こそ新しいアカデミズム確立のために、最も相応して課題を内包する研究対象の一つと考えられるのである。そして、さらに問題にしたいのが研究体制である。研究は既存の権威を否定するところから始まり、そこでは少なくとも、古典的なアカデミズムを越えた学問のパラダイムシフトが要請される。したがって、その研究母体は既存のアカデミーではなく、パラダイムフリーの在野の研究機関にこそ可能な社会的役割と考えたい。そこにまた、この財団の社会的使命と存在理由があるように思えるのである。それがすなわち新しい住宅アカデミーの確立を主張したい所以<sup>ゆえん</sup>である。

(おた・としひこ/ ㈱ポリテクニクコンサルタンツ代表取締役社長)

### 参考文献

- \*1 大河内一男(著者代表)『東京大学公開講座II「家」』東京大学出版会、一九六八年。
- \*2 延藤安弘『こんな家に住みたいな』品文社、一九八三年。
- \*3 太田利彦『住宅研究のあり方』(財新住宅普及及住宅建築研究所『研究所だより』0号、一九八四年七月)。
- \*4 外山知徳『住まいの家族学』丸善、一九八五年。
- \*5 第五回住宅建築シンポジウム「人間形成と住居」(財新住宅普及及会『住宅建築研究所報』一九八五年)。
- \*6 渡辺光雄・高阪謙次編著『新・住居学―生活視点からの9章』ミネルヴァ書房、一九八九年。
- \*7 早川和男(編集代表)『講座 現代居住』東京大学出版会、一九九六年。
- \*8 藤原智美『家をつくる』ということ』プレジデント社、一九九七年。

# 焦土からの啓示

## 大谷 幸夫

二〇世紀もあと一年有余の歳月を残すのみとなった。文字どおりの世紀末に突入して、社会のそれぞれの分野で、私たちが生きてきた時代の確かな記録と、冷静に時代を読み返す見直しの作業を踏まえて、人それぞれに新しい世紀に向けてどう踏み出すか模索が進められているようだ。そんな気運も反映してか、近頃は私などにも何かと問い合わせがあったりする。半世紀ほど前、私が丹下健三先生のもとで経験した幾つかの都市の戦災復興計画のことや、広島の平和記念公園ならびに記念館など、新しい時代を目指した建築活動についての問い合わせである。

ところで私が記憶し理解している程度のことだが、時代の記録として、あるいは、時代を読み直す新たな手掛かりとなるなどとは到底考えられない。しかし、そうかといって気軽に答えるには、その後の半世紀にわたる建築と都市の激しい変貌が思い浮かび、それらとの文脈がからみ合って重苦しい。その上、その行きつく先のパブルの狂宴とそのあえない終焉、それに続く阪神・淡路大震災によって、私たちの眼前には、半世紀前の焦土が位相を変えて再び現れていた。それは私たちに、もう一度半世紀前に立ち戻って考え直すことを求めているように思われた。

私も敗戦直後のこの時代の思潮や行動を、建築と都市に関わるその後の多様な事態と照応させながら、もう一度読み直す必要があると思っている。戦後の半世紀をかけて、位相を異にするとはいえ、なぜ振り出しに戻るような

事態を招いたのか。戦後の発足の時点に、既にその後の事態の萌芽や要因が内包され潜んでいたのか、もう一度検討しておく必要があるのだろうか。

しかし私には、いま直ちにこうした視点で体系的に話ができるわけではない。とりあえず、私たちが敗戦直後の時代、何を大切なことと考え、建築と都市の新たな出発点で何を見たか、高度成長期の変容をどう受け止めようとしたのか、といった幾つかの項目を介して、先の設問について考えてみたいと思う。

### 当初の二つの課題

第二次世界大戦が終結したとき、東京をはじめ主要都市のほとんどが戦災によって焦土と化し、失われた住宅の数は数百万戸といわれていた。また国の経済は崩壊し流通・循環のシステムも安定性を著しく欠いていた。当時、焦土に在って住まう家も職もなく、飢えの不安に苛まれている人びとが何百万なのか数千万に達しているのか、私たちには定かではなかった。国は混乱していたのであるが、しかし建築を志すものにとつて、取り組むべき課題が何であるかは、ほとんど議論の余地もなく自明なことであった。破綻した国の経済のもとで、如何にして住宅をつくり人びとに提供するか。何を手掛かりとして、如何なる手順で都市を回復し、人びとの生活を支えるか、といったことである。

また、もう一つ建築家の夢として、今世紀に入って欧米に開花した近代建

築の日本への導入・定着を図りながら、日本の建築ならびに都市の近代を、建築家それぞれの考えで描き展開することであった。

ここに述べた第一の課題は、敗戦がもたらした圧倒的な現実が在って、私たちはその現実のもとに生きており、この課題は、共有されたこの現実から導かれ規定されているがゆえに、議論の余地もなく了承されている。

第二の課題は、幕末から明治維新に始まり、第二次大戦のあたりから著しい偏向を受け、敗戦に到って遂に瓦解した我が国の近代化の歩みを、まずは偏向から解放し、改めて西欧近代の受容と我が国固有の文化の継承、といった文化の歴史的運動に見る原則的な方式の復権を意識している。とりわけ西欧の文化を受容することと伝統の継承の両者の葛藤を、どう受け止めるかは建築家それぞれの考えや主張にゆだねるべきことが強く意識されていた。それは戦時中の事態を反映しており、文化活動への権力あるいは権威の介入を極力抑止しようという意志の表明である。

### 建築と都市の真意

私たちは、以上のように戦争という圧倒的な現実と、敗戦に到る明治以来の歴史的経緯に規定されて、取り組むべき課題を確認し共有していた。そして重要なことは、戦災による焦土に生きること、蘇生する建築と都市の初源の姿、あるいは在りようを垣間見たこと。そこに建築と都市の人間にとつての真意、あるいは在り方の原則といったことを身体で感じとつたことである。

ここにそうした真意や原則の幾つかを掲げる。まず私たちは敗戦の圧倒的現実と近代化の歴史的経緯に規定されて、当時迷いはなかったがさらに附言すれば、うち続く戦争の無惨と理不尽によって、幾度も強いられてきた胸の潰れる思いから、ようやく解放された安堵感と追悼の気持ち、人びとは心の底に共通に抱いていたこと。生きることの厳しさにもかかわらず、当時の人びとの精神の安定は、こうした人間としての共感が支えていたのだと思う。そして戦時中とはより、後世にも決して経験することのなかったこの精神の平穏の時間の中で、焦土に立って建築と都市の回復に取り組むことで、私たちは素直に、まずは建築も都市も平和を絶対的な成立の要件としているこ

とを納得した。

また人びとも私たちも焦土に晒されながら、建築も都市も、人びとを何かから守るためにあること。人びとを守り育むものとして在ることを、身をもって感じとつた。私たちは戦争という強大な暴力が建築と都市を破壊し、人びとを抱きとめる何ものも失った事態を眼前にして、剥き出しの人びとの姿を焦土に追いながら、建築も都市も平和を絶対の要件としていること。それが人を守り育むために在ることを体得し、肝に銘じたのである。

### 都市の資質について

焦土にあつて建築と都市に取り組み、そこに見た初源の姿は、もとより人それぞれに多様なはずである。私も焼跡の小屋掛けに母と姉弟たちとくらし、人びとが一人二人と立ち戻り、赤土の上に小屋を建て生活を再開することで、まちは僅かではあるが、しかし確かに生氣を取り戻してゆくのを実感した。一つ一つの小屋が、一人一人の市民の生活が寄り集って活動を積み重ねてゆくことが、まちの回復の素地を確実に強化している。市民とまち、建築と都市の相互関係の当初のやりとりを目の当たりにしたのであるが、何よりも都市は終局において、人がつくるものであることを強く印象づけられた。

また人びとが一人二人とまちに戻ってきて下さることが、夜の淋しさや怖さをどれほど和らげてくれるものか、身にしみて有り難く思った。そして人と人との間の自ずからなる交流、あるいは支え合う気配を感じながら、人はなぜ寄り集まって住まうのかの示唆を受けた。顔の判別はできなくらい離れてはいるが、向こうの台地で立ち働いている人と顔が合ったと感じたとき、互いに暗黙の挨拶を交わしていたことを今も覚えている。

たしかその頃から十数年経って、私は都市の資質について少しばかり調べていたが、都市とは他者を迎え入れるところ。異質を許容する度量を身に付けていて、それによって豊かな多様性を育み、多様な事態に適切に応答する能力を蓄えており、それ故に、都市はさまざまな時代を受け止め長い歴史を積み重ね生き続けている。一方、多様な異質性の無差別的な衝突がひき起こす抗争や混乱を、調停し制御する能力と機構を都市は身につけているもので

あり、人びとにとって、都市は安全保障の機関であること。人びとが都市に集まり、高いも保障され豊かさを育むことができるのも、こうした都市の資質によるものと理解した。そして戦後の焼跡の台地で交わした挨拶ことや、夜の人影に何とも言えぬ安らぎを感じたことを思い返しながら、都市再生の初源の状況の内に、都市の核心ともいべき資質の萌芽あるいは因子が、既に芽ばえていたことに驚いていた。私たちはこうした都市の資質をこそ、もう少し意識して守り育むべきなのである。

### 経済事情と近代建築の方法

我が国は戦災復興を経て経済の高度成長期に入り、それ以降は、私などの思いもよらぬ状況が建築と都市に出現している。しかし先の都市の資質のよりに、後世の事態について私たちがまともに受け止めてこなかった多くの示唆が、建築と都市の初源の在りようの内に隠されていたことと思う。ここにデザインの問題に関連して、その一端に触れる。

当初の課題の一つに我が国の建築と都市の近代及び近代化の問題がある。そこでは先ず、欧米に開花した近代建築の日本への導入・定着が意図されていた。しかし文化の体系あるいは土壌を異にし、さらに破綻した国の経済状況と、それまでの工業水準などから、近代建築の導入・定着が早急に進展するなどは、誰も思っていない。ところが、近代建築導入の妨げと思われる敗戦直後の我が国のこの現実が、近代建築の思潮と方法を我が国の社会が、早期に受け入れることを誘導している。すなわち、経済が窮迫し利用・動員できる資材も資金も、甚だしく限定されているがゆえに、必要不可欠の要素・要件によって、何もかも附加することなく、必要最小限の住宅を構築する、といった近代合理主義のデザイン思潮及び方法は、極めて素直に受け入れられている。それは西欧文化に実った一つの結実というより、我が国の現実が導いた必然的な手法として受け入れられ、それは伝統的な住宅の約束ごとなどを飛び越え、人びとが厳しい現実のもとで家族を守り育む新しい住居をつくることを支援した。

私たちが戦後間もない時期の木造住宅に、今でも新鮮な感動を呼び覚ま

れるのも、当時の厳しい現実に規定されながら、それを突き抜けて、住宅の真意と明解で深い合理的精神の貫徹が読みとれるからであり、今は見えにくくなった家族像のおもかげがなつかしく、私たちは現在の過剰と豊饒が見失っていた清貧の高貴をそこに見るのである。

### 必要不可欠の要素ということ

ここに半世紀ほど前の戦災復興期に、私たちが取り組もうとした課題について、また、建築と都市の再生の現場で何を見てきたかについて述べてきた。こうした戦後の当初の時代の解明はもとより重要であるが、今求められているもう一つの設問は、その後の高度成長期から今日に到る建築と都市の著しい変貌を——近代建築による都市の様相の激変もその一例であるが——、戦後の当初の時代との文脈で、どう受け止めるかということである。

まず今日の建築や都市開発に見る状況は、「必要不可欠の要素・要件によって、必要最小限の建築を考える」といった近代建築当初の思潮と方法の世界とは、対極的な様相を呈している。現代では巨大な華麗さが競われ、巨大なアトリウムや特異な造形あるいは架構が誇示されており、建築及び都市の意味や位置づけが変わったことが伺える。すなわち現代の建築や都市開発は、国の高度成長を維持し推進する重要な経済戦略と位置づけられている。経済循環を大きく運行させるためにも、建築や都市開発は可能な限り大きく華麗で高額であることが望ましいことになる。

現代は戦後当初の必要不可欠の要素から成る清貧の建築とは、気質を全く異にしているのであるが、よくよく考えてみると、建築も都市開発も昔と変わることもなく、今も必要不可欠の要素から成る必要規模のものなのである。時代によって変わるものは、必要不可欠を判断する価値基準・価値体系である。現代は規模が大きいたが経済戦略上必要不可欠なのであり、情報化・記号化の進展もあつて、社会を活性化する上でイメージのウエイトが増大していることなども反映して、社会を活性化すること、造形的インパクトの強いことがより望ましいのである。またこうした気運のもとでの事業では建設費を押し下げる社会的要請は弱く、大勢として経済規模の拡大を底支えている。

一方、戦後当初の清貧の合理主義が、これほどまでに急速に姿を消したことは、当初の事情が強く影響しているようだ。先にも触れたが、戦後社会が近代建築のこの思潮と方法を受け入れたのは、当時の逼迫した経済事情が強く影響している。そして我が国では近代合理主義を思想として、論理として深めることを怠り、「近代化」は自らのバックボーンを強化していない。

それ故、この思潮と方法の社会への導入を外側から支えていた、枠組みとしての国の経済事情が大きく変動したとき、バックボーンの脆弱なこの思潮と方法は、支えを失い変質と歪曲を抑えることができなかったのである。

なお、戦後当初の近代建築の思潮と方法については、もう一つ我が国の文化の伝統との関わりの問題がある。先にも述べたようにこの思潮と方法の社会への導入は、経済的事情に強く規定されたものであり、我が国の文化的建築的伝統と正面して対峙し、異文化の受容と合成を模索する、といった正統的な文化運動のプロセスをしっかりと歩んではない。つまり近代建築の我が国への導入・定着は、大局として、伝統的文化の体系からの支援を受けておらず、文化としての背骨がひ弱なまま、もっぱら時の経済事情に左右されている。

近代建築の導入を介して、我が国の建築の近代をそれぞれに描くという建築家各自の課題のゴールは未だ遠いようだ。

### 「経済こそ大義」に抗して

この半世紀を振り返ったとき、我が国では残念ながら、経済こそ大義、という思潮のみ突出し、それと対比して、思想性や伝統的文化的体系あるいはものごとの歴史性を軽視する風風がたいへん気にかかる。高度成長期を経過しながら、建築も都市も次第に守り育むべきは人よりも経済、の傾向をあらわにし、やがてバブルの渦に巻き込まれた建築と都市は、肥大化した日本経済の虚構性を、そのまま体現している。また高度成長期を通して、都市への新たな膨大な集積は果たされているが、国土の広範な地域で自然環境と共に町並みなど歴史的文化遺産が著しく破壊され消滅したことに、現代の思潮が端的に表明されている。ここに指摘できることは、先に近代建築の導入にあ

たって、我が国の伝統的文化的体系との対峙と受容、あるいは対決と交流がしっかりと進んでいないと言ったが、都市のレベルにおいても同じ性格の問題が起こっている。都市改造や再開発計画などでは、これからの都市活動を担うまちをつくろうとしているのであり、現代的価値の実現を目指している。しかし、都市とは歴史的存在として現存しており、再開発事業などでは先行して在る生活及び文化の体系に、これからのまちという新たな文化系を導入するときの正規の手続きを踏むべきなのである。こうした手続きを軽視して現代の価値の実現を強行する、そういった思潮が自然や歴史的文化遺産の破壊・消滅を増幅させ、都市の本質としての多様性や豊かさを否定している。要は建築も都市も、それを考える枠組みに歴史性を常に組み込むことが必要なのである。

また、思想性の問題であるが、先に触れたように、建築・都市は何時の時点でも、誰かを何かから守り育むものとして在り、また、常に必要不可欠の要素によって必要な規模を維持しようとしている。それ故、発展し成熟した社会では、多様な階層・分野の錯綜する社会構造のもとで、建築や都市の真意も原則も、意味の変換や転位が多様起こる。再開発事業などに典型例を見るが、現実の場では建築も都市も優れて党派性を持った存在である。ある人たちの利益を守り育み、ある人びとに不利益をもたらし、排除したりもする。また環境問題の今後の広がり等も考えたとき、こうした事態に適切に対応し、社会の公正性・安全性にも参加してゆくために、思想性・論理性をしっかりと身につける必要がある。

半世紀ほど前、敗戦直後の焦土に在って、建築と都市の初源の在りように見たそれらの真意を、私たちは焼け跡の牧歌的復興の歌にとどめてしまったのではないか。建築も都市も、如何なる時点にあっても、守るべき人を守り育むものとして、常に必要不可欠の要素で自らを律することができるように、建築を志すものが、高い思想性と精緻な論理性を身につけ、自らを整えることを願っている。

(おおたに・さちお／大谷研究室代表 建築家)

## 誤算のキーワード 奥村 昭雄

今では信じられないようなことだが、ほんの二・三〇年ほど前には、資源やエネルギーの消費量はその国や社会の文化のバロメーターだと考えられていた。建築もその流れの中にあつて、開発と消費の拡大の先兵の役を担ってきた。個人の生活レベルでは、必ずしもすべての人が同調していたわけではないが、生活関連エネルギーの使用量は、戦後数十倍に拡大してしまつた。

最初の衝撃は、二度にわたる石油危機だつた。これを深刻に受け止めたのは産業界で、生産用のエネルギー消費の縮小はその後が続く繁栄のベースになつた。建築の中でも、太陽熱を始めとする自然エネルギーの利用の試みが始まつた。生活用エネルギーとして、その大部分を充足することができるし、自然エネルギーの希薄な普遍性と地域性は、分散型の利用形態が適していることもわかつてきた。同時に、われわれが信じてきたエネルギーの消費や効率という概念を、持続的で無償の自然エネルギーに適用することに矛盾が生まれた。太陽熱、光発電、風力など、次の世代に渡し発展させてもらうに足る魅力的な技術も生まれてきた。



石油危機は最初の信号に過ぎなかつた。気候変動、森林の破壊、増大する廃棄物、有害化学物質、ホルモン類似物質、やがては人工的な窒素肥料も問題になってくるだろう。建築もその外にいることはできない。高気密化された住宅やオフィスの室内空気は、外気よりも汚染されている場合が出てきている。今までの限定されたコストの捉え方や、換気 $\parallel$ 熱損失というような一軸上の考え方は解けなくなつてきた。無害で持続的な再生可能な自然素材の環流システムなど、展望を開くためにしなければならぬことはあまりにも多い。個別な事象の解決を怠つてはならないが、起こっていることの原因はすべて人間の欲求に発している。メンテナンスフリーとか除菌などといった個別化されて増幅した欲求レベルの集積の結果でもある。健康とか生き方といった欲求の質として捉え直せば解決の道がある。建築は、間違いなく重要な加害者・加担者の一人であつた。建築だけで解決できないことも多いが、建築が加わらなければ解決できないことがほとんどである。

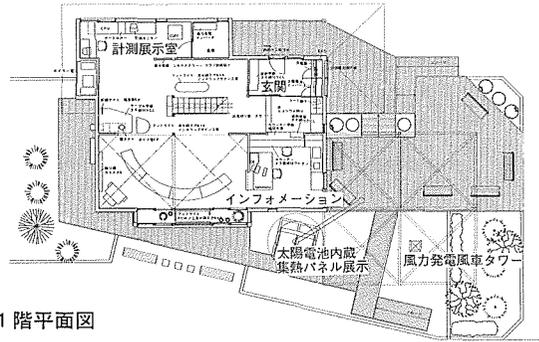
最近われわれは、居ながらにして、熱帯雨林の多様な植物や昆虫の生き方、サバンナに暮らす動物たちの織りなす世界、極地に適合した鳥の生態、などなど地球上に広がるすばらしい生物世界を知ることができるようになつた。生態学から分子生物学まで、研究の幅も広く深くなつた。われわれの身近な自然を見る目も変わつてきた。それは、地球上の生物世界は切り離すことのできない一体のものであつて、人間も文明もその中の一環としてしか存続できないということであつた。これは、二〇世紀の人間の知つた最大のことかも知れない。精緻なセンシングと解析、情報技術の成果である。

### ■プレアセンター

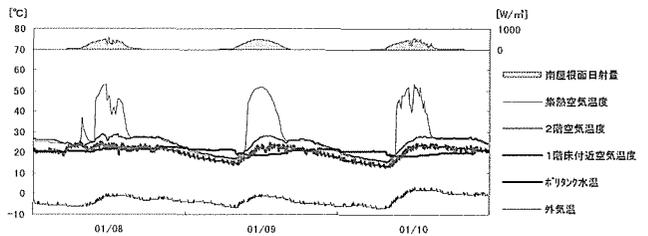
釧路実験棟「プレアセンター」は、PLEA国際会議のインフォメーションセンターとして、会場である釧路国際交流センターの前庭に、日本でのパッシブソーラー技術とその実際の紹介を目的に計画された。厳寒の地で真冬に開催されるパッシブとローエナジーをテーマとした市民参加型の国際会議で、国内外の専門家と、開催地の市民に、日本でのパッシブと低エネルギー建築の実際と、次世代技術について示すことが目的であった。

インフォメーションセンターとして機能した国際会議の準備期間からこの建物における、自然エネルギー利用の実際については、その計測データをインターネットを通じて公開し、国内外からの注目を集めた。国際会議の開催された一九九七年一月八日から三日間については、晴天に恵まれたこともあって、補助暖房なしで、快適な室内気候を実現することができた。風力発電と太陽光発電を行なっており、エネルギー自給住宅の可能性を示すことにも成功した。詳細については左記に公開している。

url : <http://www.quiet.co.jp>



1階平面図



釧路プレアセンターの写真と計測データ

設計/木曾三岳奥村設計所 写真/上田明  
データ計測/OMソーラー協会

われわれの頼っていたキーワード……量、速度、コスト、効率、集積率、景気指数……その他云々といった軸は、すべて間違っていたとは思われないが、その上にもう一つ上位の価値規範が加わって、多軸な構造の一部として再構築されなければならぬと思う。経済軸以外の価値の位置づけについての合意が形成されていない段階では、例えば、ある建物のコスト・効率について「生産から廃棄に、または再生に至る期間の、ある使用状態における」とか、ある地域の森林資源の利用速度について「再生と持続的利用を前提とした上限」、というような限定した使い方をしなければならぬだろう。

私はまだ、「二〇世紀から二一世紀へ向けて贈る言葉」を持ち合わせていない。新しい構築のための足がかりを模索することが先決だと思っている。

(おくむらあきお/木曾三岳奥村設計所代表取締役、建築家)

竣工 一九九六年七月

所在 北海道釧路市幸町三丁目三番地

建主 (社) 日本建築学会PLEA国際会議実行委員会 (現在は釧路市に移管)

設計 木曾三岳奥村設計所

構造 木造二階建 建築面積一三六・八㎡

延床面積一八二・八㎡

一階/一一八・八㎡ 二階/六四・〇㎡

屋根 屋根一体型アモルファス太陽電池

外壁 一階/砂漆喰塗り 二階/カラマツ化粧

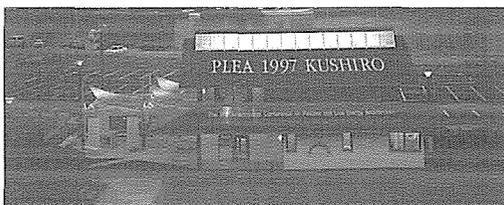
リブ付き下見張り

建具 既製木製気密断熱サッシ

設備 空気集熱および温水熱交換

自家発電 太陽光発電+風力発電(逆潮

流あり系統連系)



釧路プレアセンターの写真

# 人間の“生”の表現

## 鬼頭 梓

● 私たちの世代にとっては、戦後の五〇年余りの歴史は、殆ど夢中で過ごした歳月でした。そして気が付いた時には、二〇世紀は大変な課題を二一世紀に残すことになっていました。その課題はあまりに多方面にわたっていて、これがその課題だとひと言で示すことなど、とても出来ないありさまです。戦争で壊滅的な打撃を受け、殆ど焦土と化した日本は、そこから奇蹟と言われるほどの発展を続け、今でこそバブル崩壊後の低成長、もしかするとゼロかマイナス成長にもなりかねない時代を迎えて不安をおびえています。この国の戦後の五〇年は、世界でも稀にみる平和で幸福な五〇年でありました。その平和と幸福に浸っている間に、世界は地球全体を覆う危機的な状況に立ち至っていたのです。

● 考えてみれば、二〇世紀ほど烈しく激動し続けた時代はかつてありませんでした。二度にわたる世界戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして次々と続発する内戦や、世界的な規模で吹き荒れた革命の嵐とその崩壊などは、今まで見なかつたほどの大量の殺戮と破壊、貧困と飢餓とを生み出しましたが、同時に世界は、これもかつてなかつたほどの繁栄の世紀を迎えたのでした。次々と展開されて来た眼を見はるような技術革新に支えられた経済発展の成果でしたが、その大量生産大量消費の経済は、戦争という超特大級の消費や破壊とあいまって、地球規模での資源の減少と枯渇、そして自然環境の破壊をもたらし、地球の温暖化、大気汚染、オゾン層の破壊となつて、今や世界の抱える最大の課題となつてしまいました。その解決への努力は未だほんの緒についたばかりであり、本当の解決は二一世紀へと持ち越されることとなりました。

● この課題に対する日本の反応は緩慢なものでした。平和で幸福な日本は、経済成長と共に大量の消費を続け、とりわけ建築の世界では、烈しいスクラップ・アンド・ビルドの繰り返しによって、熱帯雨林に絶滅の危機を招くほどでありながら、切迫感の無い鈍感な対応が続きました。一九九二年、リオデジャネイロで開催された地球サミットには、世界から約一七〇か国が参加し、首脳クラスが参加した国は一〇〇を超えたと言われていますが、そこに日本の首相が国会開催中を理由に出席しなかつたことが、世界の矚目を買ったことは、まだ記憶に新しいところです。

● 建物は三〇年もたつたらもう建て替への検討を始める、というのが、日本では役所でさえ常識になっていました。建物に永遠性を求める、というような精神は全く無く、まるで耐久消費財のように考えられて来たのですから、建築にとつては真に不幸な時代でした。三〇年たつたら建て直す心算ですから、建物はほんざいに扱われ、メインテナンスに費用をかけず、建物は荒れるにまかされるのが通常でした。不況の時代に入って、ようやく手を入れ補修をして再生を図る機運が出てきたことは、財政難によるやむを得ない処置だったとしても、歓迎すべきことに違いありません。動機は不純でも、建物は永い生命を持つべきものだということが身につく機会にはなるからです。

● 住まいも全く同じで、日本の住宅の平均寿命は三〇年くらいだと聞いています。住まいは私たちの日常生活の場所ですから、基本的に保守的なものです。ですから今まで書いてきたような世界的な危機的状況への対応などには殆ど無関心であるかのよ

うに見えますし、今日本の住まいにとって一番身近で深刻な問題と思われる家族のあり方についても、戦後定型化した住宅の間取りのパターンが、そのまま繰り返されるばかりのように思われるのは何故なのでしょう。

もともと、住まいというものは人間の「生」の投影でありました。恐らくあらゆる種類の建物の中で、最も直接的に人間の「生」を表現してきたのは住まいでありました。最も言い切るのは多少問題があるかも知れませんが、少なくともその一つであったことは間違いないでしょう。その土地その土地にあって、自然と社会の持つ厳しい制約の中で、精一杯に生き抜いていこうとする人間の営みが、ぎりぎりの姿の住まいを生んで来た多くの実例を、私たちは今世界中に見ることが出来ます。

住まいのありようを規制するような厳しい制約を、戦後日本の社会は次々と消滅させて来たのでした。あるいは制約から解放されたと言わなければならないでしょう。

その解放された戦後日本の中で、最も過激に、その時代の「生」を表現した住まいは、建築家・菊竹清訓の手になるスカイハウスではなかったでしょうか。ここでは家族制度のみならず、通常の意味での家族さえ消去され、否定されてしまっているように見えます。実在するのは夫婦だけで、子供の部屋は必要に応じてアタッチメントとして取り付けられ、不要になれば撤去されるという住まいは、メタボリズムの思想のみで説明されるものでなく、夫婦を基本とする戦後の日本社会の思想、理念の鮮烈な表現でありました。作者の意図の如何にかかわらず、またそこでどのような家族生活が展開されたかにも関わりなく、空間はひたすら夫婦を謳歌し、家族は切り捨てられているのです。まさしくこれは一つの「生」の表現としての住まいでした。

他にも多くの建築家の手によって、際立った「生」の表現としての住まいが創られ、話題を呼び衝撃を与えて来ましたが、定型化した住まいの主流を変えることはできませんでした。住宅は産業となって日本を支配しつつあったのです。

## ●

戦後、地縁血縁の社会は崩れ、家族制度はなくなりました。職業に固有であった生活スタイルは薄くなつて、すべての職業者がサラリーマン化してきました。建物の資材や技術もどこでも同じようなものになり、次々と開発される材料や工法は、少しずつ時間をずらしながら、急速に日本中に伝わるようになりました。住まいは土地と人との制約から浮遊して、かつての厳しい制約に抗して生き抜いて来た人びとの根城としての住まいの緊張感は失われて来ました。日本中どこでも同じような住まいになり、同じ新聞を読み同じテレビの番組を見、平穏な生活を送るようになってきたのです。そしてその平穏な生活を支えて来た定型化した間取りの中で、今、烈しい親子の断絶が始まり、家族とは何かという深刻な問いが生まれて来ています。その背景に、地球の未来への絶望に近い危機感がある、と私は思えてなりません。

## ●

住まいは今、かつてとは全く異なった次元で人間の「生」に直面しています。人間が生きているとはどういうことなのか、という根本的な問いに答を求められています。二〇世紀はその問いを残したまま終わろうとしています。二一世紀に解決を委ね、そこに希望を見出そうとしているのです。

# 災害復興と住居デザイン

## 鈴木成文

### 1 住居現代史と体験記述

「戦後の住宅建築史」とは、とりもなおさず住居現代史である。現代を史的に眺めて記述するほど困難なことではない。

日本の住居史というと、これまでに建築史家による著作がいくつもあるが、おおむね第二次大戦前までの記述が主で、戦後はごく大雑把にしか触れられていない。しかし、現代の住居計画に対して最も関わりが深いのは、むしろこの住居現代史であり、これは正にわれわれが生きてきた時代を歴史的に位置づける作業となるのである。

この住居現代史の重要性に着目して、私たちの研究グループ（ハウジング・スタディ・グループ）は、住総研の研究助成を得てこれまでに二冊の研究報告書を世に問うた（『型』の崩壊と生成―体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論―一九九〇年、『現代型住居の解釈―続・体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論―一九九二年）。これはいずれも、私たち自身あるいはその周辺の人たちの住居体験記述を資料としており、更に学生たちにも呼びかけたところ、既に数百の家の親密な記述が集まった。これは都市と地方、戸建てと集合、伝統と現代にわたり、地域的な分布もあって、貴重な資料群となっている。

一方、住居のつくり手側、計画者・設計者に対するヒアリングも重要な資

料となる。住居の時代的変遷は、社会経済状況の変化や時代の思潮の変遷によってもたらされるものではあるが、一方、その当時のつくり手の意志が大きく関与する。とくに公共集合住宅は必ず計画者・設計者の手によって実現されるものであるから、その当事者の談話は住居現代史にとってはなほ重要である。拙著『日本現代住居の発展変容過程と計画行為の役割』（科研報告、一九九六年）はそのような手法によった研究である。

そして、私自身の研究生活も、正に戦後住居史と共に歩んで来た。これらの体験と研究を通して、私なりに住居現代史を概観しよう。

### 2 戦後の発進、高輪アパートにおけるデザイン

戦後の公共集合住宅の最初の発進は高輪アパートであり、このときの立役者は、戦災復興院（後の建設省）の第二代総裁・阿部美樹志である。彼は鉄道出身の構造技術者であり、かつてイリノイ大学大学院においてRC構造研究で学位を与えられたという実績をもつ。敗戦後二年といえは資材も技術も極度に乏しい時代であったが、焼け野原の東京において、将来の都市住居のあるべき姿を構想し、それは積層・不燃構造の集合住宅であるべきだとの信念から、その実現の手がかりを掴もうと奮闘した。RCでいかに木造に代りうるよう安く建てられるかを思索し、日本で初めてRC壁式構造を提案し、

自らスケッチを描いて提示したのである。

街に被災者があふれ、壕舎や仮小屋生活もまだ残存する状況の中にあつて、周囲の反対をも押し切つて彼はその実現に努力した。占領軍の支配下にあつた当時、セメントや鉄筋の調達には自らGHQ（総指令部）に向いて交渉し説得したという。上に立つ責任者が信念をもち理想に向かつて邁進する姿をここに見ることができるといふ。

しかし一方、このときの主題は、木造住宅に代わり得る低コストということに集中した。当時はRC造といえはラーメン構造と決まっていたが、これに対し鉄筋量をぎりぎりまで削つて総体としてもつ単純な箱型の壁式構造の形態は、正に新しい技術提案であり、その計算を担当した技術者自身をも不安がらせたという。

戦前の同潤会アパートは、木造に対し三・六倍程度のコストであつたと試算される。一般庶民のための住居と意図されながら、実はかなり高級なものとならざるを得ず、そのためには如何に共同住宅としてのメリットを付加するかにデザインの関心も及んで、共同食堂や娯楽室あるいは当時としては珍しかつた電話交換室などを備えたものもあつて、共同居住への志向は積極的であつた。そしてこれが配置計画や建物の意匠にも反映していたのである。

一方高輪アパートでは、安くとはいつても木造に比し二・五倍程度であつたが、技術的努力はコストの削減に集中し、共用部分の節減、一切の装備の排除、平面・立面の単純化に徹している。これの実現が以後の公営住宅の不燃化への端緒となつたと同時に、その建築形態についても路線を与えたといつてよい。

### 3 住様式の近代化、51C型におけるデザイン

戦後初期の住居デザインにおけるもう一つの特記すべきことは、公営住宅標準設計51C型による住生活近代化への発進であり、このときの立役者は吉武水水およびその研究室である。実は私自身が大学卒業はやほやで吉武研に

属し、この設計にも関与していたので、これを住居現代史上の意義ある事象としてとりあげることには長い間躊躇があつた。その後の大学における住居論の講義を通じて学生たちには説明しつつも、これを社会に公表することは意識して避けていた。しかし、高度成長期が終わつた一九八〇年頃からは、世間においても大量建設や標準化の功罪についての見直しが行なわれ始め、51C型の評価も客観化されるような気運が生じた。とくに歴史家・藤森照信氏が『昭和住宅物語』の中で、戦後の住宅計画として取り上げるべきものは二つあり、その一つは前川国男とMID同人のプレモス、もう一つは吉武研の51C型であると書いてこれを詳細に取り上げたのが一九八八年であつた。歴史家がそう評価してくれるならよからうと、ようやく私もこれを公に評価することに踏切つた次第である。

51C型も、今日の目から見れば明らかに功罪相半ばしている。「功」は言うまでもなく住様式近代化への強い始動である。戦前からの慣習を引きずつて畳の続き間を主体として構成されていた間取りを、生活の機能に即し用途を定めて部屋を配置するという方向にデザインしたことが特徴的であり、その裏付けには積み重ねられた生活実態調査があつた。私自身、吉武先生や先輩の大坪昭氏に連れられて、夏の酷暑の中、川崎や横浜の工業労働者住宅を一軒一軒廻つて歩いた現場密着型の研究の強烈な思い出がある。しかもこの生活現場から生まれた研究成果を、公営住宅標準設計という普遍的な一般解によつて社会に還元普及しようとしたところに、当時の奇妙な社会状況があつた。

一方、「罪」は住居計画の関心と主題を、余りにも強く住様式と日常生活への考慮に向けてしまったことであろう。寝ること、食べること、その間取り上の配置や家族の成長による変化といった生活機能そののみが住居計画の主題となり、社会的なより大きな問題、すなわち集まつて住むことへの配慮や、更には日本の住文化についての考察などが等閑視された。標準化による日本全国の画一化に対する非難もあるが、それは住居デザインの問題といふよりは当時の住宅供給システムの問題といつてよからう。たしかに画一化は

非難されるべきだが、全国津々浦々にまで生活の近代化を普及させたことへの評価も同時に与えられるべきであろう。

## 4 専業主婦の大群の発生と住居の閉鎖化

家庭における専業主婦の大群が日本で初めて発生したのが高度成長期であり、それが住居の閉鎖化を招いたというのが私の見解である。

一九五〇年代後半からの急激な人口の都市集中に伴い都会に集まって家を求めた人たちは、一九二〇年代から三〇年代に生まれた男女で、それは衛生・保健・医療が向上し日本の人口が飛躍的に増えた時期であった。次々と団地やニュータウンがつくられ、若いホワイトカラー層ばかりの社会が発生した。親元から離れ、伝統文化からも途絶して新生活を営んだ家庭は、昼間は若い主婦と幼い子どものみの世界である。ここに日本で初めて、核家族専業主婦の大群が発生し、家事と育児のみに専念して関心は専ら家庭内に向けられ、これが「モダンリビング」の担い手となった。日本住宅公団は正に彼らの要求に応え、ピカピカのステンレス流しのダイニングキッチンを備えた2DKを提供したのである。

こうして、現実社会からは隔離され内へのみ目をむけた住生活が展開し、閉鎖的な住居が蔓延した。高度成長期における住居の画一化・均質化・閉鎖化は、プレハブ・量産工法といった供給側からの事情に依るものであることは論を俟たないが、同時に住み手の側からもつくられたものであると見てよい。

## 5 社会・家族の変貌と目標像の変化

住居をめぐる環境が大きく変化したのは、一九七三年のオイルショック以降である。進歩・発展への信仰に水が差され、地球資源に限りがあること、文化の蓄積を尊重すべきことが自覚されて、住居計画においても大量建設による画一化への批判が高まり、地域性・社会性・伝統性・個性が見直された。

この空気を明確に把握してそれを事業化した立役者が、当時建設省から出し茨城県住宅課長であった荻原敬であり、またこれを建築デザインとして見事に表現した藤本昌也であった。水戸六番池住宅の建設は、正にこの時代の動向を先取りしたものであり、この意図されたデザイン行為が公営住宅建設の流れを大きく変えたのである。

この気運は社会全体の経済事情の変化によってもたらされたものではあるが、同時に公営住宅の制度的変化の影響も大きい。公営住宅には、日本の住居・住生活の軌範、街なみ形成の先導役としての役割と、低所得者層のための福祉的役割の両面があり、この間を常に往き来している。入居基準の所得制限が低く抑えられていた時期には専ら福祉的役割が強調され、この結果、建設単価も低く抑えられてデザイン的工夫も省みられなかった。七〇年代に至って入居基準の見直しが行なわれ、所得制限が国民の所得区分の下位四割までと引き上げられた結果、より広い層を対象とすることが可能となり、地方では「県民住宅」として位置づけられて、ようやく街づくりの核としてデザイン的にも発展する契機が得られたのである。

茨城において口火が切られた公営集合住宅の改革の流れはその後全国に拡がり、多くの建築家の参加を得て、それまでの旧態依然たるものであった公営住宅を新しいものにしていった。しかしこれらの中で、真に生活への正しい理解は意外に少なく、単に建築形態的なデザインに終わっているものも少なくないのである。住み手への配慮と新しい集合のあり方を求めたものとしては、葛西クリーンタウン内のリビングアクセス型高層住宅、多摩ニュータウン・ベルコリーヌ南大沢のうちの二、三の住区、大阪府宮吉田住宅、西宮名塩ニュータウン、シエラピア東山台、岡山県宮中庄団地第1期、熊本県宮龍蛇平団地等、いくつかの特徴的な事例を挙げることができる。

## 6 災害復興と住居デザイン

バブル期やその崩壊期といった浮沈はあったが、住宅計画にきわめて大き

な問題を突きつけたのが阪神・淡路大震災である。

住居の大量滅失は以前にもあったが、その都度計画の立役者が現われて住居の発展に貢献している。

関東大震災は死者・行方不明者一四万余という大災害であったが、そのあとには帝都復興計画が立てられて後藤新平がこれを推進した。また同潤会アパートが生まれてわが国の集合住宅の端緒となったが、これには内田祥三をはじめ多くの建築家・学者が協力している。

第二次大戦の戦火のあとには高輪アパートがつくられて、公共集合住宅団地の建設の端緒となったが、これを強力に推進したのは戦災復興院総裁の阿部美樹志であった。またこの公共住宅の住様式の近代化の面で新たな展開を行なったのが標準設計51C型であり、これを提案したのが吉武泰水とその研究室であった。

高度成長期の発端の時期には、この時すでに将来の都市構造のあり方を見通して晴海高層アパートを構想したのが、住宅公団初代総裁の加納久朗であり、これをデザインの面で実現したのが建築家前川国男であった。

オイルショックに見舞われ高度成長が終わりを遂げたとき、地域性・個性に立脚した公営住宅の新たな展開を推進したのが茨城県住宅課長の養原敬であり、これを藤本昌也が見事に形態化した。

私は何も個人の力のみを信じたり偉人の出現のみを待望するわけではないが、世の中の大きな流れの中にあつてこれを望ましい方向に動かしていくには、その現場に立つ人物の意識的な努力と卓越した判断が必要である。それが計画とかデザインといわれるものであろう。

さて、阪神大震災のあとには、住居計画・住居デザインとして何が生まれるか。それがいま正に問われている。自治体の復興計画には緊急の建設戸数のみが記載されている。仮設住宅は二年間という期限付きであるが、震災後すでに三年余を経た一九九八年四月の時点でもなお二万世帯も居住している現実を前にしては、その解消に当局が躍起になり、緊急大量建設のみを命題としている心情もうなずける。しかしそのために、立地も建築形態も無視して

やみくもに建設を急ぐことには首肯しかねるし、また全ての公共住宅に統一の規格型をつくり、個別の設計上の創意工夫を一切排除して建設に邁進することにも大きな不安を覚える。しかもその建設する型がきわめて閉鎖的で、これからの豊かな居住文化を受け持つものとは到底考えられないのである。

このような中で、僅かではあるが積極的な事例が見られるのは救いである。神戸製鋼跡地などを利用した神戸東部新都心住宅地の日の出町地区では、住都公園を核として総合的な街づくりが計画され、遠藤剛生らを中心にデザインされた住環境は実現待たれる。またその中には開放的なリビングアクセス型の住居も実現されて、公共住宅の新しい型として発展が期待される。神戸市営の復興住宅の一つには、協同生活を積極的に取り入れたコレクティブハウジングが、石東直子らの熱心な運動によって実現され、さらに県営住宅にも同種のものが数例実施されて、新しい集合居住方式として成長することが期待される。芦屋市営住宅では、被災した密集住宅地の再建にあたって、地区内の一般民家の修復や建て替えと協調した建設が試みられ、江川直樹がこれに添えてデザインしている。公営住宅の新しいあり方を示唆するものであろう。

震災復興は単に緊急大量建設や防災安全のみが課題なのではあるまい。この未曾有の災害から一体何を学んだのか。それは人びとの助けあいや地区のコミュニティの一体性がいかに大切か、そしてこれはいざという時のみでなく日常から育てていくべきものであることが、痛切に実感されたはずである。そのためには、現代の住居を覆う閉鎖性とプライバシー指向から脱して、近隣に開いた開放的な住居を実現することが切に望まれる。さらにその街の歴史と文化を尊重して後世に残るよき街なみをつくることこそ、復興街づくりといえるものであろう。その動きは、今日、まだ断片的ではあるが、萌芽は各所に見られる。これを大きく育てることが大切であり、それには意識的なデザイン行為が何よりも重要な働きをするのである。

(すずき・しげふみ/神戸芸術工科大学学長、建築計画学)

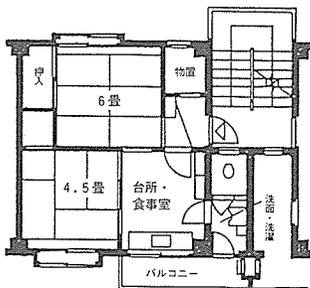
# 戦後住宅建築史のなかの住まい

② 集合住宅

## 公営住宅標準設計51C型 1951

設計＝東京大学吉武研究室

建設省の1951年度公営住宅標準設計として選定され、各地の公営住宅に普及することになった。食寝分離を明確にしたプランで、食事のできる台所、2寝室の確保が図られた。住宅公団がこのスタイルをダイニングキッチンと名付け、以降、nLDKの時代へと移るのである。このプランによって、住生活の近代化が始まったといっても過言ではない。



平面図

## 都営高輪アパート

1947～1948 — 東京都港区

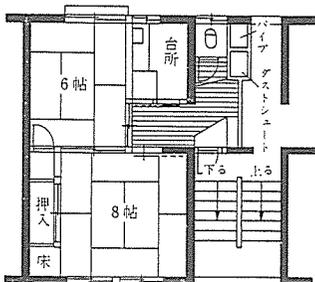
設計＝戦災復興院

写真・図版／『公営住宅二十年史』日本住宅協会刊より

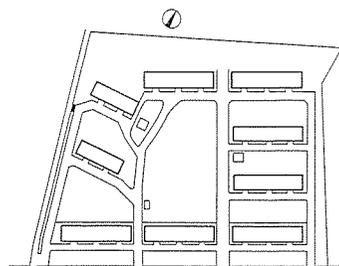


竣工当時の外観。

戦後初めてのRC造公営アパート。窮乏期であり、12坪以下という住宅規模制限いっぱいの極めて小規模な住戸であったが、将来2戸を1戸に改造できるようにという配慮をもって建設されたのである。



住戸平面図



配置図

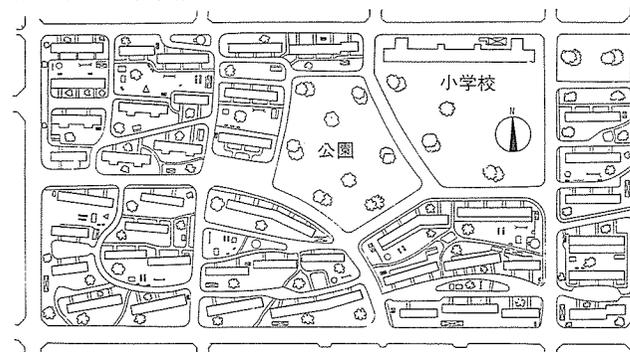


南側より見る住棟配置。現在建て替えが始まっている。

## 大阪市営古市中住宅

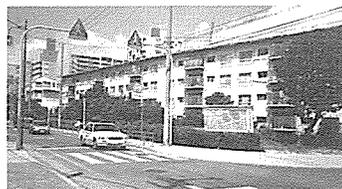
1953～1954 — 大阪市城東区

設計＝久米建築事務所



配置図

南面平行配置を基本としながらも、よく練られたループ状の街路で数棟ずつのまとまりと開かれた領域をつくり、北入りと南入りを組み合わせるなど変化に富んだ住環境を生み、この後の団地計画のモデルとなった。



団地南側の道路より見る。



成熟した団地生活を感じさせる住戸。

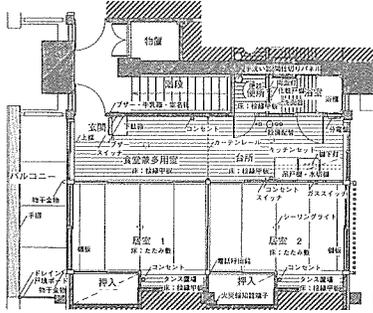
この項で取り上げた事例は、本号の執筆者の方々にお聞きした「戦後住宅建築史の中で心に残っている作品」を中心に、編集部で構成したものです。

将来の住戸規模の拡大を見越し、それへの対応を備えた。当然、スケルトン・インフィルの概念も既に十分練られていたのである。

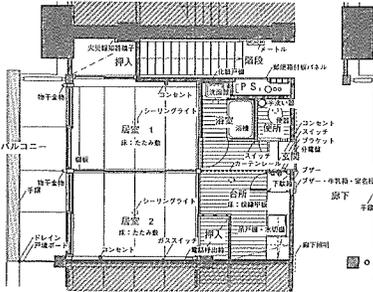
## 公団晴海高層アパート

1958—東京都中央区

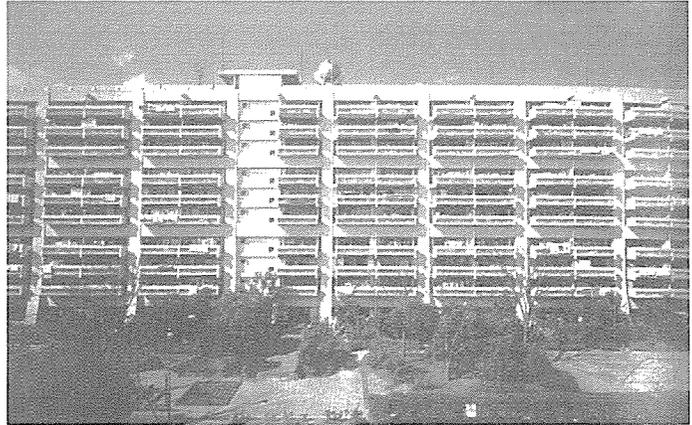
設計=前川國男建築設計事務所 写真/新建築社写真部(新建築1959年2月号)



廊下のない階の住戸



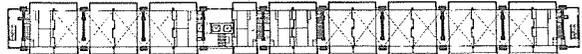
廊下階の住戸 1/200 (住宅建築1998年3月号より)



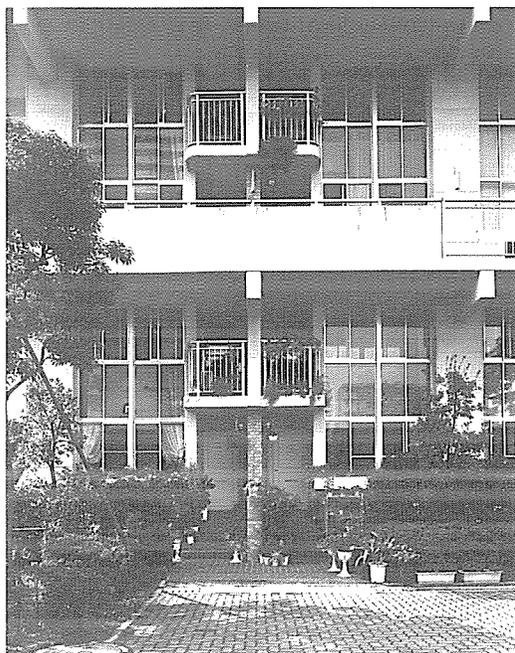
南側外観。3層ごとのスーパーラメン構造でつくり、隔壁やスラブ抜きができるよう計画された。



3、6、9階



4、7、10階



居間の2層分の窓が、これまでの団地とは異なる玄関を生んでいる。リビングアクセス型のメゾネットの採用で、高層住棟の廊下に生活感の表出される路地的空間を実現した。



上層階のアクセス廊下の様子。

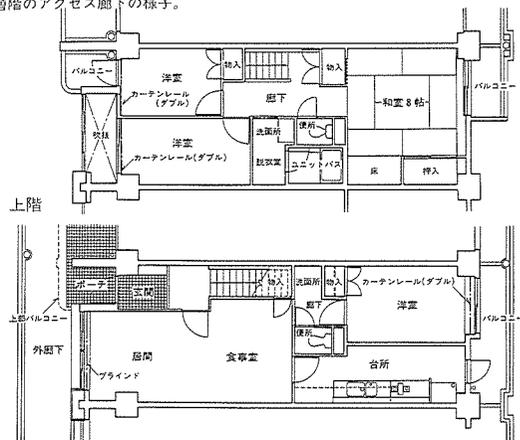
## 葛西クリーンタウン 清新北ハイツ9号棟

1983—東京都江戸川区

設計=住宅・都市整備公団、他

写真/栗原宏光

(建築設計資料15「中・高層集合住宅」)

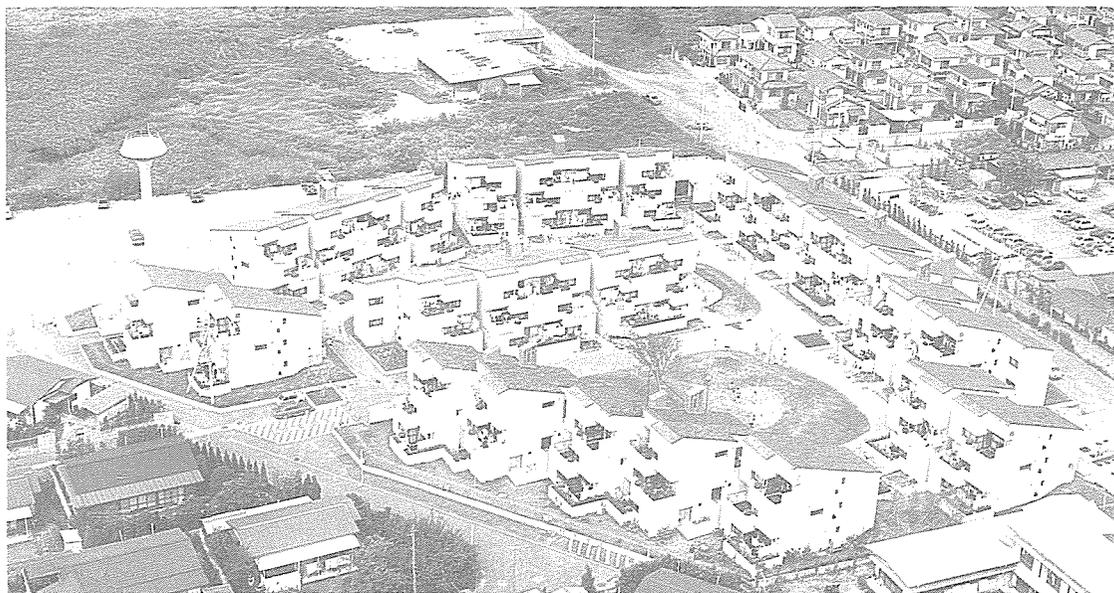


メゾネットの住戸 下階 1/250

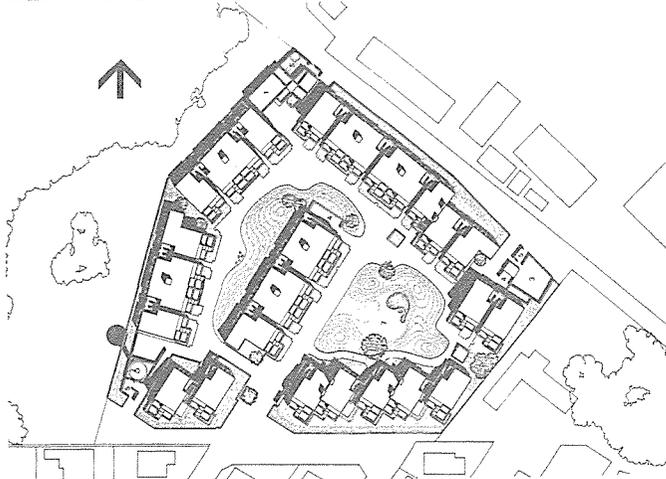
# 茨城県営水戸六番池団地

1976 — 茨城県水戸市

設計 = 現代計画研究所 (都市住宅1978年1月号)

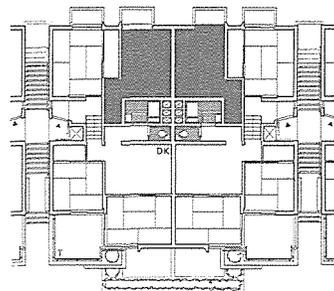


上空より見る団地全景。セットバックしたテラス、囲み庭型の配置など、準接地型集合住宅の先がけとなった。

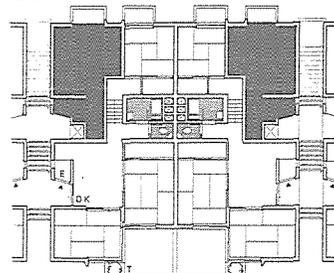


配置図 1/1000

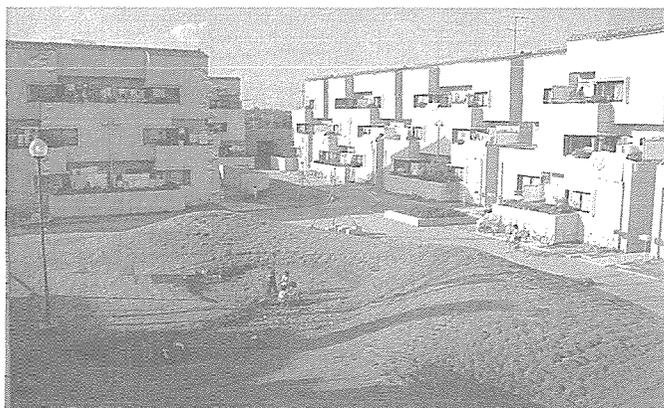
〈大地との連続性の回復〉を基本理念として、周辺環境との調和のとれた街並み、地方性豊かな住環境、土着化したコミュニティ空間の創造という課題に応え、低層・準接地型という新しい集合形式を生み出した。車の入ってこない中庭、セットバックテラス、スキップフロア、瓦の勾配屋根、路地状屋外階段など、この後に続く集合住宅に与えた影響は大きい。



2階



住戸1階 1/400



囲み庭より見る住棟(写真/鈴木 悠)。

## 代官山集合住居計画 (代官山ヒルサイドテラス)

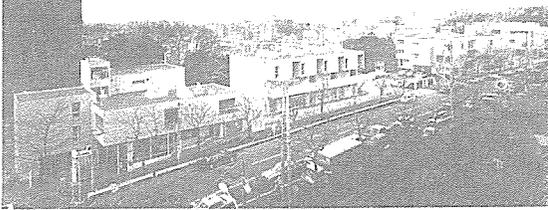
1969~1992 — 東京都渋谷区

設計= 槇総合計画事務所

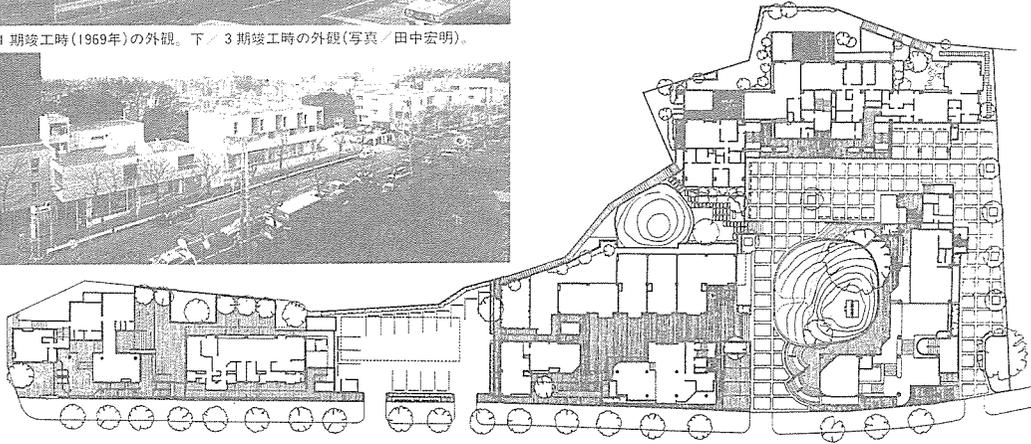
(都市住宅1978年4月号)



上 / 1期竣工時(1969年)の外観。下 / 3期竣工時の外観(写真/田中宏明)。



第1期が竣工し、小規模ながらもその街並みをつくる姿が新鮮な感動を与えて以来、土地柄、商業的性格を増しながらも敷地を延ばして増築が続けられ、第6期まで「風景の構想化」は続いた。



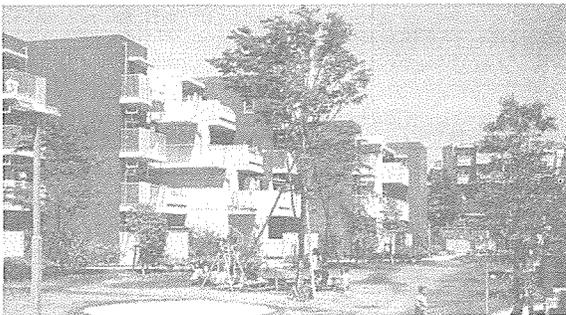
1期~3期配置図 1/1400

## 熊本県営竜蛇平団地

1991~1993 — 熊本市帯山

設計= スタジオ建築計画

写真/古館克明(建築設計資料65「公共住宅建て替え」)

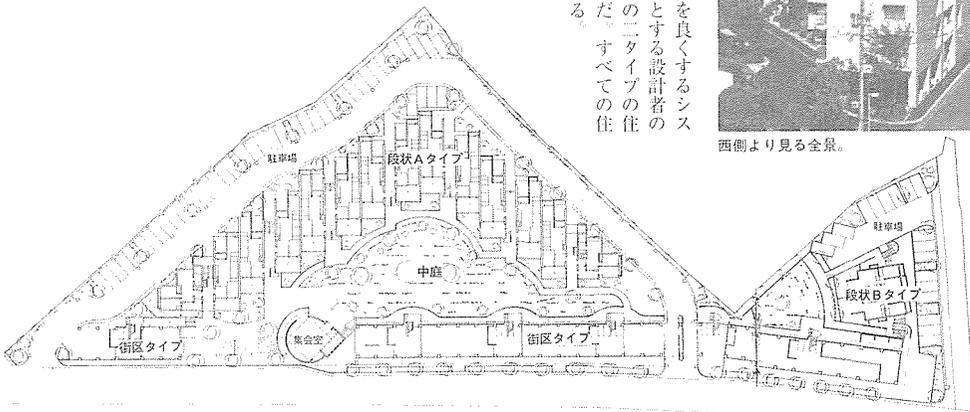


街区タイプ(右)と段状タイプ(左)に囲まれた中庭。

住宅建築は、その中に街を良くするシステムを持つべきだとする設計者の考えが、街路型と階段状の二タイプの住棟が中庭を囲む形を生んだ。すべての住戸が中庭からアクセスする。



西側より見る全景。



配置図 1/1600

# 設計図書の実情について

田中 文男

## (1) はじめに

敗戦で国土が荒廃していた昭和二十一年に大工を志してから、木造建築とかかわり合って半世紀が過ぎた。その間に、業務の内容と設計図書に対する私の立場も変化した。当初は施工の立場で関与した設計図書も、今では作成する毎日が続いている。その中で、現在の設計図書は、内容に余分な情報が多すぎないかと、疑問を持つようになった。

ここでは設計図書の現状を百年前と比較し、二一世紀が必要とする設計図書の本質を考えたい。

## (2) 現在の設計図書

現在木造建築は、建築主が自分の希望を述べて建築家に設計を依頼する。建築家は、建築主の要望が社会的な規制に整合する設計図書を作成し、予算を算出する。つぎに施工者が選ばれ、建築工事が進行する。工事中は、建築家が建築主の代理として工事を監理するのが一般的なケースである。

設計図書は、設計図・仕様書・数量内訳書・設計予算書に大別できる。設計図は、建物の規模と形態を規定し、仕様書は、建物の安全性と品質を定めている。残る数量内訳書と設計予算書は、ともに設計図や仕様書の規定にしたがい、建物所要の工事を算出している。

設計図は、間取りと規模を示す平面図と、建物の形態や外観を示す立面図が主となる。これに実際の施工に必要な各伏図と、床高・天井高・開口部などの寸法を示す断面矩計図、詳細図が付随する。

仕様書は、木造建築の施工条件と質を表わし、合わせて工事監理の指標と工事費算定の基本を示している。仕様書の内容は工事別に分かれ、各々の条件が明示される。例えば、木工事ならば部材名に続き、その使用材種・等級・寸法・数量に加え、

部材端部の継手・仕口の種類と、仕上げの程度を指示している。このような規定は、建築主が建物を自分の思うままに作る直営工事では必要ない。しかし工事が請負になると、その範囲や条件を示す必要が生じる。仕様書はこのような背景と条件のもので発生している。

数量内訳書と設計予算書は、表裏一体の関係にある。その作成は設計図と仕様書の内容を熟知し、深く理解した上で初めて可能になる。

周知のように、設計図は縮尺で立体的な空間を平面的に表現しているに過ぎない。仕様書も各部材の条件を示すが、それらの取り合いや組み上がった状態は明示できない。数量内訳書の作成は、各部材の完成した姿を想像しながら作業を進める点に難しさがある。

建築材料は、すべてが規格品として市場に流通しているわけではない。そのため部材によっては特別注文になる場合もある。設計予算書は、流通の市場原理を理解しないと、その作成は覚つかないといっても過言でない。

## (3) 百年前の設計図書

近世の佐倉藩主・堀田家は、明治二二年、旧領・佐倉の地に住居を建築した。工事は堀田家の工事掛が統轄し、設計管理は出入りの棟梁があたり、工事は部分請負で実施された。その折の設計図書が、百点余り厚生園文庫に残されており、当時の建築生産の実情をうかがうことができる。

そのうちの御長屋新築工事の設計図書は、当時の庶民住宅に近いと考えられるため、内容を紹介し検討したい。

その設計図書は、図面二枚と仕様書・積書の二冊で、これにもとづく各業者の見積書四通が付く。そのうちの図面は、現在の平面図と屋根伏図にあたるが、ともに記入の密度が高い。ま

ず平面図は間取りのみでなく、建具表や内装表の機能もあわせもっている。また、屋根伏図も屋根形状以外に矩計寸法も表示している。

仕様書の内容は、まず主部と庇の屋根形式・勾配・矩計寸法と面積を表示し、続いて基礎の材料と手法、木工事の部材ごとの材種・等級・寸法・数量と、仕上げの手法、継手・仕口などが明示されている。それ以外は屋根工事のみが示され、他の各工事の仕様は記入されていない。

この原因は、当時建物の質の程度に応じた各工事の仕様が定式となり普遍化していたため、記入する必要がなかったといえる。積書の内容は、棟梁が作成した数量内訳書で、これに基づいて業者から見積書が提出されている。つまり、この積書は建築家の責任数量を示し、各業者から同一条件で算出した工事金額が提示され、比較しやすい。

当時の建築材料の大部分は、一次産品を現場に搬入し、鳶・大工・左官などの出職が加工し完成させていた。なお、部材の中には工房などで部品化され、現場に搬入して取り付けられるものもある。これらは瓦・柿板・建具・畳などが主で、居職が関与している。

このような流通や生産方式の違いは、数量内訳書・設計予算書に影響し、その取り扱いが異なる。出職の関与する工事の数量は、建物の質に応じて定数化しており、それに面積を乗じて算出している。また建具などの部品化された部材は、単価が定められ、それに数量を乗じて算出している。

以上の設計図書の内容を施工者の立場で見ると、これだけで施工は充分可能である。この設計図書と施工技术の間には、これをつなぐ技術体系が存在していた。しかし現在、この技術体系は失われてしまったと言っても大過ないであろう。

#### (4) 二一世紀の設計図書

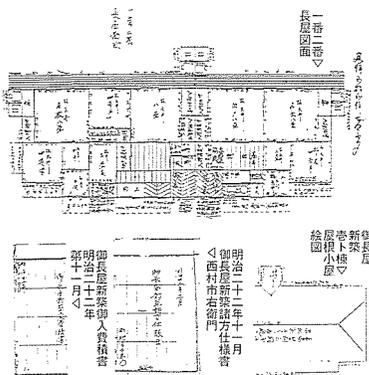
先に述べた技術体系は、目に見える形では存在しない。なぜなら、その内容は建築に関与する人が、素養として身に付けていなければならぬためである。その内容は術語を基本に、木割・規矩などの計画学の技術と、材料・技法など実技の分野に及び、対象とする範囲が広い。

このような技術体系が成立した背景に、建築現場の円滑な運営と、生産性向上のための合理化が底流にあったのは想像に難くない。現在の設計図書が百年前のそれに比べて無駄が多いのは、この技術体系をなおざりにして消失させたためといつても過言でない。

筆者からの「二〇世紀から二一世紀へ贈る言葉」は、「安く長持ちし、安心して住める」住宅をつくるため、失われた設計図書と施工技术をつなぐ技術体系を、新しい視点で再構築する、の一語に尽きる。

これなくしては、二一世紀に建築家も施工者も含め、木造建築界の存在は必要ないと断言されても反論できない。

(たなか・ふみお/南真木代表取締役、大工)



佐倉藩主・堀田家 御長屋設計図面

# 自由な建築家、人間でありたい

## 津端 修一

一九四四年は、パリ解放の年である。その年、私は海軍の厚木基地にいた。私たちの工廠でつくる雷電、月光といった戦闘機は、基地から毎日のようにB29の迎撃へと舞い上がっていた。基地のまわりの八王子、横浜、東京のどこかが爆撃を受けて、その方向に真赤な夜空を毎日のように見ている。たまたま東京に帰ると、電信柱が立ったまままだ燃えていて、一面の焼野原だった。

一九四五年、四七都道府県の四百以上の市町村が焦土となり、罹災者は一千万人、二一〇万戸の住宅を焼きつくして日本の戦いは終わった。パリと同じように戦場からは解放されたが、湧き立つ喜びは憶えていない。私の戦後は、そこから始まった。私が自由に憧れていると気付くのは、この頃である。私は飛行機づくりの夢が挫折すると、東京大学建築学科に再入学した。「卒業したら、自由な個人の建築家として生きてみたい」と、心に決めた。

時代は、戦後の新組織の再構築に向けて、あらゆる面に怒濤のように進みはじめていたが、私は組織には関心がなかった。七三歳で亡くなったフェデリコ・フェリーニは、私の好きな映画作家の一人だが、彼は公正さと人権が守られる社会を尊重しても、人びとがデモ行進や声明などの行動をはじめ、「同志的結合に引き込まれるきざしが少しでも現れると、私は自由地帯に逃亡してしまう」ともいった。私は、彼に〈同時代人〉としての共感を持ちつづけてきた。

戦争が終わってみれば、住宅不足は四二〇万戸に達し、家のない人たちの上にも平等に厳しい冬がやってきた。ともかく、何とかしなければならぬ。そのために、三〇万戸の越冬住宅が用意された。六・二五坪に六帖、三帖、土間、トイレ付き。必要最低限のバラック住宅からのスタートだった。そして、一〇年がたち、住宅公団が創設された。朝鮮特需（一九五五年）で、戦後は変わりはじめていた。公団は期待された。

江戸長屋のような越冬住宅で時間をかせぎ、何とか燃えない不燃耐火共同住宅の試作を続けて、ようやく戦後住宅の新しい社会システムを目指す公団の誕生に辿りついた。新しいライフスタイルと環境創造をめざす公団の〈2DK・団地〉は、〃もはや戦後ではない〃（一九五六年・経済白書）と考える市民たちの圧倒的支持を得てスタートした。

私は当時、アントニン・レーモンドのアトリエで建築家修業をしていた。私は幸運にも、彼の仕事が最高に油の乗り切った一九五一年から、レーモンド・スクールで働いていた。たった三年間だったが、彼を慕って集まった多くの俊才たちと一緒に、彼の口癖だった〃シンプル・イズ・ベスト〃の哲学を身体に深く刻みこまれた。私が、住まいへのこだわりを持つことになったのは、この時代である。

私は、レーモンドと出会って手にした〈住まいへのこだわり〉を戦後の住宅難の中で、社会システムとして市民たちの共有の財産にしたかった。それには、彼のアトリエを出て住宅公団の創設に参加するしかない。思ったつと、もう止まらない。公団は、前例のない新しいライフスタイルと住宅システムの創造を担うとして、組織は柄にもなく戸惑いとはじらいをみせた。そして、手に余ると感じたのだろう、民間に有能な人材を広く募集した。私は公団の創設に参加した。公団はそのころ、九段下のお堀に沿った旧陸軍憲兵隊本部の建物を間借りして開業していた。

設計課の私の部屋は、鉄格子の嵌った窓のある半地下室にあった。天井は低く、そのうえパイプ類が露出していて、風通しも悪かったから、夏の暑さはこたえた。冷暖房完備の現代オフィス暮らしに慣れた若者たちには想像できないだろう。私たちは、背広を脱ぎ、Tシャツとショートパンツに着換えて、これ以上脱ぎようがないという軽装になった。それでも噴き出す汗をぬぐいながら製図板に向かった。そんな職場の風俗も許される自

由な時代だった。

私たちがそこで書き下した団地・2DKは、東京の戦後の焼跡を次々に埋めて実現した。市民たちは待ちかねて団地に入居し、2DKのモダンリビングを楽しんでくれた。団地ができて四〇年。難しい建築や都市の理論を抜きにして、市民たちは団地の生活を幼少期に過ごした大切な場所としてそれぞれに記憶していると懐かしんだ。公団創設期の評価は、ごく自然に大人になって、私にはとても嬉しかった。

一九六〇年、高蔵寺ニュータウン計画が決定された。所得倍増計画にはじまる日本のめざましい経済開発がスタートした年である。団地からニュータウンへ、住宅公団が都市住宅公団への変身をかけたシンボルプロジェクトだった。この計画の誕生には、日本一の区画整理事業を仕上げてきた優れた先輩たちの深い読みに基づく決断があった。私は、この先輩たちと物言わぬ地域から、「高蔵寺計画は君に任せよう。自由に描きたまえ」といわれた。それは身に過ぎた希有の幸運だったし、それに応えられるだろうかと身がふるえた。

だから私は、高蔵寺計画にあまりに熱くなりすぎていたように「君のようにはあまり生きることには熱くなるな。風が吹いているように生きられないか」と、誰かが囁いた。その度に、「私にはヨットがあるんだ」と身も心も立て直した。生死を分けた遭難六回のメルエスプリの世界を同時代に共有していなかったら、あの疾風怒涛のような時代への挑戦はできなかったろう。いま、世間は変化し、風が吹いているように生きる、何となく空虚な時代が来ているという。もう一度、「生きることには熱くなる」時代の緊張感を取り戻してほしいものだ。

私は、高蔵寺計画を担当して一〇年、都市計画学会賞を受賞した頃から、東京に帰ってこいと度々説得された。しかし、帰る気はなかった。私は、高蔵寺計画を含めて、はるかに広域の

地域問題に関心を拡散させていたからである。私は、高蔵寺ニュータウン全体に奇抜な建物を独りよがり建てただけしか興味のない、いわゆる建築家でなくてよかったと思う。

ルフェーブルが言うように、「イデオロギーとしての都市計画は、社会のあらゆる問題を空間の問題として定式化し、歴史や意識から人はすべてのものを空間的におきかえる」、その通りと感じ始めていた。その一方で、「人間の精神ではほとんどつかむことのできない広い海」と、ツバイクが嘆息した南太平洋に憧れていた私でもあった。だから、私の行動と思考は既成の枠におさまらずに拡散した。

私は、高蔵寺ニュータウンから名古屋丘陵、伊勢湾問題へ、更に矢作川流域問題を二〇年以上も手掛けながら、社会のあらゆる問題を「空間の問題」として定式化していけることに目覚めていく。ルフェーブルのいう「イデオロギーとしての都市計画」の世界は、人びとの目の届かない広域的スペースを視覚的に凝縮してみせて、環境問題によりやく熱くなりはじめた市民たちに、新聞連載を通じて独特の表現で問題提起しつづけた。

一九七六年、私は広島大学に着任した。大学移転問題を特命で担当していた私は、以後一〇年間の大学教授生活で、着任・退任の挨拶だけ、たった二回しか教授会に出席しなかった。八七年には、二つ目の大学教授を定年をまたずにやめて、フリーの宣告をした。自由時間新時代の明日を予感した私は、クラインガルテン、ラングドック・ルシヨン、そしてアグリツーリズムの目もくらむようなヨーロッパ新世界に往来した。

そして五〇年。住まいへのこだわりを徹底して、自分でつくったニュータウンに住み、レーモンドの住宅を建て、一二〇種の野菜・果物をつくる究極の現代田舎暮らしに辿り着く。「群するも党せず」という。自由な建築家、自由な人間として、しなやかに暮らしたいものだ。(つばた・しゅういち／自由時間評論家、前広島大学教授)

# 日本を壊さないで下さい

中村 昌生

三内丸山遺跡を訪れ復元された竪穴住居の中に佇んで感動したことは、ここでよく三千年も大地に身をゆだねる生活を営み続けたものだ、ということであった。私たち二千年の歴史と比べて想像を絶するものがある。竪穴から高床式へ、ゆか座の生活に移行し、やがてゆかに畳を敷き詰めて「座敷」の文化をつくり上げたのは、一五世紀のことであった。座敷の文化には、今日、ゆか座式を共有する民族から熱い関心と憧憬が寄せられている。明治になって洋風とともに次第に椅子式が導入され、生活にも和洋が混在するようになった。そして近代以降工業技術の目ざましい発展を背景に、住生活にも近代化の波が押し寄せてきた。このように急速な進歩のなかで近代文明の恩恵に浴している私たちであるが、縄文人は、私たちには経験することのできない生活の喜びや充実感を味わっていたのに違いない。恐らくそれは人と大自然の間にゆきかうものなから生じたのであろう。

そうした純粹な喜びが進歩によって奪われるとは考えられない。しかし、近代の工業化社会が人と自然との関係をゆがめるに至ったことは確かである。西歐文明への傾斜は、日本人の自然に対する伝統的な姿勢に変化を迫り、自然と対立する関係に導いた。そして科学技術、工学への信頼、信仰を高め、自然軽視の風潮を招いた。人びとは機械化、省力化を喜び、手づくりの道を狭めた。今や工業技術はあらゆる事物の要求を可能にする勢いである。住宅もまたそうした工業技術の恩恵を受けながら、内容の充実を目指してきた。

第二次大戦後、日本の住宅がひたすら追い求めてきたものは、経済性と合理性、快適性と目新しさであった。それらは日進月歩の工業技術の応用次第で容易なことであった。多彩な住宅の競演が不思議な聚落の景観を生んだ。また農村住宅も立派な瓦葺きの民家に建て変わり、地方色も消え農村風景を一変させた。

和洋の折衷化は、すでに戦前に広範な階層の生活にひろがっていたが、戦後その傾向はさらに進行した。そればかりか、「和」そのものの秩序にも動揺を生じてきた。形式からの解放、自由を求める風潮は、家庭にも学校にも世上全体にひろがった。箸のあげおろしまで注意する家庭の躰は吹き飛んでしまった。箸さえまともに持てない子が増えた。

住まいのあり方も、それまでの考え方を変えることがまず前提となり、接客の方式も改まった。床の間は封建性の象徴として排除する主張もあった。またすわることを嫌って畳の部屋が減少する傾向を辿った。畳の生活を嫌う理由には、伝統的な礼儀作法からの逃避もあった。こうして椅子やベッドが日本人の生活に深く取り入れられるようになった。明治初期の邸宅における洋館と和館のような区別はなくなって、ゆか座式でありながら、畳も椅子も共存する住まいが、今や普通になっている。それは和風でも洋風でもない。

一六世紀、茶の湯を催す町衆の生活を見た外人宣教師は、清潔で礼儀正しい暮らしぶりを賞賛していた。もてなしの文化とも言える茶の湯に、日本人としての生活の規範が示され、日本人の美德が表れていたのである。もちろん公家や武家の社会にも整然たる礼法が行なわれ、日本には見事な座礼が確立していたのである。

しかし現代の住居の中では、かつての生活の規範は完全に崩壊して、和と外来の要素が無秩序に混在しているに過ぎない。平成三年に和風迎賓館を京都御苑に設けることが、京都府知事から提言され、先年建設が確定した。明治の赤坂迎賓館に対し、京都に和風で国公賓を接遇する施設を設けることは、国際社会に日本のアイデンティティを示さねばならないという自覚のあらわれとして、大いに歓迎すべきことである。賓客を京都に誘っても、国の施設がなく料亭へ招かざるを得ないというよ

うなことは恥ずべき状態であったと思う。外国の賓客も、日本的なもてなしを受けてこそ、初めて日本の実像に接し、日本の伝統や文化の理解を深めることができる。和風迎賓館は、日本人が素顔で国公賓を接遇する施設なのである。

ところで今日「和風」という時、その理解は極めて多彩であることは十分予測できた。まず東京と京都では和風のイメージにかなりの隔たりのあることは日頃感じとっていた。新迎賓館の計画検討には当然のことながら、和風の施設のあり方は、和風の接遇法とは、という課題に直面せざるを得ない。

しかし現代は、和風の伝統ははげしく動揺し、日本人は生活の規範を失っている。建築では伝統の近代化の試みも展開された。しかしそれはまだ途上の成果の域を出ない。「現代の和風」を基調とするという新迎賓館の実現を通して、混乱しつつある現代生活に、和風の規範を示してもらいたいものと期待している。そういう視点から、これまで検討の過程で述べられた意見に耳を傾けると、失望する内容があった。伝統に対する理解の仕方、深淺には愕然とするものもあった。新迎賓館から和風の規範が生まれるか生まれまいか、いずれにしても来世紀のことである。

二一世紀には、日本人の暮らしは、生活様式に新しい秩序、規範をつくりだし、国際社会の範となりうる日本人の美德を甦らせて欲しいと希う。そこから自ずと住まいの構造や形も現れてくる。住まいの創造にもっとも基本とすべきは、ソフトにしるハードにしる、工学よりもまず経験の科学であると思う。

日本人は常に異文化に触れ、その導入を図りながら特色を築き上げてきた。決して固有の、独自による日本的なものの創造はなかったのである。とかく純粹視される茶の湯の世界でさえ、初期の先達は「和漢のさかいをまぎらかすこと」こそ極意

であると説いていた。現代和風の規範も、この観点に立つべきで、徒らな純化を企てるべきではない。新しい生活の秩序が確立されることによって、住居や聚落、町並みも植民地的な状態から脱することができ、人心の荒廃も救われ、諸々の社会問題の正常化にも繋がってゆく。また伝統的な和風には、デザインにもそれなりの規矩があった。座敷はすわった目の高さを基準に寸法を決めてきた。ゆか座式で畳と椅子を併用する生活空間には、それは当てはまらない。この点でも新しい規矩の創出が望まれる。とにかく便利で快適であることが住まいの理想であってはならない。ひたすらそれを追及する過程で欠落させたものを充たすことが急務である。

座礼による生活の規範は、茶の湯によって支えられてきた。今も座敷に限って言えばそうである。しかし現実の生活の場は座敷だけではない。和洋混沌の現実の生活には、茶の湯はもはや規範としての働きを失っている。混乱に陥る以前の座礼の文化を後世に継承する上で茶道は貴重な古典である。そうした茶道とは別に、現実の生活のなかで、暮らしの秩序や礼儀を学びながらのびやかに楽しめる茶の湯の世界がひらかれることを期待している。それによって茶の湯の文化は、さらに国際化されるに違いない。

「木と土と紙の家」は古い日本の家のイメージとなりつつある。作家にとって新しい素材を使うことが創作性を高める手段ともなっている。新素材は実験結果に頼るほかに、経年変化の検証を待つことは許されない。その点、木・土・紙は、何れも呼吸している材料で、長い経年変化の実証による物質的性能が広く認知されていると共に、経験の科学が、これらの材が人体から心にまで及ぼす効能を物語っている。二一世紀には、木と土と紙を新しい素材として活用の道をひらいて欲しい。

# 住まいの世紀がくる

## 林 雅子

この特集号の執筆者の顔触れを拝見すると、私の役割は、実務として、プライベートな独立住宅——言い換えれば、公共でもなく、共同住宅でもない住宅——を設計してきたという点にありそうである。一九五一年に処女作を発表して以来今日まで、半世紀近く続けてきたこの仕事を振り返り、何を問題としてきたか、何をやり残してきたか、記してみることにする。

### ●家族の時代の住宅の姿

はじめに、一九六九年に上梓した拙著『現代日本の住宅』（彰国社刊）に採り上げた住宅のリストからご覧頂く。巻頭に筆者は次のように記している。「個々の住宅は小さいけれども、そこにはその時代、その社会の問題が余すところなく持ち込まれる。住宅が個人と家族の生活の場として、その形態と意識を反映することはもちろんであるが、日々に変化を遂げる環境との関係もそれらに劣らず重要であり、さらに、住宅そのものと、内容・装置に対する産業面からの影響も大きい。住宅を設計することは、これらの条件をふまえた上で総合判断を下し、具体的なものとして一つの解釈を提示することである」「ここにあるのは、私たちの時代の建築家たちが、個々の住宅を対象として、今日の全的な状況と取り組んで残した記録であるといえると思う」

その上で具体の選定基準として、①作品としての完成度の高いもの、②その後の住宅設計に影響力を及ぼしたもの、とした。このことは言いかえると、実験的な作品で、歴史的にみて価値の高いものであっても、収録しなかったことを意味している。採り上げた住宅のリストは次のとおりである。

コートのある家『ラムダハウス』、生田勉『ぼっこ山荘』、あしのまろや、池辺陽『石津邸』、『連続する家No.68』、内田祥哉『自邸』、菊竹清訓『スカイハウス』、楠見昭三『深沢の家』、篠原一男『からかさの家』、『土間の家』、清家清『自邸』、『沢田画伯の家』、『宮城教授の家』、高瀬隼彦『目白の家』、谷口吉郎『画架の森』、丹下健三『自邸』、『西沢文隆』、『正面のない家N氏邸』、『同H氏邸』、『西原清之』、『宮川弘子』、『ミニマム・ハウス』、林雅子『混構造の家』、『傾斜地に建つ家』、『高原の夏の家』、『末広りの家』、『広瀬鎌二』、『自邸SH-1』、『藤木忠善』、『すまい』、『保坂陽一郎』、『自邸』、『増沢洵』、『コアのあるH氏邸』、『ケーススタディハウス』、村口昌之『佐竹さんの家』、『吉阪隆正』、『自邸』、『ウィラ・クークー』、『吉村順三』、『前川国男』、『坂倉準三』、『国際文化会館内に建つ住宅』、『吉村順三』、『森の中の家』、『Tさんの別荘』、『A・レーモンド』、『自邸』、『カニンガム邸』、『連合設計社市谷建築事務所』、『杏掛の家』、『老夫妻の家』。

それから六年後の一九七五年、雑誌『室内』（工作社）が「戦後小住宅ベスト10」というアンケートを行なっている。アンケートの結果は一位の清家清から、吉阪隆正、篠原一男、吉村順三、増沢洵、東孝光、菊竹清訓、池辺陽、丹下健三ときて、一〇位が西沢文隆と林雅子、となっている。

このアンケートの対象は、二五〇人の建築家、建築評論家、インテリア・デザイナー、建築写真家などで、回答率は三八パーセントだったという。その結果が『現代日本の住宅』に掲載のものとはほぼ一致しているのを見ると、この時代の住宅への建築界の代表的な解釈を知ることができそうである。

### ●家族の解体？ そして住まいの時代へ

東孝光『塔状住居』、RIA総合建築研究所『光庭のある家』、『バス

一九七五年と言えば、廃墟から立ち上がって、高度成長の頂

点に差しかかった時点であり、戦前の農業社会から工業化社会へ向かってひた走って、ゴールの見えた時点でもあった。上記の住宅群からは、その時点に共通の、都市の家族像を読み取ることができるといえる。

戦前とこの時期、そして近年の三者を比較すると、四半世紀ごとに様相を異にしてきた住宅像が浮かび上がってくる。

戦前の農山村の住居では、家ごとに生活は自己完結的、閉鎖的であったが、空間としては周囲に向かって開かれた姿をもっていた。環境が自然の豊かさに包まれ、プライバシーを気にするよそ者もいなかった。工業化の進展に伴って都市に出て行った若者は、狭小な空間に身を横たえながらも、正月や老後には帰る場所の保証があったわけである。

若者たちを都市に定着させるために、やがてNDKタイプの集合住宅が供給される。それは台所の流しから玄関扉の裏側の牛乳箱まで、痒いところに手が届いて、からだ一つで移つても翌日からは働けるといふ、大家の深情けの住居だったが、住まいへの関心、住むことの悦びというものを徹底的に排除する住居であった。また、それは集合住宅とは名ばかりで、集合のメリットとは無縁のものでもあった。

その後の四半世紀で、住居はどう変わったか。民間の供給が増えて、見掛けは多様性が増したかに見えるが、深情けふりは引き継がれて、住まいへの関心は排除されたままである。結果的に見ると、戦前に較べれば住居の内外に対する開放と閉鎖の関係は逆転している。住居の空間は、周囲には壁を立てて人間関係を遮断し、小世界に閉じ籠もりながら、暮らしの様態は社会に対して開かれ、近所にコンビニがあれば、台所に代わって電子レンジと炊きえあれば足りるところまで来てしまった。家の中から火が消えて、食事も個食ということになると、

家族は解体され、家族を核として形成されてきた住居像の根幹が揺らぐようにも見える。

しかし一方では、これから先、逆の要因が大きくなっていく。というのも、二一世紀は高齢化の時代である。情報化・電子化の進展によって、オフィスと住宅の差が縮まっていく。人が住まいの中で過ごす絶対時間は否応なく長くなるに違いない。住居が快適な空間であるかどうか、また、男にとって殆ど無縁であった住居を取りまく地域社会の環境が、これまでになく大きな意味をもつ時代が、やってくる。

### ●集合居住へのころざしの喪失

現代の都市住宅の主力となるはずの集合住宅について、この半世紀間には見るべき成果がないように見える。

戦後の公共の手による集合住宅の供給が、住宅不足の解消に役立ったのは結構なこととして、集合居住の良さを活かさずにそれ以上の工夫が見られない。というのも、関東大震災後には、いまさら述べるまでもないが、同潤会による革命的な実例があったからである。子供の遊びにみんなが目配りできる中庭の構造や、共同浴室・共同の食事設備は先進的な試みであったし、特に最上階に共用の個室を用意して、ある年代の子供に交替で使用させる工夫などは、単独住居では叶わない合理的な集合居住の成果であった。

こうした都市居住へのころざしを失い、分譲という商業化の波に呑みこまれて、単に独立住宅が縦横に積み重なっているだけの現状は、どうしたことか。間もなく住まいの時代が来るというのに、これでは二一世紀に対して申し訳ないではないか。

(はやし・まさこ)建築家、林・山田・中原設計同人主宰

## 私に映った「戦後住宅建築史」

藤井正一郎

## ● 事始め

まず、厭な私ことから始める。

私は、一九四七年大学を卒業して戦災復興院（後の建設省）に就職して数か月後、結核と判明して療養生活に入り、腸結核特有の周期的な高熱と猛烈な寝汗に苦しめられ、それが治まった段階で肋骨六本を抜く胸郭成形手術を受け、それも治まろうとした矢先、腰椎カリエスが発覚し、その手術も受けることになる。術後は、ギブスの中の絶対安静を一年以上続け、その間、高熱を伴う痔瘻にも苦しめられた。「これで死ぬんだな」と思ったことが二度ほどあった。しかし人間というものは、そんなに簡単に絶望するものではなく、やたらに本を読むことに生きている証を見出そうとした。その後、コルセットを付けて歩けるようになり、療養所の大部屋で過ごすことができるようになってからも、読書だけが私の仕事であった。建築については、義務的に当時購読していた何種類かの建築雑誌があったが、特に日本相互銀行本店竣工時の前川国男の『新日本建築の課題』や西山卯三の『住宅計画における民族的伝統と国民的課題』という論文は、なぜか強烈な印象を受けたことを覚えている。その後、同じ病棟にゴリーキー研究者の山村房次という人がいて、ロシア語をやってみないかとの誘いに乗ってロシア語を始め、やがて

それに熱中することになる。

かくして「娑婆」に出てきたのが一九五四年。最初にコンタクトをとった人の中に当時日本住宅協会にいた高橋寿男がいた。日本の住宅問題についていろいろな話を聞くほか、あの療養時の苦しみを忘れてしまったわけではないのだが、高橋さんとは夜遅くまで飲むようになっていた。その高橋さんの「命令」で、当時売り出され初めていた軽量鉄骨その他の「プレファブ」住宅の展示場となったデパートの相談室に出て、お客さんの質問に対応する役目を負わされた。各社から出されていたカタログ類をすべて読み、ひとかどのプレファブ屋さんになったようつもりで、お客の応対に多忙を極めたのを記憶している。

その後、日本建築家協会に入り、最初にお付き合いをさせてもらったのが市浦健であった。それまで協会に存在していなかった「住宅委員会」の設置をはじめ、建設省からの住宅建設に関する研究委託や、公営住宅標準設計の作成などの事務局的な仕事することになる。しかし、片や自分のやるべきことはやるつもりでいた。その一つとして、当時ウクライナの建築理論家であったツアペンコの『ソヴェト建築のリアリズムの基礎』（一九五二）という本を訳出した。そしてその中で、ロシア構成主義運動の動きを知ったのだが、そこでは、新しい生活方式を喚起するための装置としての建築への志向

をもったものというよりは、当時のロシアの遅れた生産水準から遊離したプ  
チブルの運動として批判の対象となっていた。

ところで、当時の協会には、若手建築家による先鋭的動きも見られた。そ  
の 하나가「モデュール委員会」で、広瀬鎌二を中心とする建築生産の工業化  
を推進しようとする動きであった。事務局の立場にいた私も、その考え方に  
は全く共鳴し、自分なりの「思想」にまとめていくための論理構築に努めた。  
そこから出てきた問題の一つが、「工業化の必然性と凶器性」ということで  
あった。建築生産の工業化のためには、その背景をなす産業なり工業が適切  
に発展していなければならぬことは言うまでもないが、それが、生産の論  
理よりむしろ流通・消費の論理、つまり資本の論理に支配されるようになる  
と、そこでは人間の生活の真のあり方が失われるということであり、その傾  
向は既に見え始めていた。

## ● CIAMとタウト

CIAMの都市、建築、住居に関する考え方は、未来を約束するものとし  
てわが国にも導入されていた。しかし、一九五五年に日本住宅公団ができ、わ  
が国にも多くの住宅団地が建設されるようになってからは、その考え方は、  
四時間日照の中層住棟南面平行配置という形に矮小化されてしまっ  
た。ましてや、そのような「合理的敷地計画」（一九三〇年のCIAMの  
議題）に対してブルノ・タウトが猛烈な反対をしていたこと、そしてそのこ  
とはわが国にも昭和八年という時点において、タウトの言葉として「……各  
個の場合に存在する多様複雑なる因子を無視するものにして、極めて疑念多  
きものである」……矛盾対立こそ初めて該客体に生命現象の特性を賦與す  
る」と訳されて紹介されていたことなども、忘れられていた。また、タウト  
のシードルングにおける多様な「屋外空間」（アウセンヴォーシラウム）の  
可能性についても忘れられていた。

私は、一九六二年、ソ連経由によるヨーロッパ旅行を初めて経験した。多  
くの都市の煉瓦造や石造による古い街並みと、そこで繰り広げられていた市

民生活のたたずまいに威圧されながら、その重みに耐えうるべき「近代の重  
み」を求めて、都市郊外の新しい住宅コミュニティの建設地を、足を棒にしな  
がら探し求めたのであった。しかし、モスクワ西南地区の大規模団地、ヘル  
シンキのタピオラ、コペンハーゲンのペラハイ、ストックホルムのベレンピ  
イヤファルスタなど、ひとときの安堵を覚えながらも、あの古い街並みの  
もつ「重み」の前では「極端にいえば『軽薄』の一言につきる」という言葉  
を、私は吐く以外になかった。それが何故であるかは、その時点では明確で  
はなかった。

しかし、「近代の重み」を創りうるものは、新しい市民生活のあり方を創  
出していく住宅建設のほかにないという考え方は、その後も持ちつづけた。  
宮内嘉久が主宰していた『建築年鑑』の年鑑賞の選考に関わっていたときも、  
集合住宅を何とか取り上げたいと、当時建設され始めていた大規模住宅団地  
に足を運んだり、富士の裾野に民間の集合住宅があると聞いてそこを訪れた  
こともあったが、結局ダメであったことを思い出す。

しかし一方で、一九五六年に開催されたCIAM第十回会議において、そ  
の会議を準備したスミツソン夫妻によるティームXが結成され、CIAMは  
やがてその光栄ある歴史を閉じたという情報は既に入っていたし、一九六〇  
年の世界デザイン会議には、そのスミツソンらが来日し、都市における人間  
のアソシエーションという概念も紹介されていた。上からの「計画」による  
ヒューマニズムではなく、人間のダイナミックなアソシエーションによって  
都市や住居はつくられていかなければならないという考え方である。

ところで、建築家協会では、先にも触れたように、毎年幾つかの種類の公  
営住宅標準設計の作成が委託されていたが、一九六七年の型をもって、その  
委託業務は終了することになった。それは何を意味したか。一方では、それ  
まで、技術力の乏しい小さな地方自治体がそれらの標準設計を使用してそれ  
ぞれの公営住宅を建設していたのが、不可能になることによって、それにな  
くてさえ乏しい公共の住宅建設政策が更に弱まるのではないかという懸念が  
あった。しかし他方では、画一的な公共住宅に代わって、それぞれの地域に

ふさわしい公共住宅を自由に設計していくことのできる希望が生まれることになった。

## ●鳥観図から虫観図へ

一九六九年から一九七〇年代にかけて代官山集合住居計画（横文彦）が実現され、また同じく七〇年には桜台コートビレッジ（内井昭蔵）が出現した。さらにまた、七〇年代後半になって茨城県営の水戸六番池団地（藤本昌也ほか）につづいて、同じく県営の会神原団地（同）が実現し、一つの折り返し点を迎えた。何が折り返し点か。これまでのありがちな、中層住棟を画一的に配置していく計画ではなく、それらにおいては、人間の多様な行為、活動を誘発する共有空間（コモン・スペース）が設けられ、かつそこにおける人間の行為のシークエンスに耐えうる景観の造成が企図されていた。それは、とかく上からの計画によって、人間の生活に「緑と太陽」の住まいをもたらそうとする鳥観図的な視点ではなく、住空間の内部から人間の生活を育んでいけるような、どちらかといえば虫観図的な視点であったといえよう。

時あたかも、ロバート・ヴェンチュリーの『建築の多様性と対立性』（一九六六）、クリストファー・アレキサンダーの『都市はツリーではない』（一九六五）、ケヴィン・リンチの『都市のイメージ』（一九六八）などが発表され、また、ヴェンチュリー、ムーア、ジョゴラたち、アメリカのいわゆる第三世代の建築家たちの活動も、次第にわが国にも紹介され、従来の「空間」というどちらかといえば透明な概念に代わって、「場所」（プレイス）という概念が、むしろわが国の伝統文化の中にこそあるものとしてクロースアップされてきた。デザイン・サーヴェイなどというものもその一環であった。

他方、建築界の外の科学思想の領域においても、線形システム工学に対する疑問は強まり、やがて現代におけるカオス理論、フラクタル理論、複雑系理論などの非線形システム理論に至る、一つの折り返し点でもあったのである。

る。適切な初期条件さえ与えられれば我々は確実に未来を予測し、過去を遡逆推測することができるという「自然法則」は崩壊するのである。自然は、生物は、驚くべき多様性、不規則性、不完全性に満ちており、そこに見られる数限りない巧妙な仕組みをこそ発見していくべきであるとするのである。人間の居住空間に対する眼差しにおいても、それは同じであった。まさに、コミュニティの多様性の中に見られる数限りない巧妙な仕組みをこそ発見していかなければならないのであった。

先にあげた代官山集合住宅は、最近に至るまでその建設は続けられ、一つの街並みを形成するに至っているが、そこに見られるパブリック、セミパブリックな空間に繰り広げられている人びとの集いやイベントこそが、その新しいコミュニティを創りだしているのである。それを可能にしたものは、良きクライアントと良き建築家との出会いによるものであると聞くが、クライアント、発注者の重要性が今後もクロースアップされていくであろう。その問題に関わる一つの典型的な例が、一九九〇年代初めに名古屋市営千種台団地の建て替え計画に見られた。市側は、それまでの低層を中・高層に変更する計画を示したのに対して、住民は反対し、代わりにクリストファー・アレキサンダーを招いてその計画を委託するという挙に出たのである。アレキサンダーは、その地域に関する調査はもちろんとして、住民との度重なる面談を行ない、例えば思い出の木、坂道、花壇などを住民の残すべき財産として計画の中に取り込んで、瓦屋根三階建ての集合住宅の案をつくったという。住民は、その案をもって市側と交渉したが、結局それは実現せず、市側の計画の若干の変更で実施されたという。この場合の発注者である名古屋市の考え方の、何と常習的で、何と貧困であったことか。それに引き替え、先にあげた茨城県が、住宅課長でプランナーの蓑原敬の提唱する「地域主義」を受け入れ、実施を任せた見識は高く評価されよう。

ところで、アレキサンダーは、住民の希望や夢を聞き出す設計のプロセスをこそ重要視したが、建築というものを、人の暮らし、人の心をつき育てる器、更に人間の行動をつくり出す器と考えた。その点、一九二〇年代の口

シア構成主義の建築家の一人ギンズブルグが「建築は社会のコンデンサーである」といったことを思い出す。

## ●大地へ

私は、戸建住宅については、あまり見ていないので、語ることを控えてきたが、海外、国内の住宅作品を写真などで見て感動を覚えるものはある。中には、住まいの「効用」を越えてなお美しいと思われるものもある。しかし、その美しさが「個別」にとどまるものなのか、それとも、それが「個別」を越えて、「普遍」というか、ドミナントな大地に繋がっていくようにしているものなのかの見分けは、今後重要な問題となつてこよう。そうでなければ、そのような美しさは単に「贅沢」な美しさに留まつてしまふ。再びロシア構成主義の例を挙げて恐縮であるが、あのコンスタンチン・メリニコフの円筒形の自邸（一九二七）の衝撃的な内部空間は、円筒形の空間が他の集合住宅や公共建築にも使用されているところを見ると、当時の「工業化」の趨勢の一環の中で、それは考えられていた節がある。まさに、それは、ドミナントに繋がるべきものとしての新しい質をもった空間であつたといえよう。

早川和男は、「居住福祉」という概念を公にしている。彼は、阪神・淡路大震災に対する行政側の対策に切歯扼腕しながら、市民社会の基礎としての居住環境の根本的な見直しを、「居住福祉」の実現として求めるのである。「現代の日本人は『居』の貧困によって、ゆとりのある人間形成に与える影響は極めて大きい」といった彼の言葉を聞きながら、私は、H・リードの『芸術の草の根』を思い出していた。生活文化の質の高さは、幼児を含めた児童の造形教育を基礎とするものであるというその主張は、更に、その造形教育の成立するその基礎に、国民全体の健全な居住環境がなければならぬとする早川の主張にまで、それは延長されねばならないと思えたからである。クライアントの無理解とかその考え方の貧困さといわれることも、根本的な理由はそん

などころにあるのかも知れない。

最後に建築生産組織の問題。かつて、工業化は、住宅の大量生産にとつては「必然的」なものであつた。しかし、その後の工業化＝商業化の動きの中で、業者の系列化による質の凋落、プライスリーダーによるコストのブラックボックス化、商品化住宅の安易なイメージの流行、多彩だが薄っぺらな建材や部品の氾濫といった現象が見られた。そういう現象の中で、優れた量産建築システムを構築していくようにしている大野勝彦のセキスイハイムMI（一九七二）などは、むしろ稀有の例であるといえよう。

建築生産の現状は、むしろ破局的でさえある。泉幸甫があるシンポジウムで語つたことを聞いてみよう。彼は、建築家なのだからカタチを考えるのは好きだといひながら、「……カタチだけでは現在の住宅はどうにもならなくなっているのではないかと思う」といひ、カタチ以前のカタチのシステムづくりの必要性を主張する。建築をつくるためには、それをつくるための生産組織が必要なのだが、それが既成のもので、しかも「資本」の利害のみでつくられた組織では「どうにもならなくなっている」とすれば、そこには職人さん、材木屋さんのみでなく、弁護士、会計士たちを含めた、建築のカタチを生み出すための新しいチームの活動が、カタチとしての新しい役割を果たしていかなければならないというのである。幸い、一九八三年にHOPPE計画（地域住宅計画）制度が発足し、行政を含めて、建築家、工務店、建材メーカーや販売店等による新しい生産組織が各地域でつくられながら、それら地域に根差した住まいや街づくりも行なわれるようになっていく。あるいは、離れた地域の林業家グループ、製材業者グループ、建築家グループ、施工業者グループが、住み手も加わつて一体となり、安定した生産組織をつくるようにする動きもでてきている。

そのような新しい組織によって、人びとの心の通いあう感動的な住まいの空間が各地域につくられていくことは、まさに二一世紀に期待される一つの夢である。

（ふじい・しょういちろう／建築評論家）

# 日本の住まい、その発想転換

## 降幡 廣信

### 「再生」

住宅は、その時その場に適した建物を新築し、古くなって機能が時代にそぐわなくなると、取り壊して新しくつくり替えるのが、本筋だった。その中で、新築は常に新しいものを追いつめた。

一方、復原工事は、現状維持、または、より正確な姿を後世へ遺すことを目的とし、主として文化財の分野で行なわれてきた。これは、古い姿を残すことが目的であって、今日的機能が必要とするものではない。そこが、復原工事が新築工事と大きく違うところである。

このように、わが国における建築工事は、新築工事と復原工事によって支えられてきたと言っても過言ではない。

この二者に次ぐ、第三番目の工事として、今世紀、再生工事が登場した。しかし、二者の他に、増改築、模様替えなどの工事が行なわれてきた。これらも再生工事の中に入るのでないか、ということにもなる。確かにこれらは古いものの機能を高める工事であった。ところが、この方法は、再生とは根本的な違いをもっている。わが国においては、古いものを良くしようとするとき、新しくつくり替えることが最善の方法と考えられてきた。理想の建物をつくるには、新築以外にはないという考え方である。その中で増改築は、諸々の事情により新築がでない場合の、一時しのぎの略式の工事として存在した。

再生工事は、一時しのぎの増改築では決してない。古い家を捨てずに、その家の持っている歴史と特徴を生かしながら、現代の機能を備えた住まいに甦らすことである。そこには、新築

工事にも復原工事にも得られない、再生工事独特の内容が込められる。さらに今日希薄になった日本の文化が、新たにされて後世に生き続けることにもなる。

再生は、今日、資源の再生をはじめさまざまな分野で脚光を浴びている。新聞やテレビでも広く報道され、再生という言葉はめずらしいものではなくなった。今や、再生という行為の中に、もっとも新しくもっとも大事なものが隠されているといえる。

建築の分野でも、その方向に新しい流れを感じとれる。かつて特殊であった、リフォームや再生が、全国各地の人びとによって行なわれ、雑誌を賑わしている。個々の家ばかりではなく、街並みとしてもそうだし、非木造の大きな建築までも行なわれる時代になった。

特に最近、工務店のリフォームの看板を見てもそのことが伺えるように、リフォームや再生が一般化する傾向にある。このことは大変喜ばしいことでもあるが、危険もはらんでいる。耳慣れた工事になったため、安易に工事ができると思われやすい。文化財級のものや古い民家になると、付け焼き刃では手に負えないことがある。現に再生工事を進めながら、大事な財産を傷められ、そのうえ工事が中断してしまった例があった。これは今後への警鐘ではなからうか。専門的な技術を持った設計者、施工業者の養成がなされて初めて、新築・復原・再生の三者による日本の建築工事が確立することになるのだろう。

### 「発想の転換」

今日の日本の住宅の洋風化の現状には考えさせられることが多い。無節操に外国のものを取り込んでいることがある。日

本の洋風化も文明開化に端を発しているが、時代も違いますが当時のものには、質の高さを感じる。また、日本の風土が色濃く反映した擬洋風の置土産もあった。しかし、昨今の巷に立ち並ぶ国籍不明の住宅を見た時、二一世紀の日本人の住まいはどうか案じられてならない。

振り返ると、日本はより進んだ国から日本にないものを吸収し、発展してきた歴史をもっている。日本の文化の形成の裏に、古くは中国や朝鮮半島の国々のような当時の先進国が大きくかわっていた。特に戦後は、戦勝国アメリカの力を借りて復興した。同時にアメリカを通じて西欧文化が洪水のごとくに流れ込むことになった。

そんなことが続く中で、アメリカからの思想や物の流入を無制限に受け入れる結果となった。急を要する一時しのぎに、もつとも手っ取り早い方法を探らざるを得ない事情があったのだ。またそれが今日まで続いてしまっている。その結果、日本は大事なものまで外国の借り物ですませることに慣れてしまった。そして、今までの伝統の中から新しい日本の住まいを生み出す労苦を怠ってしまった。

かつてと違い、今日の日本は、それで済まされる立場ではないと思う。日本は先進国となり、経済的に世界をリードする大国になっている。かつての日本は先進国の後を追うことに終始してきたが、日本の現況を見た時、おのずとその歩みの転換を求められることになったのではないか。文化の一翼を担う住まいのスタイルが、いつまでも外国の形式で済まされる時代ではなくなったということであろう。

かつてわが国固有の伝統的住宅がそうであったように、諸外

国からの尊敬に値する住まいでなくてはならない。

住まいは、風土の上になり立っていた。地球上どこでも、その風土の中から固有の住宅が生み出された。

今日、日本の風土が支配する固有の領域に、違った風土に生まれた西欧住宅や所在不明の住宅をそのまま取り込んでいる。それゆえ、日本の文化が陰に追いやられて息をひそめている。この辺で、「外国のもので目先を変えてことを済ませる」という考えから抜け出したいものである。日本の風土から生まれた日本の住まいを生み出す歩みを始めるべきだと思う。世紀の変わり目のちょうど良いチャンスである。

わが国の建築工事は、新築の発想ですべてがなされてきた。新築の発想があらゆるところから新しいものを吸収し、進歩発展させて今日に至っている。そしてたどり着いたところが今日の現況である。しかし、今世紀から二一世紀を展望したとき、今までの流れでは先が思いやられる。発想の転換が必要欠くべからざるものみえる。

新築の発想の転換にあたっては、そのまま残そうとする復元の発想だろうか。しかしそれでは二一世紀の日本の新しい住まいは生み出せないだろう。他の方法として可能性があるとするれば、日本の文化を現代的に甦らせることのできる「再生」の発想が注目されてくるのではないか。二〇世紀の住宅建築は、新築と復元の二者択一の中で、新築の方向に偏りすぎた。しかし、新たに再生が加えられた二一世紀では、新築工事においても、再生の発想が必要ではないか。そして、復元工事においても同様なことがいえよう。二一世紀の日本の住宅を生み出す秘密が、再生の発想の中に隠されていると思えてならない。

(ふりはた・ひろのぶ／榊幡建築設計事務所代表取締役、建築家)

「白い四角い家」

一九三〇年代の日本で、土浦亀城邸（一九三五）のような「白い四角い家」が、わずかながら建てられた。早くからル・コルビュジェやW・グロピウスそしてCIAMが目標とした二〇世紀の建築であった。それをR・H・ヒッチコックとP・ジョンソンが「インターナショナル・スタイル」と定義づけた。まさに近代合理主義の典型としての建築である。

建築は建築家が設計図で作品を表現しても、それを実現する技術と生産の裏付けがなければ実現しない。日本の「白い四角い家」は、新興建築の名で西欧のインターナショナル・スタイルの形を模倣した住宅だが、RC造や鉄骨造ではなく木造であった。

敗戦日本には、焦土と荒廃した国土と約四二〇万戸というほう大な住宅不足が残った。バラックは素早く建ったが、第一次世界大戦後のドイツのジードルンクのようなRC造の本格的な集合住宅の建設はすぐには不可能であった。

戦後一〇年、ようやく住宅公団が発足し、RC造集合住宅の建設がはじまる。2LDK、3DKという独特の表記とタタミのある間取りは、すぐに民間の集合住宅にも広まる。

しかし公営より民間の住宅復興が早く、再び大都市は木造住宅で埋められていく。したがって公営の集合住宅は都市周辺部に多く建てられ、独立住宅も庭を持つとする願いから土地の安い郊外へとスプロールしてゆく。

こんな中で、断固として都心に留まる決意を表明したのが、「塔状の家」（一九六九）の東孝光と「住吉の長屋」（一九七六）の安藤忠雄であり、集合住宅では「都住創内淡路町・スパイヤ」（一九八六・八七）の中筋修である。

注目すべきことは東も安藤も中筋も大阪人であり、大阪は難波の昔より集住し、都市に住む感覚を身につけていたことである。

メタボリズム

一九六〇年の「メタボリズム（新陳代謝）宣言」は、輪廻転生に通ずる東洋的発想に根ざすがゆえに海外でも注目された。

しかし、実作品が乏しい。黒川紀章の中銀カプセルタワーは健在であるが、大阪万博のタカラビニューテリオンも山形ハワイドリームランドもすでない。代わりに菊竹清訓のスカイハウス（一九五八）は少し早い。発想からして、ここに加えて良いと思う。「メタボリズム」同人の菊竹清訓の「海上都市」、黒川紀章の「東京ヘリックス計画」、横文彦の「ゴジルストラクチャー」、大高正人の「群造形」は、発想に有機体アナロジーはあるが、実はハイテク礼讃の夢物語で、説得力に乏しかった。B・タウトの「アルプス建築」ほどに確固たる思想と夢はない。

少し遅れて一九六五年に、ワシントン大学客員教授であった伊藤ていじによって「デザイン・サーヴェイ」が日本に紹介される。「ヴァナキュラーに学ぶ」というキャッチフレーズに、どの大学も一斉に町や村に飛び出していった。

前年（一九六四）にオリンピック東京大会が開かれ、同時に東海道新幹線が開通した。「もはや戦後でない」という意識と生活のゆとりが、日本の伝統文化を見直させたともいえる。

多くの集落や町並みの調査をしたが、デザインにどれほど生かされたであろう。明治大学神代研究室の「日本の町並み」の系統的調査で、祭礼の行事の中からハレの日に見える集落の特色を調査し歴史的構造を明らかにしたのはユニークであった。その後、本当に新しい調査が始まったのは、一九七六年陣内秀信がイタリアで類型学を学んで帰り日本の都市を読み解きはじめたからである。

ポスト・モダン

近代建築運動をリードしてきたのはCIAMだった。その第一〇回CIAM大会（テーマは住居）の準備を任されたのが

チーム・テン(Team X)で、その委員にはバケマ、キャンデリ  
ス、スミッソン夫妻、ファン・アイクその他若い過激論者たち  
が集まっていた。彼らが準備し一九五六年ユーゴスラビアのド  
ゥブロブニクで開かれた国際会議の終わりまでにCIAMは崩  
壊する。近代合理主義の牙城は崩れ去ったが、近代合理主義の  
信奉者は残った。だがもはや流れは変わり、CIAMを否定す  
る思想意見が世界の建築界に広まった。かつてはCIAMを擁  
護したJ・M・リチャーズとN・ペブスナが編んだ『反合理主  
義者 ANTI-RATIONALISTS』が、一九七三年に刊行される。

日本で反合理主義の作品は、林泰義、富田玲子の「起爆空間」  
(一九六六)と渡辺洋治の「第三スカイビル」(一九七〇)が早  
いだろう。だが本当に皆をはっとさせたのは、毛綱毅曠の「反  
住器」(一九七二)と、石山修武の「幻庵」(一九七五)であろう。  
彼らは理性より感性による造形の復権を明確に主張している。

もしインターナショナル・スタイルという近代合理主義の厳  
しい戒律からはみだすのがポスト・モダンだとすると、逸脱の  
手法はまだ多く探せる。中でも「混在併存」を早くから説いた  
大江宏には「茨城県知事公舎」(一九七四)がある。また奇才は  
多いが、伊東豊雄の「シルバーハット」(一九八四)を挙げてお  
く。彼はこの作品以来コンクリートのヴォリュームを徹底して  
拒否している。「インターナショナル・スタイル」の第一原理の  
否定である。

住宅は、より多くの人びとのための住宅を前提とする民主社  
会主義的使命を重く負っていた。だが今は量産住宅すら競って  
目立つデザインで売り込みを図っている。現代は差別化が好ま  
れているのだ。

### 環境と住宅

ポスト・モダンという言葉は何時しか聞かなくなった。ルネ  
サンスの後がポスト・ルネサンスでなくバロックであり、今で

は両者の間にマニエリスムを入れて様式を細かく見分けている。  
ただ一八世紀以後の近世では、ネオ・クラシシズムがまずあり、  
ついでネオ・ルネサンス、ネオ・バロックと多様な復興がある。  
近代合理主義は現在も根深く残っており、その復権を求める  
声もある。しかし、二〇世紀とは確実に異なる世紀末の二つの  
問題と現象がある。一つは環境問題の深刻化であり、もう一つ  
は情報技術の著しい発達である。

環境問題の難しさは巨大な生産構造にどうブレーキをかける  
かにある。建築家も今や自然と共生し、資源の保護に努めねば  
ならない。降幡廣信の民家再生、三井所清典の地域に根ざした  
住宅のスタイルとシステムの開発などの努力は、二一世紀への  
展望を考えるとき重要だと思う。

情報技術の進歩は産業経済のみならず芸術文化まで幅広く及  
んでいる。建築産業でも複雑な構造計算から設計製図、積算ま  
ですべてに情報機器が用いられている。新関西空港コンペのお  
り、安井事務所はすべての図面をCGを用いて製図したという。  
コンピュータ・ゲームだけでなくパイロットの訓練、そして  
映画製作にもヴァーチャル・リアリティの技術は用いられてい  
る。これが現実の住生活とどう結びつくか全く予測できないが、  
変化を与えるように思う。

先日、藤森照信の作品展があった。タンポポハウスほかどの  
作品も、彼の信州での自然児時代の生活感覚がうかがえる。ま  
た雑誌で荒川修作の東京臨海副都心を想定した「センサーリ  
ュム都市」案を見た。荒川の思考は複雑だが「すべてが身体の行  
為のサイズによってつくられている」というのはわかる。どち  
らも身体感覚から建築を見ているのが共通している。新しい流  
れはいつも異端にはじまり、いつか主流になる。二〇世紀末の  
異端は決して無視すべきでない。

(やまぐち・ひろし/日本大学名誉教授、建築史家)

# 住総研五〇年史抄

## 大坪昭

住にかかわる財団としての五〇年、それは、より高い豊かさの存在を信じ、もつめつづけた日本の半世紀でもあった。しかし、その豊かさには常に負の影があることが認識されるようになった昨今、その本質を明らかにし打開の道をさぐるからこそ、二一世紀の財団に課せられた至上命題であろう。創立者の心を縦糸とするならば、時々の流れを先取りして横糸の彩りをかえ、あたらしい展開を期待しつつ、過ぎ来し半世紀の歴史をかえりみる。

### 「新住宅普及会」の誕生

一九四八年、真夏の太陽の照りつける赤茶けたトタン板、焦土の面影がまだ拭いきれぬ東京の街に立って、清水康雄（当時清水建設社長）は財団設立を心にきめる。この康雄の祖父・満之助は日本建築学会の設立に最初に援助の手をさしのべ



住宅総合研究財団(写真/岩為)

た人物でもあり、父・釘吉も工部大学校造家学科の出身で、学究肌の一面をもった人として伝えられる。この血をうけた康雄も戦後、他社に先駆けていち早く社内に研究室を設ける等、学術の振興には深い理解をもつ家系の人であった。

しかしこの人をして財団設立に駆り立てたのは、こうした血筋の問題、あるいは自らの企業経営の近代化、そしてその安定的成長の道の模索もさることながら、当時の敗戦国日本にあつて建設業界の若きリーダーとして、復興によせる強い責任感—今となつては死語に近くなつた「憂国の情」によるものであつた。終戦直後ではあるが、「清水組社報」の巻頭言にのこるその遺文の数々は、この間の心情を吐露してやまない。

「終戦から今日の復興建築の状況を見ても、如何に衣食住の『住』において、民族の生存に赤信

号が出ているかが分かる。『食』はないと餓死するからまず手をつけ、『住』『衣』は後廻しにされ勝ちである。しかし雨露をしのぐ家が無ければやはり死をまねきかねない。(中略)今の石炭事情では、燃料を使わないですむ材料の工夫研究をするとか(中略)思い切つた施策を実施しない限り、大和民族は住むに家なき民族として、大八洲の上を放浪する恐れがある」(一九四六年二月、社報巻頭言「大和民族受難」)。

「貧しい敗戦国日本は、出来るだけ民度の向上をはかり、広義の科学を徹底的に普及せしめて、この非常時局を切り抜ける以外に手段は無い。

(中略)精神論で難局は打開できない。国民の日常生活から農工商に至るまで、すべて科学的合理性をもたせ、(中略)最大能力を出すことに心がける以外にない」(一九四五年一二月、社報巻頭言「敗戦」)。

そして国を憂うこの心情はやがて「如何なる形態の建築が、経済の面より、資材の面より、はたまた施工生産の面より等々、適当であるか。(中略)本財団はこれら部門の諸問題を研究し、其の成果を実践に移し、以て窮迫せる住宅問題の解決に質せん」として私財の一部を投じて基金とした財団「新住宅普及会」の設立につながる(一九四八年一月)。建設省の発足が一九四八年八月、金融公庫のそれが一九五〇年五月、住宅公団の誕生には更に五年の歳月を必要とした混沌の頃である。

更に経緯をひもとく時、そこにまた別の歴史の流れを読みとることができる。大正時代、啓蒙運動を展開した経済学者の森本厚吉は、後に有島武郎、吉野作造らと共に(財)文化普及会を設立(一九二一年)、時の内務省の勸奨もあって、その実践の場としてお茶の水に「文化アパート」を建設(一九二四年)、この時代の日本住宅史に同潤会と共に注目すべき足跡を残した人物である。

時は下って「新住宅普及会」設立当初から康雄の手足となって尽くした木下嘉次は、たまたまこの厚吉の令息武哉と旧制高校、大学を通しての同窓であり、その設立にあつたつては多くの示唆と助言を得たとされている。ふたつの財団に共通する「普及会」の文字、力点が異なる(文化普及会Ⅱ生活文化、新住宅普及会Ⅱ建設システム)にせよ、明日を求める新住宅、この大正ロマンの脈動がこの間の交流を通じて伝えられたか否かは別として、文化アパートの記憶が、その後の康雄の新住宅建設にあたって残像として、影響を及ぼしたことは想像にかたくない。

## 幻の加賀町公園住宅から 「新住宅」建設の時代へ

「新住宅」の第一弾として、財団が本格的な鉄筋コンクリート集合住宅「加賀町公園住宅」の建設を決意したのは、財団設立一年余り後の一九五〇年の春であり、時の事業報告書にはその状況が次のように述べられている。「懸案の住宅金融

公庫法案も三月末には議會を通過し(中略)漸くにして今後の住宅事情に明るさを加えるに至った。当会においてはかねてよりこの事あるを期し、即応の態勢にあつたが(中略)公庫に関する事業として先づ第一に鉄筋アパートの建設、並びに経営をなす事に決し、敷地も選定せられ、資金調達の見通しも得られ、設計も了し(中略)公庫の発足を待つのみとなつた」。

敷地は新宿区市ヶ谷加賀町の高台(一五〇六坪)、建物は鉄筋コンクリート造四階建四棟(一五六九坪)一〇四戸の住戸よりなるこの計画は、今から見れば箱型、並列の平凡陳腐とされるべきものであるかも知れない。しかしDKこそまだ現れていないものの、食寝分離を意識した部屋の構成、一部椅子座の採用、また単身者用を組み入れた住戸の構成、南入り北入りの住棟配置による中庭の活用、そのほか共用施設(浴場、集会場)など、戦時中の長い空白を埋めようとする意欲は汲みとれる、当時としては精一杯の計画であつた。

待望の公庫の募集はこの年(一九五〇年)六月に行なわれた。しかし思わぬ誤算、民間法人に対する融資の道は閉ざされていた。更に激しいインフレの波、計画規模を縮小して(三棟六十戸)の対応の努力も空しく、またその後二年間の期待にも拘わらず、実現の夢はもろくも崩壊する。これは公庫発足以前から政府の懇談会委員として、その設立にも参画していた康雄にとって、また意気込みの大きかった財団にとつても、大きな挫折感

を与えるものであつた。しかし一方、こうした「新住宅」の実現のためには、先づ財政基盤の確立こそ必要であることを痛感させる重要な教訓を残して、次の時代をむかえる。

以降一〇年は財団にとつては、まさに雌伏の年であつた。基金をあてた株式よりの配当収入、折からの景気の波にのつた相次ぐ有償、無償増資株の引き受け、果ては当時事務所を借用していた清水建設社屋内における煙草、収入印紙取扱手数料研究受託といった零細な収入までを足がかりに、専ら財政の基礎がためにのみ終始した長い年月であつた。

こうして基礎体力づくりに専念した一〇年を経、ようやく「新住宅」の建設のため、日野市豊田に土地を購入したのは一九六三年、既に財団創立以来一五年の歳月が経過した頃であつた。長年とめられていた堰を切った奔流のように、これから一〇年は都内三か所に土地を求めて「新住宅」建設の活動が展開される(竣工、豊田六六年五月加賀町一期六八年、二期七一年、三期七七年、立川七二年)。総戸数三一戸、それらは、何れも当時脚光を浴びつあつた工業化工法の波にのり、それぞれ大型パネル工法、PC、HPC工法と、工法の革新が主要なテーマの「新住宅」ばかりであつた。

しかしそれはまた、それでしかあり得なかつたことで、財団に大きな反省を迫るものであつた。

そのひとつは創立以来二〇余年を經過しての住宅供給、生産をめぐる社会環境の大きな変化である。住宅公団を中心として、民間企業（ゼネコンから鉄鋼業者、部品メーカー）を巻き込んで上昇したこの間の技術的水準の向上、住宅の大量供給は、戦後の混乱期ならいざ知らず、既に第三セクターとして、一民間財団の介入する役割の終焉を示すものであった。

更にまた当時財団は「新住宅」建設と経営のみを事業とする以上、その経営は公益性（具体的には公団並みの家賃）を保持しなければならぬという制約を課せられていた。大まかにいうと、民間家賃の三分の二程度というこの条件は、「新住宅」の数が増えるにしたがって、財団にとって負い切れぬ福祉的負担の増大を将来招きかねないものであることが分かって来た。

それにも増して転換を動機づけたのは、都市居住の成熟と、それにとまらぬ社会的状況の変化であった。「人口の都市集中にともない住環境保全の問題や共同生活上の人間関係の問題が続出している現在、今一度原点に戻って洗い直し研究しなければならない」という橋本文夫（当時専務理事）らの意見をめぐって財団内部でも真剣な議論が交わされた。「どういう」住宅を「どうしてつくるか」。

国でもない、企業でもない財団に社会が期待しているのは、この「どうして」ではなく、「どういう」ものをつくるかの解明ではないか。別のいい

方をすれば、「つくる」立場から「つかう」立場に立って「住」は考えるべきではないかとする疑問である。その意味でこれは財団の姿勢の根幹につながる論議ともいべきものであった。

（注）

この時期、建てられた「新住宅」は、その後、財団の公益活動を支える収益事業（賃貸住宅経営）の担い手としてまた財団の経済的自立保持のためにも、新しい役割を果たすことになる。爾来三十有余年、その中の豊田住宅は今更に新が決定され、第二世代の「新住宅」としてと同時に新たな公益原資の担い手として、来世紀初頭の完成に向け進行中である。

## 実践から研究へ

### 研究助成事業のスタート

こうした議論をふまえて、財団は一九七二年、大きな路線の転換を決意した。

「新住宅建設という実践中心から、その源流である研究へ事業の中心をおきなす」という、まさに設立時の趣意書にある「研究してその成果を實踐する」とした事業の原点に立ち戻る、第二の出発の道をあえて選んだわけである。新しい第一歩を踏み出すに当たって、財団はまず組織内に住宅建築研究所を設立、形をととのえた。しかし所長（専務理事兼任）以下二―三名の陣容、しかも未知の分野への船出に当たり、財団は外部の有識者の協力支援を求めることに活路を見出そうとした。当時新進の住宅計画研究者として鈴木成文（東大）、内田祥哉（東大）、青木志郎（東工大）、

前田尚美（東洋大）、太田利彦（清水建設）によって構成された研究運営委員会はその後、巽和夫（京大）を加えて、手探りの状態から論議を交わして、研究活動のシステムを一步、一步築いていく。何れも四十歳代のなかば、清新の気にあふれてスタートしたこの委員会のその後十数年、企画から実施の細部にいたるまで、この分野における原動力として果たした役割は大きい。

この運営委員会の論議をふまえて、財団が研究に関する事業の足がかりとして選んだのは、委託研究に対する助成事業であった。これに対して運営委員会は、住に関する研究テーマ、研究者の分布を含む研究マップの現状を整理し、独自に重要かつ成果の上がる見とおしのあるテーマ、そして適当と考えられる研究者をあげ、討論を重ねて委託するテーマと研究者を絞りこんでこれにこたえた。そしてこのプロセスは、事業の存在が研究者の間で広く認知されるにつれ、自薦、他薦の研究者を候補に含めるようになり、やがて公募への道へつながっていく（一九七五年からは外部からの応募を正式に認め、八二年からは所報に応募要項を掲載、八五年からは学会誌その他でもこれを周知せしめる現在の公募形式に至っている）。

「住」に関する研究は戦後の建築研究の中にあつて、研究原資の点から見てもあまり日の当たらない分野であるとされていた。しかし財団が助成活動をはじめた一九七二年前後から、「住」に関する

る研究が飛躍的に増加したことは、学会のこの時期の大会発表論文数の推移からもよみとることができるところである。量産化の問題もひと先ずヒークを越え、量から質への路線の転換という社会的ニーズへの対応においても、この財団の第二の出発は時宜を得たものとしても過言ではあるまい。以降、年を重ねて既に四半世紀、助成の累次件数は五百を越え、金額も一〇億を超えるに至った。一方、質的な面から見ても、この間の「住」に関する建築学会論文賞受賞対象四十余件の中、過半を当財団の助成研究と深いかわりをもつ論文が占めている点からも、住研究の発展に応分の役割を果たしたといえよう。

## 年度シンポジウムと各種フォーラム

研究助成事業も軌道に乗った一九八一年、「住」に関して重要と考えられる包括的テーマについて、新しい研究分野を示唆する期待をふくめて更に論を深めるための方策の具体化が検討された。学術性を加味して選ばれた三名の筆者への論文委託、そしてそれを下敷きにしての公開討論会の開催からなる、現在までつづく年度シンポジウムの骨子についてである。初回のシンポジウムこそ下敷きとなる論文はなかったものの、第二回からは論文作成（初年度）、シンポジウム開催（次年度）の二年度にわたる事業として、以来一七回と回を重ね、社会への提案発信の意味をもつ財団の自主的事業の第一号として定着して、今日にいたる。

ついで一九八五年、財団は世田谷区千歳船橋に土地を求めて念願の新社屋を建設、移転する。鉄筋コンクリート造二階建、中庭を囲んだこの建物には、一般事務スペースの他、会議室、図書室をかね備えた建物であり、財団事業の強力な戦力として機能する。特にその会議室は以降相次いで発足する江戸東京フォーラム（八六年）、高齢者すまいづくりフォーラム（九一年）、住教育フォーラム（九三年）、アジア住宅フォーラム（九四年）など、自主事業プログラムの公開討論の場所として、その活動展開の足がかりとなるものであった。これらのプログラムは、年度シンポジウムを含めて研究者による委員会組織の企画により、開かれた討議の場を通じて議論を深め、更にその成果を出版等を通じて世に問うという共通の仕組みをもち、その参加者は既に八千人を超えた。

## 季刊誌「すまいろん」と図書室

旧称「普及会」の文字にもあるように、あまねく及ぼすことは、この財団の重要な使命として位置づけられたものであった。一九八三年「研究成果をより平易に紹介して欲しい」との声にこたえて「研究所だより」と銘うつた小冊子が発刊されたのも、この間の発想によるものである。その後、対象を研究者の枠にとらわれず実務者からできれば一般市民までを対象として、と発刊されたのが「すまいろん」である。年四回の季刊、毎号新しい切り口、新しい問題を求めて特集形式を組んで

いるが、毎号その特集にそった小さな討論会（ミニシンポジウム）を開催、市民との交流の手がかりを把もうとしてきたことも、この季刊誌に流れる一貫した歴史である。可能性と限界、連続性と変化の間を彷徨して十年余、既に通巻四七号を数える。

新社屋への移転で大きく花開いたものに、更に図書室の設置とその公開がある（一九八七年）。蔵書約一万二千冊の規模で利用者の数も現在は決して多くないが、「住」にかかわる専門図書室として、更には「住」に関する研究情報センターへの脱皮を目指して、将来の財団活動の大きな拠点となることを期待される部門である。

財団の名称「新住宅普及会」が現在の「住宅総合研究財団」に改称されたのは創立四〇年、一九八八年のことである。これらの過程を経ての五〇年、その道程は紆余曲折、決して平坦なものではなかった。それにもかかわらず財団の今日あるのは、創立者をはじめ多くの先人たちの地道な努力、更に加えてこの事業にご支援をいただいた多くの研究者の何ものにもとらわれない自由な発想と献身的な尽力の賜である。五〇年の節目を迎え、はからずも浴することのできた日本建築学会賞業績賞受賞の栄をこれらの方々には捧げて、この小史の結びとする。

（文中人名敬称略）  
（おおつば・あきら／財団法人住宅総合研究財団専務理事）

## ●序

住むことと思想の関係でいえば、まさにその両者の分裂ゆえに二〇世紀の居住を批判し、詩的に住まうことにこそ実存の基本原理を認めたハイデッカーがひとつの極を示すだろう。そして彼のまわりには散りばめられた星座のごとく、さまざまな現象学的な住宅読解がある。今世紀の思想家による建築論はなかなか興味深いものが多いけれども、近年、こうした文献を集めるN・リーチ編のアンソロロジーが刊行された。実は収録されたテキストのおよそ半分はすでに邦訳もされているが、一冊でモダニズムのアドルノからポストモダンのF・ジェイムソンまでを閲覧できるので大変に便利な本である。そこで教科書的に住まいの思想を紹介するのは本書に任せるとして、ここでは住宅と少なからぬ関係を持ち、特に現代思想も巻き込んで九〇年代に興隆しているジェンダー論に注目し、住総研図書室所蔵の本を中心に関連文献をひもといていくことにしたい。

### ●建築とジェンダー

巷によくある言い方として、女性は女性的な空間をつくるから男性はかなわないといえながら、無意識に性差を強固に守ろうとしているものや、二〇年以上前の認識で制度化されたフェミニズムを批判し、だからジェンダー論もつまらないという主張をときおり見掛け

る。そもそもジェンダー論は必ずしもフェミニズムと同じものではないのだが、おそらく建築界ではこの辺の認識が混乱していると思われるので、周辺領域の動向も含めて簡単に整理しておこう(詳しくは『建築文化』一九九七年七月号所収の拙稿を参照)。まず六〇年代は、社会運動における異議申し立ての時代だった(ウーマンリブの発端)。七〇年代は、美術史の分野における埋もれていた女性作家の発掘が行なわれ、建築も遅れてこれに続く。八〇年代は建築・都市の分野における社会学的な研究が開始する。そして九〇年代は、表象の問題として現代思想を援用したセクシャリティ論が一斉に花開く。

### ●隠蔽されたジェンダー

最初は主に歴史学的アプローチによって建築史に記述されなかった女性建築家の研究と、展覧会や雑誌の特集によって現在の女性建築家を紹介するものを見よう。七〇年代のアメリカでは女性の建築家に関する展覧会が行なわれるようになったが、一九七七年の『アメリカ建築における女性』展はその最大のものとなる。これに関連してS・トール編の包括的な研究書が刊行された。そして八〇年代には、AIAに初の女性メンバーが選ばれてからちょうど一〇〇年を記念して『例外的な人々：アメリカ建築における女性 一八八八年—一九八八年』展が巡回した(これは『SD』一九九〇年六月号の特集「女性と住環境」で紹介された)。また一九八五年に創立したInternational Archive of Women in Architecture (IAWA) のホームページも有益な情報を提供する。  
(<http://scholar2.lib.vt.edu/spec/iawa/iawa.htm>)  
アメリカの女性建築家史においては、C・ピーチ

## 〈ジェンダー論の本〉基本図書リスト

(\*印を付した本は住総研図書室に所蔵しています。△印のものは、収蔵を予定しています。)

- \* N. Leach "Rethinking Architecture" (Routledge, 1997)
- \* S. Torrey "Women in American Architecture" (Whitney Library of Design, 1977)
- \* "Pioneers: Pioneering Women Architects from Finland" (Museum of Finnish Architecture, 1983)
- \* K. K. Sklar "Catharine Beecher: A Study in American Domesticity" (Yale Univ. Press, 1973)
- △ S. H. Routhelle "Julia Morgan Architect" (Abbeville Press, 1995)
- \* D・ハイデン『家事大革命』(野口美智子他訳、勁草書房、一九八五年)
- \* D・ハイデン『アメリカン・ドリームの再構築』(野口美智子他訳、勁草書房、一九九一年)
- ・ D. Hayden "Seven American Utopias" (The MIT Press, 1976)
- △ D. Hayden "The Power of Places" (The MIT Press, 1995)
- \* R. Gilroy and R. Woods, ed "Housing Women" (Routledge, 1994)
- \* "Women in The City: Housing, Services, and The Urban Environment" (OECD, 1995)
- \* J. Atfield & P. Kirkham, ed "A View from The Interior: Feminist Women and Design" (The Womens Press, 1989)
- \* M. Roberts "Living in a Man-Made World" (Routledge, 1991)
- \* D. Spain "Gendered Spaces" (Univ. of North Carolina Press, 1992)
- ・ G. ポロック、R・バーカー『女・アート・イデオロギー』(萩原弘子訳、新水社、一九九二年)
- \* B. Colomina ed "Sexuality & Space" (Princeton Architectural Press, 1992)
- \* D. Fausch, ed "Architecture: in Fashion" (Princeton Architectural Press, 1994)
- ・ J. Bloomer, ed "Any Number 4: Architecture and Feminine Map - up Work" (1994)
- ・ D・アケレスト『圏外からの建築』(大島哲蔵訳、鹿島出版会、一九九五年)

ヤーとJ・モーガンの二人が重要な存在と考えられるが、それぞれにまつたモノグラフがある。一九世紀に生きた前者は、ピューリタンの思想の影響を受けつつ女性のための理想的な住居を考案し、家庭を女性の聖域とするドメスティック・フェミニストだった。彼女の生涯についてはK・

K・スクラールが詳細に研究している。一方、二〇世紀初頭に生きた後者は、女性初のボザール入学をはたし、住宅を中心に八百以上の作品を手がけた建築家として成功を収めた。彼女の生涯と作品については、S・H・ブーテルの本がその概要を伝えてくれる。ただ、現在からみれば、二人の先駆者には時代の限界が強く刻印されていたことも否めない。

● 闘争のジェンダー論

次に社会的アプローチによって女性の空間を研究し、ときには実践的な闘争の場へ向かうものがある。この分野で精力的な活動を続けているのが、D・ハイデンである。彼女はマテリアル・フェミニストの系譜をたどりながらアメリカ住宅史を再読したり、都市におけるマイノリティの記憶を再生させる研究とプログラム“THE POWER OF PLACE”をすすめている。かつて彼女が一九世紀の宗教ユートピアを研究したのも、それがもうひとつの男女のあり方についての実験場であったからにはほかならない。

八〇年代はハウジングにおけるジェンダーの問題が議論されるが、そうした流れをふまえて“Housing Women”や、都市政策における女性の位置を考察する“Women in the City”が刊行された。言うまでもなく、ジェンダーは生物学的な男女を示すのではなく、社会的に生産される性差のことで、これと空間の関係を扱うものとして次の文献があげられる。建築を含むデザイン史における女性の地位を考察する“A View from the Interior”、女性と住宅設計の関係を論じる“Living in a Man-made World”、そして建築計画における空間の性差を歴史的に読む“Gendered Spaces”などだ。

● ジェンダーの解体へ

最後にジェンダー論のフロンティアをみよう。美術史の分野では、男性に対抗して女性の偉大な作家を探することは、結局「偉大」なものを要する男性のディスクールに回収されるとして、すでにG・ポロツクらの論は偉大さの概念そのものの解体に着手している。また建築の分野では、九〇年代に入り、B・コロミーナ編のアンソロジーを契機に表象の問題として学際的にセクシャリティと空間の関係を論じる傾向がすすむ。この延長線上でD・フォウシュ、J・ブルーマー、D・アグレスト、D・マックオルクオドール、M・ウィグリー、A・ベツキー、D・コールマンらによる刊行物が次々と出版されており、寄稿者の名前をみるだけでも日本に比べて、アメリカでは女性の論客がいかに多いかがうかがえる。最近のジェンダー論で興味深いのは、フーコーやデリダなどの現代思想を援用しつつ脱構築的な議論を展開しているものだ。この彼方ではジェンダーの

- \* D. Agrest, ed. "The Sex of Architecture" (Harry N. Abrams, 1996)
- \* D. McCordule, ed. "Desiring Practices : Architecture, Gender and The Interdisciplinary" (Black Dog, 1996)
- \* M. Wigley, "White Wall" (The MIT Press, 1996)
- △ A. Betsky, "Building Sex" (William Morrow and Company, 1995)
- \* D. Coleman, ed. "Architecture and Feminism" (The MIT Press, 1997)
- △ J. Sanders, ed. "Stud : Architectures of Masculinity" (Princeton Architectural Press, 1996)
- \* K・ヴィンセント 『グレイ・スタディーズ』 (青土社 一九九七年)

基盤を形成するまさに二項対立的な思考そのものが攻撃されることになる。J・サンダースの編者によるアンソロジーでは、これまで女性性から再読することが多かったのに対し、男性性を軸に空間を読むことが多く、しかし、本書は単なるフェミニズムへの反動ではなく、同時にクィアセオリーの側面を初めて建築の領域で展開しようとした意欲作である。クィアとはノーマルとされる異性愛以外のセクシャリティを意味しており、こうした新しい視点によって男子トイレ論やクローゼット論、あるいはゲイの空間などが論じられるのだ。空間がいかに性的な問題を抱えているかは、K・ヴィンセントの著作でも触れられているが、筆者が編集協力する『10+1』一四号（一九九八年）においても特集される予定なので、そちらを参照していただきたい。

(いからし・たろう / 芝浦工業大学・東京理科大学非常勤講師)

財団法人 住宅総合研究財団

一九九八年 日本建築学会賞(業績部門)受賞

「創立以来五〇年にわたる住宅の総合的研究とその普及に関する一連の業績」

日本建築学会は、昭和二十四年以来毎年、建築に関する学術・技術・芸術の進歩発展をはかるとともに、わが国の建築文化を高め、公共の福祉に寄与する建築の各部門において、きわめて顕著な業績に対して表彰をしています。

本年、住宅総合研究財団は、「創立以来五〇年にわたる住宅の総合的研究とその普及に関する一連の業績」について次のように評価され、受賞することができました。  
贈呈式は五月二十九日に日本建築学会で行なわれました。

\*

住宅総合研究財団の前身である新住宅普及会は、日本が戦災による廃墟と化し、公称四二〇万戸の住宅不足という状況にあった一九四八年、緊迫された住宅問題の解決に資せんことを目的として設立された。その後一九八八年、創立四〇年を機に、住宅総合研究財団に改称して今日に至っているが、その間半世紀の長きにわたって日本では数少ない営利を目的としない住宅系研究助成財団として着実に発展してきた。

設立当初はRC造集合住宅の建設を通じての啓蒙的実践活動が中心であったが、その後、研究費助成に活動の重点を移した。とりわけ一九七三年以来二五年にわたって、住宅研究を対象に累積六〇〇件を超える研究助成を通じて質的にも高い多くの研究を世に送り、日本の住宅研究水準を高めかつ活性化させてきた。研究者で構成された委員会形式による公正な審査による公募方式をとり、更に助成だけに終わらず研究成果を厳正に評価し、成果を公刊・公表してきた地道な努力は高く評価されるべきであろう。

また、助成対象をいわゆる建築計画系に限定せず、都市計画、住宅経済、環境分野、更には住宅構法とくに木質構造にも拡げ、かつ最近では社会科学、保健医療などの他分野との共同研究により、学際的、国際的に発展させてきた。

以上の研究助成活動は、文部省科学研究費の量的不足を補うという次元を越えており、質的にも民間団体であるが故の柔軟性を活かし、その時代時代の要請を先取りして機能的効率的に対応し、日本の住宅研究水準の向上に大きな役割を果たしてきたと評価してよいであろう。

その他近年は、研究助成にとどまらず、住総研シンポジウム(一七回)、江戸東京フォーラム(一一九回)など学術的討論会の他、高齢者すまいづくりフォーラム(二三回)、住教育フォーラム(一〇回)、機関誌(すまいるん)の発刊など、住宅に関する啓蒙活動及び市民活動を積極的に展開してきている功績も高く評価される。

住宅総合研究財団は受賞を機に、また新世紀を間近にして、「住」へ焦点をしばった特色ある財団として更なる展開に邁進する所存です。



住総研 刊行物のご案内

新刊

お問い合わせは当財団まで。  
購入ご希望の方は、丸善営業部(電話03-3272-0521)へお申し込みください。

●研究 No.9516

建築・医療・保健・福祉の連携による住宅改造のシステム化に関する研究(2)  
長倉康彦ほか

研究(1)(研究 No.9315)で報告された基本戦略を具体的に展開するためのサブシステムの構築を目指し、日常性を中心とした取り組みの最中、阪神・淡路大震災が発生したため、防災の視点を合わせ、実地調査を基にした豊富なデータにより、問題点・課題を浮きぼりにしている。  
A4判62ページ 本体価格2100円

●住総研「研究年報 No.24」

一九九六年度の研究助成二二件の「研究報告」をはじめ、一九九八年度七月開催の第18回住総研シンポジウムのための三編の委託論文、住総研委員会活動などを収録。わが国の住研究の水準を示すものとして、国内はもちろん、海外でも好評のもの。  
A4判336ページ 本体価格4500円

発売 丸善株式会社



次号予告  
'98年秋号 一〇月一日発行

特集II フォリナーズによる住宅設計  
—異文化との葛藤—

〈焦点〉

フォリナーズによる住宅設計  
片山和俊(東京芸術大学)

〈ミニシンポジウム〉  
異文化との出会いと葛藤

A・レーモンドの残したもの  
三沢浩(建築家・三沢建築研究所)

内田青蔵(文化女子大学)

〈報告〉  
今、異文化の中で設計を進める  
トム・ヘネガン(建築家)

幕張ベイタウンの設計から  
曾根幸一(建築家・芝浦工業大学)

フォリナーズとの設計パートナー  
牛田英作(建築家)

〈すまいるのテクノロジー〉  
住吉の集合住宅の設計方法  
三沢亮一(建築家・三沢アソシエイツ)

〈私のすまいるん〉  
異文化同士、異文化に暮らす  
松田直則(建築家・香港大学)

〈図書室だより〉  
宿谷昌則(武蔵工業大学)

〈すまいる再発見〉  
エリエリ・サリネンハウスの中の北歐  
岸健太(クランブルック大学)

第18回住総研シンポジウム  
創立50周年記念

「地」にどのような「図」を描くか  
未来へのハウジング計画論

七月一〇日に開催いたしますシンポジウムの講演、パネルディスカッションの記録を掲載いたします。シンポジウムの案内は次ページ上段をご覧ください。

タイトルは仮題、執筆者は変更のこともあります。

第18回 住総研シンポジウム・創立五〇年記念

未来へのハウジング計画論

「地」にどのような「図」を描くか

日時 七月十日(金) 九:三〇~一七:四五

会場 建築会館ホール(東京都港区芝五丁目二六番二〇号)

羅針盤を失ってしまった都市住宅の理念を探るには、生活者の立場から、住宅生産の立場から、あるいはデザイン文化の立場からなど、さまざまな立場が考えられる。

これからの時代に、住宅市街地という「地」はどうあるのか、どうあったらよいか、そして、そのビジョンの上に、どのようなハウジング計画がありうるのか、あるいはあったらよいかの「図」を提案して描くという立場で、大局的かつ実践的に、これからの住まいづくりの理念を探りたい。都市計画/建築計画、居住者/計画者、あるいは新築/更新など、さまざまな立場からの講演とパネルディスカッションを通じて議論を深める。

プログラム

I 基調講演

小林 重敬(横浜国立大学教授)

都市計画の仕組みと住宅市街地のあり方

佐藤 滋(早稲田大学教授)

都市計画の構造転換と住宅市街地のあり方の変化

服部 岑生(千葉大学教授)

居住者主体による住宅地の更新  
高容積集合住宅の建築計画の課題

II パネルディスカッション

〈講演〉

早川 邦彦(早川邦彦建築研究室代表)

一般市街地の住まいづくりー建築家の立場から

鈴木 崇英(UG都市設計事務所代表)

沿道型、高層・超高層集合住宅づくりの立場から

間野 博(広島女子大学教授)

住宅市街地の更新による住まいづくりの立場から

大村美雄(住宅・都市整備公団部長)

公共住宅・都市住宅地の計画主体の立場から

〈討議〉

司会 服部 岑生

パネリスト 早川邦彦・鈴木崇英・間野 博・大村美雄

オブザーバー 小林重敬・佐藤 滋

III 懇親会

その他・パネリストの作品をパネルで展示

参加費 一般三〇〇〇円・学生一〇〇〇円

〔資料〕「地」にどのような「図」を描くか・共通テーマ「未来へのハウジング計画論」  
一九九七年度住総研委託論文集(用意します)

お申し込みは、郵便振込(東京・00110336639 財団法人 住宅総合研究財団)

振込締切日 六月二六日(金) 先着順にて、定員一五〇名になり次第締切り

お問い合わせは、財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目一九番八号

電話03-3484-5381 内山/柴原まで

講演のタイトル、パネリスト等に変更が生じる場合もございます。

「地」にどのような「図」を描くか

◇第18回 住総研シンポジウム資料

共通テーマ「未来へのハウジング計画論」

一九九七年度住総研委託論文集

都市計画の仕組みと住宅市街地のあり方

小林重敬(横浜国立大学教授)

居住者主体による住宅地の更新

佐藤 滋(早稲田大学教授)

高容積集合住宅の建築計画の課題

服部岑生(千葉大学教授)

A4判44ページ 本体価格1800円

研究運営委員の交替について

当財団の助成活動に力添えいただいております委員二名が交替となりました。現在は次の方々をお願いしています。

(50音順、\*印は委員長、\*\*印は新任)

在塚礼子\*

内田雄造\*\*

(東洋大学工学部建築学科教授)

坂本 功

(東京大学大学院工学研究科建築学専攻教授)

西 和夫\*

(神奈川大学工学部建築学科教授)

服部岑生

(千葉大学工学部建築学科教授)

広原盛明

(京都府立大学学長)

村上周三

(東京大学生産技術研究所教授)

「まちづくり」の購読について

●発刊日は原則として、冬号一月一六日、春号四月一日、夏号六月一五日、秋号一〇月一日です。したがって、送付開始は、購読料受領後の最新号とさせていただきます。なお、購読手続きには約一週間かかりますので、お含みおき下さい。

●購読満了時にご通知いたしますので、引き続きご購読いただきますよう、お願い申し上げます。

●バックナンバーのお求めにもおたえししております。ご希望の方は、あらかじめ在庫の有無、送料を左記財団まで、ご確認下さい。

購読料は次のとおりです。

一年間 二〇〇〇円(送料共)

三年間 五〇〇〇円(送料共)

お支払い方法

●領収書は、郵便局の払込票兼受領証で代えさせていただきます。財団からは改めて発行いたしません。

●購読期間中の購読中止による購読料返金はいいたしません。

「すまいろん」は次の店頭でも販売しておりますので、ご利用ください(店頭での予約購読の受け付けはしていません)。

● 建築学会資料頒布所 港区芝5-26-20

電話03-3456-2051

● 南洋堂書店 千代田区神田神保町1-21

電話03-329-11338

財団法人住宅総合研究財団

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-18

電話03-3484-5381 FAX03-3484-57994

# 戦後住宅建築史年表

制作Ⅱ中谷礼仁十編集部

年	一般建築・社会	戸建て住宅作品	集合住宅・ニュータウン	著作・思潮	
45	45 戦災復興院発定 46 地代家賃統制令公布 47 小住宅設計競技など計画案さかん、臨時建築制限規定制定 48 住宅総合研究財団の前身・新住宅普及会設立	46 三角ハウス 47 プレモス7型第1号(前川国男、小野薫、山陰工業)クラケンC型組立住宅(倉敷絹織) 48 プレコン住宅(田辺平学)	48 都営高輪アパート	46 「住生活」(今和次郎)	
50	50 臨時建築制限規定住宅制限撤廃、住宅金融公庫発定、八勝館御幸の間(堀口捨己) 51 公営住宅法公布 鎌倉近代美術館(坂倉準三) 52 建築事務所員懇談会(所愁) 結成	50 立体最小限住居(池辺陽) 51 増沢洵自邸 森博士の家(清家清) 52 齊藤助教教授の家(清家清) ロココスト住宅(RIA) レイモンド自邸事務所(レイモンド) 丹下健三自邸 コアのあるH氏のすまい(増沢洵) カニングハム邸(レイモンド) 53 清家清自邸	50 戸山ヶ原都営アパート(建設省) 51 公営五一C型標準設計発表 53 大阪市営古市中生宅	49 「日本住宅の封建制」(浜口ミホ)「明日の住宅と都市」(建設省) 50 「住居学汎論」(吉阪隆正)「すまい」(池辺陽)「国際建築」復刊、	47 「これからのすまい」(西山卯三)「ニューミニズムの建築」(浜口隆二) N A U (新日本建築家集団) 設立 48 「清らかな意匠」(谷口吉郎)「暮らしの手帳」 創刊
55	54 神奈川県立図書館音楽堂(前川国男)、東洋英和女学校小学部(大江宏) 55 日本住宅公団発定、広島平和記念聖堂(村野藤吾)、広島平和記念館(丹下健三)、国際文化会館(前川・坂倉・吉阪)	55 吉阪隆正自邸 57 ウィラーク(吉阪隆正) 石津邸(池辺陽) 傾斜地に建つ家(林雅子) 方形の家(生田勉) 栗の木のある家(生田勉・宮嶋春樹) 杏樹の家(連合設計社市谷建築事務所) 58 吉村順三自邸 村野藤吾自邸 スカイハウス(菊竹清訓) ケーススタディハウス(池辺陽) 59 沼江の家(篠原一男)	55 日本住宅公団発定 57 公園市街地住宅(ゲタばきアパート) 登場	58 晴海高層アパート(前川国男) 民間高層アパート登場(東急) 民間高層アパート登場(東急) トレタマ	54 「建築学大系」刊行開始 55 「空間・時間・建築」(キーディオン) 伝説論争 57 「建築家の主体性の可能性」(伊藤ていじ)「輝く都市」(コルビュジエ)「小住宅設計はなぜ」(伊藤ていじ・磯崎新・川上秀光)「現代建築を動かすもの」(浜口隆二)「中世住居史」(伊藤ていじ) 58 「日本の近代建築」(稲垣栄三)「日本建築技術史」(村松貞次郎)「日本の民家」(伊藤ていじ) 59 「日本の近代建築」(稲垣栄三)「建築の滅亡」(川添登)「建築年報」創刊 60 「日本の都市空間」(伊藤ていじ)「民家は生きてきた」(伊藤ていじ)「間の空間」(磯崎新) GUP研究会 65 「住み方の記」(西山卯三)「S D」創刊
60	60 新安保条約調印、民主主義を守る建築会議発定、名古屋大学豊田記念講堂(横文彦) 田五十八) 61 東京文化会館(前川国男)、大和文華館(吉田五十八) 62 A L C の導入、早稲田大学文学館(村野藤吾) 63 国立京都国際会館コンペ(大谷幸夫、ブレハブ建築協会設立、出雲大社庁舎(菊竹清訓) 64 2×4 の導入、東海道新幹線開業、東京オリピック開催、日本建築センター設立	61 内田祥哉自邸 混構造の家(林雅子) から傘の家(篠原一男) 正面のない家(西澤文隆) 62 軽井沢の別荘(吉村順三) K 氏邸 63 奥羽の家(白井晟一) 国立のH氏邸(清水二) 64 G U P I (内田祥哉)	60 東京計画1960(丹下健三研究室)「建築年報」(発刊) 千里ニュータウン、高蔵寺ニュータウン着工 このころ、泉北、つくば研究学園都市、千葉海浜、港北、北摂など続々着工、大規模開発の時代へ	60 東京計画1960(丹下健三研究室)「建築年報」(発刊) 千里ニュータウン、高蔵寺ニュータウン着工 このころ、泉北、つくば研究学園都市、千葉海浜、港北、北摂など続々着工、大規模開発の時代へ	60 「日本の近代建築」(稲垣栄三)「建築の滅亡」(川添登)「建築年報」創刊 61 「日本の都市空間」(伊藤ていじ)「民家は生きてきた」(伊藤ていじ)「間の空間」(磯崎新) GUP研究会 65 「住み方の記」(西山卯三)「S D」創刊
65	65 地方住宅供給公社法公布 明治村開村 66 大分図書館(磯崎新) 68 霞が関ビル竣工 69 東名高速道路全通、都市計画法施行	65 石間居(堀口捨己) タテシナクラブ(武藤章) 藤木忠善自邸 66 白の家(篠原一男) もうびいでつく(宮脇檀) 六戸邸(鈴木侑) 塔の家(東孝光) 起爆空間(林泰義、富田玲子) 個室群住宅(黒沢隆) 67 規格構成材を用いた住宅・奏邸(剣持竜) 69 林の家(三輪正弘)	68 坂出市人白土地(大高正人) 住宅公団の面開発(足立区日出町団地) 第一号 69 代官山集合住居第一期(横文彦) 多摩ニュータウン起工	68 「デザイン・サウエイ・女木島」(神代雄一郎)「都市のイメージ」(リンチ)「都市住宅」創刊 67 「建築に何が可能か」(原広司)「建築年報」創刊 66 「空間としての建築」(セウイ)「経験としての建築」(ラスマムセン)「建築に何が可能か」(原広司)「建築年報」創刊 65 「住み方の記」(西山卯三)「S D」創刊	

95	90	85	80	75	70
95 阪神・淡路大震災	94 関西新空港開港	89 飛騨の匠文化館 (吉田桂二)	82 建設省CHS構想	75 沖縄海洋博覧会 76 日本2x4協会設立、ハウス55提案競技、重要伝統的建造物群保存地区選定開始 78 成田空港開港	70 安保条約改定、大阪万博開催 71 セキスイハイムM1 (大野勝彦) 72 札幌オリンピック開催、田中角栄「列島改造論」、沖縄本土復帰 74 建設省B1制度導入
96 箱の家 (難波和彦)	93 岡山の住宅 (山本理顕) 明野山荘 (益子義弘)	88 白手川商店 (降幡廣信)	81 名護市庁舎 (象設計集団)	77 上原通りの家 (篠原一男) 松香庵 (武者英二)	70 GUP6 (内田祥哉) 個室群住居 (黒沢隆) 小野正弘 自邸 目神山の家 (石井修自邸)
97 ニラハウス (藤森照信)	92 週末住宅 (中尾寛)	87 結晶のいろ (高崎正治) ROUTUNDA (山本理顕)	80 光格子の家 (葉祥栄) 塚田邸 (六角鬼文) 生蘭学舎 (高須賢吾) 北摂の家 (出江寛) 向井邸 (吉島忠男)	76 中野本町の家 (伊東豊雄) 住吉の長屋 (安藤忠雄)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)
98 100%リサイクルハウス (ミサワホーム)	91 四季ヶ丘の家 (村上徹)	86 開拓者の家 (石山修武) 孤風院 (木島安史)	83 吉祥寺の家 (武藤章)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)
	90 PLATFORMII (妹島和世) トロン電脳住宅 (坂村晋) 白金台の家 (永田昌民) 新百合ヶ丘の家 (高須賢吾)	85 美しが丘の家 (益子義弘) 有田・其泉荘 (三井所清典) 稲葉邸 (下山真司) 宮田家住宅 (小町和義)	82 梅ヶ丘の家 (伊東豊雄) 豊田の家 (大石治孝) 草間邸 (降幡廣信)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	73 宮島邸 (藤井博巳) 川崎市の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)
	94 森の家 (妹島和世)	84 シルバーハット (伊東豊雄)	81 西澤文隆自邸 みるるの阿房 (斎藤裕) 私たちの家 (林昌二・雅子) 浅間隠しの家 (吉田桂二) 中村邸 (山田初江) 那須の山荘 (みねぎしやすお) 茶室宝紅庵 (中村昌生)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	74 ビラモデルナ (坂倉建築研究所)
	95 ドラクユラの家 (石山修武) 那須の家 (吉田桂二)	83 数寄屋邑 (石井和紘) 安食の家 (高須賢吾)	80 日本住宅公団、住宅・都市整備公団へ改組	79 勝浦の家 (池原義郎) NADJAの家 (北河原温)	75 パサデナイナイツ (菊竹清訓)
	96 箱の家 (難波和彦)	82 葛西クリンタウン・清新北ハイイツ (住都公団) にリビングアクセス住戸	81 日本住宅公団、住宅・都市整備公団へ改組	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)	76 茨城県常水戸六番池田地 (藤本昌也・現代計画研究所)
	97 ニラハウス (藤森照信)	81 ベルコリーヌ南大沢 (住都公団)	80 石川県営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	77 芦屋浜高層住宅プロジェクト (ASTM企業連合) 行徳ファミリア (二色建築設計事務所)	77 茨城県常水戸六番池田地 (藤本昌也・現代計画研究所)
	98 100%リサイクルハウス (ミサワホーム)	85 アトリウム (早川邦彦) ユニコート (京の家づくり会設計集団)	79 熊本市営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)
		92 熊本市営保田窪第1団地 (山本理顕) コモンシティ星田 (坂本一成) 岡山県営中庄団地1期 (丹田悦雄・空間工房十岡山県設計技術センター)	80 石川県営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	79 芦屋浜高層住宅プロジェクト (ASTM企業連合) 行徳ファミリア (二色建築設計事務所)	79 芦屋浜高層住宅プロジェクト (ASTM企業連合) 行徳ファミリア (二色建築設計事務所)
		91 ネクススワールド (福岡地所)	79 熊本市営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)
		90 熊本市営保田窪第1団地 (山本理顕) コモンシティ星田 (坂本一成) 岡山県営中庄団地1期 (丹田悦雄・空間工房十岡山県設計技術センター)	78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)	77 芦屋浜高層住宅プロジェクト (ASTM企業連合) 行徳ファミリア (二色建築設計事務所)	77 芦屋浜高層住宅プロジェクト (ASTM企業連合) 行徳ファミリア (二色建築設計事務所)
		89 熊本市営龍蛇平団地 (元倉真琴・スタジオ建築計画)	77 熊本市営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	76 茨城県常水戸六番池田地 (藤本昌也・現代計画研究所)	76 茨城県常水戸六番池田地 (藤本昌也・現代計画研究所)
		88 熊本市営保田窪第1団地 (山本理顕) コモンシティ星田 (坂本一成) 岡山県営中庄団地1期 (丹田悦雄・空間工房十岡山県設計技術センター)	76 茨城県常水戸六番池田地 (藤本昌也・現代計画研究所)	75 パサデナイナイツ (菊竹清訓)	75 パサデナイナイツ (菊竹清訓)
		87 熊本市営龍蛇平団地 (元倉真琴・スタジオ建築計画)	75 熊本市営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)
		86 熊本市営龍蛇平団地 (元倉真琴・スタジオ建築計画)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)
		85 アトリウム (早川邦彦) ユニコート (京の家づくり会設計集団)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)
		84 雲能としての建築 (渡辺豊和)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)
		83 住まい塾 (高橋修一) 家づくりの会 (発足) (泉幸甫)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)
		82 パラック浄土 (石山修武) 住居形式考 (山本理顕)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)
		81 戦後建築論ノート (布野修司) 幻想を捨てて、町へ出よう (石山修武×多木浩二)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)
		80 戦後建築論ノート (布野修司) 幻想を捨てて、町へ出よう (石山修武×多木浩二)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)
		79 熊本市営諸江団地 (藤本昌也・現代計画研究所)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)
		78 都住創松屋町住宅 (都住創) 白髭東地区防災拠点住棟 (日建設計)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)
		77 建築生産のオープンシステム (内田祥哉) 形式としての住居 (山本理顕)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)
		76 建築生産のオープンシステム (内田祥哉) 形式としての住居 (山本理顕)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)
		75 建築生産のオープンシステム (内田祥哉) 形式としての住居 (山本理顕)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)
		74 市街地住居形態試論 (藤本昌也) コートハウス論 (西澤文隆) 都市住宅 年間テーマ「保存の形態学」	74 成城の家 (篠原一男) 吉岡邸 (渡辺豊和) 太陽熱の家 (木村健一)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)
		73 市街地住居形態試論 (藤本昌也) コートハウス論 (西澤文隆) 都市住宅 年間テーマ「保存の形態学」	73 焼津の文房具屋 (長谷川逸子) 山川山荘 (山本理顕)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)
		72 バイロットハウス入選作品集 (日本建築センター) 住宅論 (篠原一男) 都市住宅 年間テーマ「集住体」	72 栗津邸 (原広司) 反住器 毛綱モン太 カラス城 (山根鏡二)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)
		71 意味の空間 (多木浩二) 都市住宅 年間テーマ「セルフエイド系の発見」 A+U 創刊	71 まつかわばつくすー (宮脇檀) 水無瀬の町家 (坂本一成) アルミの家 (伊東豊雄) 水無瀬の町家 (坂本一成)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)
		70 住宅は叫ぶ(書) 日本土人会設立 都市住宅 年間テーマ「コミュニティ研究」	70 桜台ビレッジ・桜台コートビレッジ (内井昭蔵) 第3スカイビル (渡辺洋治)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)	75 幻庵 (石山修武・ダムダン)

本年表は、「建築文化」「住宅建築」「新建築」「都市住宅」などの雑誌掲載記事を資料に作成。竣工年は、一部、実際とは前後している場合があります。

## 編集後記

昭和とは、いったいどんな時代だったのか。諸先輩の原稿を読みながら、私はそんなことを考えている。昭和という時代は、大まかに区切ると、前半が軍部の台頭と戦争、中が敗戦と混乱、後半が繁栄と無秩序という極端な変化に揺れうごいている。私自身、昭和一けたの生まれです。六〇年余りが過ぎ、現在のいつわりの繁栄とその崩壊に身をおいている。

一九四五年八月一日のことは、長い歳月を経た今日でも不思議なくらい鮮明に記憶している。三月一日の東京大空襲以降、次第に空襲も激化し、勤労動員された工場も焼失し、麻布十番で本土決戦に備えて、巨大な防空壕掘りに駆り出され、そこで終戦を迎え、いわゆる「玉音放送」を聞いたのである。中学三年生であった。

あれから数えて五三年、今年もくる八

月一日を、現実との落差のなかで、私たちは、どう迎えるのだろうか。

井伏鱒二原作・今村昌平監督の映画『黒い雨』の主人公、北村和夫演ずる閑間重松のうめくような「正義の戦争より、不正義の平和のほうが、まだましじゃ」のセリフが、いまでも重く耳に残る。

ふと、花菖蒲の林立する姿を思いだし、裏参道から明治神宮の鳥居をくぐった。六月は初めのことである。人影のまばらな砂利道は、両側が緑深い森に囲まれる。この道を行くのは初めてではない。大先輩の横山不学さんと一緒したのは、もう何十年前のことだったろう。木立を抜けて笹の小路をゆくと池があり、菖蒲田はその時と同じように、満開であった。不学先生には、よく絵の展覧会に誘っていたのだが、人との出会いの大切さを、それとなく教えていただいたものだ。そんなことを考えながら、もう一度、先輩たちとの出会いを思い出している。  
(本号責任編集 立松久昌)

## 住宅総合研究財団(略称 住総研)

昭和二三年、当時の清水建設社長・清水康雄により、戦後の窮迫した住宅問題を、住宅の総合的研究、および成果の公開、実践、普及によって解決することを目的として設立された財団法人であります。

現在は住宅に関する研究助成事業を中心とし、「研究年報」「研究論文」を発刊、また住に関する専門図書室、セミナー室等を整備、公開、社会のお役に立つよう、公益事業につとめております。

この「すまいるん」は、活動の一環として、成果の一端を、市民、実務者、研究者の皆様に、より広く、より手軽にご理解いただくとともに、その意見交流の場になることを願って刊行(季刊)されているものです。ご利用のほど、よろしくお願い申し上げます。

季刊 すまいるん 98年夏号

一九九八年六月一日発行

頒価 500円

発行 財団法人 住宅総合研究財団  
発行人 峰政克義

〒156-0055 東京都世田谷区船橋四丁目29-8

TEL (03) 3484-5381

FAX (03) 3484-5794

E-mail: jusoken @ nxi. mesh. ne. jp

URL: http://www. jusoken. or. jp/

## 編集委員

服部岑生 (千葉大学建築学科教授)\*

片山和俊 (東京芸術大学建築科助教授)

小林秀樹 (建設省建築研究所)

野城智也 (東京大学大学院工学系研究科助教授)

立松久昌 (月刊「住宅建築」顧問)

\* 委員長

● 制作 建築思潮研究所

印刷・製本 慶昌堂印刷株式会社